Defective Swordsrman

欠陥人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｆｅｃｔｉｖｅ　Ｓｗｏｒｄｓｒｍａｎ

【Ｎコード】
Ｎ７７７９Ｆ

【作者名】
欠陥人

【あらすじ】
彼は全てに愛されなかった。故に彼は孤独を知り、故に彼は嫌悪され、故に彼は強くなる。彼女は全てに愛された。故に彼女は愛を知り、故に彼女は苦しみ、故に彼女は強くなる。人と精霊が共に生きる世界で紡がれる物語。紡ぎ手は、闇よりも黒き剣士と空よりも青き魔術師。黒と青が織りなす物語、どうぞご覧あれ。

黒と青

薄暗い大きな部屋、漂うのは様々な酒の匂い。その中で沢山のいかつい男や、まるで男の様な女達が酒を飲み交わしている。

「お願いです。私に力を貸して下さい！！」

そんな場所の一つのテーブルに座る二十代前半の顔つきをした青年に、青い髪を腰の辺りまで伸ばした人物が、必死の形相でそう言った。

二十代前半であろう、整った顔をした青い瞳の女性。だが、薄めのローブの下に見えるのは、女性と呼ぶには物足りないスタイル。出るべき場所が全く出ていない、更に引っ込むべき場所は引っ込んで、正に理想的なまな板を作り上げている。スタイルだけなら少女だ。

（面倒なのが来た……）

そんな女性に、テーブルに座る青年は素直にそう考えた。

闇の様な黒い髪をした青年には、ある持論があった。『美人は面倒事を背負ってやって来る』、そんな持論である。

「悪いが力を貸してくれと言わ」

「お願いします！！」

青年が最後まで言い切る前に、女性の声が遮った。青年は思わず頭を掻く。

そんな光景を見てか、周りのテーブルからは、協力してやれよ、何なら俺が、等と聞こえてくる。
周りからの声を聞き流しながら、青年はある疑問を口にすることにした。

「何で俺なんだ？」

素朴な疑問。急に見知らぬ人間に助けを求められたら、きっと誰しもが疑問に思うだろう。
正義感の塊の様な人間ならば何も聞かずに協力するかもしれないが、生憎、青年はその様な正義感の塊ではない。

「だって貴方は、あのクレス＝バーキンスさんですよね？」

女性が口にしたのは、青年の名。
それは最近巷を騒がせている名であった。

「確かに俺はクレス＝バーキンスだ。けど、何で知ってるんだ？」

「黒髪に黒い瞳、そんなの貴方以外にいませんから」

そこでクレスは周りを見回した。見回す必要など全くなかったのだが、クレスは何となくそうしようと思ったのだ。
黒髪に黒い瞳、そんな人物はクレス以外にその場にはいない。世界中を探しても、クレス以外にいるのかさえ謎である。
だが、そんな珍しい容姿がクレスを有名にしているわけではない。

「お願いです、力を貸して下さい。最強の剣士！！」

訴えかける様な女性の表情。そんな表情を浮かべながら女性がテ

ーブルを力強く叩いた瞬間に、周りのテーブル、いや、酒場中から笑いが起きる。

「な、何が可笑しいんです！？」

女性は笑われた事が余程恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして叫ぶ。その顔はまるで熟れた林檎に近い。

「嬢ちゃんよ」

そう言って口を開いたのは、スキンヘッドの大男。全身が筋肉で覆われているためか、まるで筋肉の鎧を纏っているようだ。

「クレスは確かに剣の腕は超一流だ。だが、クレスはな、魔術が使えねぇんだよ」

「……魔術……が？」

女性が大男の言葉に目を丸くしてクレスを見つめると、クレスは目を瞑ったまま首を縦に振った。

そのクレスの行動に、女性は更に目を見開く。今にも眼球が飛び出してしまいそうだ。

「あ、あり得ません！！　魔術が使えないなんて！！　……皆でグルになって私を騙す気なんですね！？」

女性が目を見開き整った眉を吊り上げながらそう言った瞬間、酒場中に響いていた笑いがピタリと止む。そして酒場にいた全ての人間の視線が女性を射ぬいた。

「なっ……」

肌に刺さる様な視線を受けて、女性はたじろいだ。

そして気づいた、酒場中から向けられる視線に、怒りも混じっている事に。

「行くぞ」

クレスは立ち上がってそう言うと、女性の手を掴む。そして酒場の入口に向かい、女性を引きずって行く。

先に女性を酒場の外に出すと、クレスはくるりと振り返った。

「ちょっと出てくる」

クレスが笑顔でそう告げると、殺伐とした酒場の雰囲気が一気に和む。酒場にいた人間達は、皆笑顔を浮かべてクレスを見送った。

街の中心にある広場。広場の真ん中には、女神を象った石造りの噴水が建てられている。その周りに置かれたベンチでは、家族連れや若い男女が思い思いに過ごしている。

女神像の真っ正面に置かれたベンチに、クレスと女性が隣り合わせに座っていた。

「俺は魔術が使えない」

まるで子供に教え事をする様に、クレスが言った。

それを聞いた女性は、今度は目を見開くのではなく眉間に皺を寄

せて反応する。

「そんなのあり得ないです」

流石に広場と言うこともあってか声量を落とした女性は、酒場で発した言葉をまた口にする。

「魔術が使えないなんてあり得ません！！」

だが、やはりと言うべきか。女性の声は段々と大きくなり、最後には叫びへと変わっていた。ほんの少し怒りを含んだ様な叫び。言い終わって周りからの視線に気付いてか、女性はまた顔を真っ赤にする。そんな女性を見ながら、クレスは溜め息を吐いた。

（信じられないのも無理ないか……）

実際に、女性が言うことは正しかった。

この世界『エルディア』において、魔術は生活に欠かせない物となっている。そして、全ての人間が絶対に使える物とされている。エルディアに生まれた者は皆、生まれた瞬間に、火・水・風・土の精霊、何れかに必ず愛される。それが普遍的な物とされている。そして精霊に愛された事で、四精霊が司る属性の何れかから派生した魔術を使う事が出来る様になるのだ。

「俺は精霊に愛されなかった……」

クレスはそう言って空を見上げた。空は青く澄み切っている。所々にゆったりと浮かぶ白い雲が、穏やかさを漂わせていた。

「本当に使えないんですか？」

女性は眉を寄せながら、恐る恐ると言った感じで口を開く。

クレスが魔術を使えない事を知った人間はいつもこうだ。まるで捨てられた子犬を見る様な眼差しか、軽蔑をする様な眼差しを浮かべる。

「あぁ」

クレスはその眼差しを感じてか、ぶっきらぼうにそれだけを告げた。

女性は前者だった、軽蔑されないだけまだましだったろう。

酷い者ではクレスを鼻で笑い罵る様な人間もいた。だが、クレスはあまり気にしない様にしている。一々気にしていたら身がもたないのだ。

クレスがそんな風に考える様になったのは、所属しているギルドのおかげだ。

先程クレスがいた酒場こそが、ギルド『フォーセリア』である。つまり酒を飲んでいた人々は皆、クレスのギルド仲間なのだ。

あのギルド仲間達こそが、クレスを初めて真っ当な人間として扱ってくれた。クレスにとって、初めての家族なのだ。

今ではクレスが魔術を使えない事も、酒の肴程度にしか考えていない。

「あんたがどんな噂を聞いたか知らんが、俺の噂と言えば魔術が使えない出来損ない程度だぞ」

クレスが言ったのは本当の事だ。『黒髪、黒目の、魔術が使えない出来損ない』。それがクレスに立った噂だった。

人間と言う生き物は恐ろしく残酷である。自分達と違った外見で魔術が使えない、それだけでクレスを、まるで化け物の様に扱うのだから。

「ってわけで、俺じゃあんたの力にはなれない。他をあたってくれ」

クレスはそれだけ言うと、ベンチを立ち上がろうとする。が、それは出来なかった。

クレスの左腕を、女性が掴んでいたのだ。振り払おうと思えば簡単な事だが、それをするのも気が引ける。

「……いで下さい」

「はっ？」

顔をうつ向かせた女性が何か呟くが、クレスにはよく聞き取れない。

次の瞬間、女性が勢いよく顔を上げる。その表情からは、明らかな怒りが感じ取れる。

「ふざけないで下さい！！　遠路遥々、噂を頼りに来てみれば、魔術が使えない駄目剣士ですって！？　ふざけないで下さい！！」

女性が一気に捲し立てる。その大声は、広場にいる全員の時を止めるのに、充分な威力を持っていた。

（また叫ぶとは……）

クレスは耳を押さえながら、肩で息をする女性を見つめる。

（……学習能力はゼロだな）

女性は言い切ると肩で息をしながら、またやってしまったという様な表情を浮かべる。そしてまた、顔を真っ赤にした。

時が止まっていた周りの人々も、次第に動き始める。小さな子供に至っては、学習能力ゼロの女性を指差して笑っていた。

「こ、こうなったら、駄目剣士でもいいです。協力して下さい」

その言葉にクレスの眉毛がピクリと反応した。

「あんたな、さっきから人を駄目剣士呼ばわりしやがって、一体何なんだ！？」

「魔術も使えない駄目剣士に、駄目剣士って言って何が悪いんですか？」

謝る気などさらさら無いと言った風な女性の言葉が、クレスの苛つきを加速させる。

「ふざけんな！！　大体自分の名前も名乗らない様な奴に、ろくな奴がいるわけねぇ！！」

二人の言い合いが始まった事で、平穏を取り戻しつつあった広場の時が再び止まる、かに見えた。だが、言い返すかと思われた女性は、急に平然とした表情を浮かべる。

「確かに名前を名乗っていないのは、失礼でしたね。私はシェリス、シェリス＝ミアルタです。シェリスと呼んで下さい」

「あ、あぁ」

肩透かしをくらったクレスは、気の抜けた返事しか出来なかった。すると、さっきまで怒っていた事が、酷く間抜けな事に思えてくる。

（俺もまだまだガキって事かな……）

「それに少し訂正します。貴方はれっきとした剣士ですね」

急に百八十度方向転換したシェリスの言葉に、クレスは目を丸くした。

「ただし……世界に一人だけの」

「世界に一人だけ？」

シェリスの独特な言い回しに、クレスは思わず聞き返していた。そんなクレスを見て、シェリスが微笑む。

「そうです。貴方を剣士と分類するならば、世界にただ一人の剣士です」

クレスにはシェリスの言いたいことが全くわからない。

「普通の剣士は魔術と剣を使って闘いますが、貴方は剣だけ」

クレスは当たり前だと頷く。自分の事は自分が一番分かっている、と言いたげな表情。

そこでクレスは、シェリスから目を逸らしたくなった。シェリス

が言いたい言葉が分かり始めてしまったからだ。

「つまり貴方を剣士と分類するならば、他の剣士は『魔剣士』と言ったところです」

『魔剣士』、そんな言葉はこの世界エルディアには存在しない。剣士は剣士である。魔剣士とはシェリスが作り上げた造語にすぎない。

だが、クレスはその言葉に納得がいった。それと同時に、自分は『ただの』剣士でしかないと痛感させられる。

「つまり貴方は……」

シェリスがそこまで言った所で、クレスは遂に目を逸らした。逸らさないでいようと思っていた筈が、自然に逸れていた。

クレスはまるで胸に剣を突き付けられた様な気がしていたのだ。

「欠陥品でしかない」

その言葉により、クレスの胸に突き付けられた剣は、グサリと音を立てながら深く深くまで突き刺さる。

突き刺さった剣は、新しい傷を付けるだけでなく、クレスの古傷を抉っていく。

「悔しくはないんですか？」

（悔しいに決まってる！！）

敢えて口にはしないクレスと、そんなクレスを見つめるシェリス。

その光景は、人々で賑わう中央広場には不釣り合いなものだった。

そしてそれは、シェリスの狙い通りの形。

「悔しいなら私を助けて下さい」

「はっ？」

クレスは思わず間抜けな声を出した。話の繋がりが余りにも見えなかったのだ。

間抜けな表情を浮かべるクレスとは違い、シェリスは至って真剣な表情を浮かべている。

「お願いです！！」

最初にあった時の様に、必死の形相でそう言うシェリス。変わった事があるとすれば、シェリスがクレスの事をちゃんと知ったという事。

「……俺でいいのか？」

今までクレスは人に『必要』とされた事がなかった。

ギルドの仲間達は『認め』てはくれたが、必要としてくれていたとは少し違う。ただ、彼らはクレスに居場所を与えてくれた。

「貴方が必要なんです」

シェリスは初めてクレスを必要と言い、クレス自身に居場所を作らせようとしている。

「だって魔術も使え」

「けれど、剣術は超一流なんですよね？」

クレスが言い終わる前に、シェリスの透き通った声が割って入る。まるで楽しむような表情を浮かべるシェリス。

「お願いします」

そう言って目を伏せ頭を下げるシェリスを見た時、クレスはあるイメージが頭に浮かんだ。

そのイメージは、顔を上げたシェリスを見た瞬間に確かなものとなる。

顔を上げたシェリスと、その後ろにある噴水の女神像は瓜二つだった。

「イーユデッサ……」

クレスが呟いたのは、最も有名な水の大精霊の名であった。

理由

「じゃあ、明日には旅立つのか？」

「あぁ」

酒場兼ギルドの奥にある一室。生活に必要な物以外は置いていない、至ってシンプルな部屋。

クレスとシェリスは、そこにあるソファに隣り合わせに座っていた。

その対面には、赤い短髪の身体付きががっしりとした男性。顎には無精髭が生えていて、それが渋さを醸し出している。更に特徴的なのは、身体中にある沢山の傷。その傷が、男性のこれまでの人生を表していた。

「寂しくなるな……」

この男性の名は、アレン＝バーキンス。クレスの育ての親であり、ギルド『フォーセリア』の長である。

約十五年前、孤児だったクレスを拾い育て、名をやり居場所を与えたのが、アレンであった。

「俺がお前を拾ったのは、今のお前の歳位の時だった」

急にそんな話を始めたアレンに、シェリスは眉を寄せる。そしてクレスはまた始まったか、と言いたげな表情をしていた。

「あの時の俺はまだギルドに所属していなくてな、お前はまだ小さいし……」

黙々と話し続けるアレン。何故かその瞳はうるみ始めていた。

「あの、クレスさん」

「何だ？」

アレンに聞こえない様にと、小さな声で耳打ちをするシェリスと、全く気にせず本来の声量を維持するクレス。端から見ればそれは滑稽にしか映らない。

「アレは何です？」

そんなクレスを見てか、シェリスもいつもの声量に戻すとアレンについて尋ねた。

その間にもアレンは黙々と喋り続ける。

「アレンだ」

「名前はさっき聞きました。あの行動です」

シェリスはほんの少し眉を吊り上げながら、アレンを指差す。

指を差されたアレンは、そんな事に気づかず喋り続けている。遂には涙を流し始めた。

「……所謂、親バカだな」

「……なるほど」

クレスの言葉に、シェリスは納得する以外の行動が思いつかなかった。

クレスの言った通り、アレンは見かけと違い自他共に認める親バカである。その親バカレベルは酷い物で、クレスが仕事で二、三日ギルドを空けただけで、心配して飛び出した事がある程だ。

そんなアレンだからこそ旅立つ事を絶対に反対すると思っていたクレスは、ちょっと拍子抜けしていた。

（まさか、すんなりオッケーとはな……）

未だに喋り続けるアレンを見つめながら、クレスはまさかの事態にほんの少し困惑していた。

「ところで、旅の目的は？」

黙々と喋り続けていたアレンが、急に真面目な顔で真面目な話を振る。

シェリスは、それを見て一瞬目を見開く。クレスは慣れているのか、平然としていた。

「実は俺もまだ聞いてない。旅に付いて来て欲しいとしか……」

クレスはそう言って、隣にいるシェリスへと視線を移す。急に男性二人に見つめられたせいか、シェリスは一瞬たじろぐが、直ぐに冷静になると口を開いた。

「アレンさんは口が堅いですか？」

アレンは顎に手をやり、綺麗に手入れされた無精髭を擦る。アレンが考え事をする時の癖だ。

「それなりに堅い方だ」

（嘘つくな）

アレンが言葉を発した瞬間に、クレスは否定の意見を心の中で呟いた。アレンは秘密と言われれば言われるほどに、言いたくなってしまう性分だ。

特に酔った時のアレンは酷い。だからこそギルド内では、自分のプライバシーに関わる事はアレンに言わないでおくのが暗黙の了解となっている。

「それなら大丈夫ですね」

シェリスは笑顔で話し始める。その表情は完璧にアレンを信用していた。

「私の目的は、世界を救う事です」

唐突に、アッサリと、勿体振る様な仕草も無く言われた一言に、クレスとアレンの目が同時に見開いた。

「はっ？」

そう言ったのも二人同時であった。義理とは言えど、流石は親子である。

そんな二人を見て、シェリスは口角をほんの少しだけ吊り上げた。しかし、次の言葉を発するため一気に表情を強ばらせる。

「詳しく言うならば、四賢者の一人、『土の賢者』マクバル＝オーキッドを倒すこと」

シェリスの澄んだ声は、ほんの少し緊張を含んでいた。

「四賢者を……」

シェリスの話を聞いたクレスは、ふと呟いていた。

『四賢者』、それはこの世界エルディアを支える四つの柱。そして、大精霊に愛された者達。魔術が使えないクレスでも知っている、一般常識。

『大精霊』、それはそれぞれの属性の頂点に立つ精霊を言う。エルディアの豊かな自然は、この大精霊の力によって維持されているのだ。

「何故土の賢者を倒さねばならないんだ？」

アレンが尋ねた言葉に、クレスも首を縦に振る。

賢者が一人いなくなれば、次の賢者が見つかるまで、世界の均衡が崩れる。世界の均衡が崩れれば、何かしら善からぬ事が起きる。それは周知の事実である。

つい最近では『水の賢者』が急に倒れたため、雨が降らなくなるなどの現象が起きた。幸い後釜が直ぐに見つかり、大事には至らなかったが。

「土の賢者は大精霊の力を使い、自分の欲望を満たそうとしているんです」

悔しそうな表情で、ゆっくりと言葉を紡ぐシェリス。その表情が、事の重大さを告げていた。

「それに、師の仇でもあります」

シェリスがそう言った瞬間、クレスの背に悪寒が走る。まだ知り合って間もないシェリスから発せられる殺気に充てられたのだ。

対面に座るアレンは、クレス以上に殺気に充てられていた。知らず知らずの内に、アレンの背中を冷たい物が流れる。様々な死線をくぐり抜けてきたアレンだが、これ以上の殺気に充てられた事は未だかつて無かった。

これ以上追求してはいけない、アレンの長年の勘がそう告げていた。

「シェリスの師匠って？」

アレンの考えなど知らぬクレスは、殺気を感じながらもどうしても聞いておきたかった。これから先旅を共にする仲間であるし、それくらいは知っておくべきだと思ったのだ。

するとクレスの言葉を聞いたシェリスが微笑む。これはアレンの予想外の事だった。

「最高の師でした。元水の賢者、ラムセル＝アリディーニ。それが私の師です」

その名を聞いた瞬間に、クレスの中である疑問が生まれた。その疑問を解くために、クレスは口を開く。

「つい先日亡くなった水の賢者は病死って聞いたけど……仇ってど

ういう事だ？」

「あれは人々が混乱を起こさないように、作られた話です」

世界を支える四賢者の一人『水の賢者』が、『土の賢者』に殺された。その事実が人々に行き渡れば、混乱は免れない。それを隠すために作られた話。

クレスはその言葉に納得がいくと、目の前にあるテーブルに置かれたグラスに手を伸ばす。グラスを手に持つと、中に入った琥珀色の液体が揺れる。溶けた氷がグラスに当たり、小さな音を立てた。

「何で水の賢者は殺されたんだ？」

対面にいるアレンが口を開いた。その手には、クレスと同じ様に琥珀色の液体が入ったグラスが握られていた。

「我が師は、土の賢者の陰謀に気づいたんです」

「陰謀に？」

思わず、話を聞く側に回ろうとしていたクレスが口を出していた。

「えぇ、土の賢者は大国セレスタをのっとろうとしているのです」

この世界エルディアには四つの大きな大陸がある。その四つの大陸は、それぞれ国として成り立っている。

最も大きな大陸を統治するのが、話にも出た『セレスタ国』。次に大きな大陸を統治するのが、『アヴェルタ国』。そして一番小さな大陸は『カルサア国』が統治している。クレス達が暮らしている

のは、『ハルメリア国』が統治する大陸である。
四つの国の頂点に立つのは、それぞれの国の国王。そして、それぞれの国の象徴とされているのが、大精霊であり四賢者である。
セレスタは土を、アヴェルタは炎を、カルサアは風を、そしてハルメリアは水を象徴としている。

四大精霊はそれぞれが一つの大陸を守護し、その大陸を動く事はない。そのために象徴とされ、人々の中にはそんな大精霊を『守護神』と呼び敬う者も多いのだ。
しかし、あくまでも大精霊と賢者は象徴に過ぎない。シェリス曰く、その賢者が国を支配しようとしているのだ。

「賢者が国を！？」

クレスはシェリスが言った事を信じる事ができなかった。否、信じたくなかった。
人々が安心して暮らすために世界の均衡を保つ賢者。小さな頃から英雄だと教えられてきた賢者が、何故国を支配しようとするのか、クレスには全くわからなかった。

「土の賢者マクバルは、セレスタ国を支配することで、他の国に戦争を仕掛ける気なんです」

「何のために？」

アレンがグラス片手に尋ねる。その瞳は、いつの間にか険しいものへと変わっていた。

「さっきも言いましたが、自らの欲望のため」

シェリスはそこまで言うと、自分の前に置かれたグラスに手を伸ばす。中にはクレスとアレン同様に琥珀色の液体が入っている。

「自らが世界の頂点に立つために……」

（……つまり土の賢者を止めることイコール、世界を救うって事か）

クレスがシェリスの言葉にそんな事を考えていると、シェリスは悔しそうな顔をしながらグラスを傾ける。琥珀色の液体が口に入った瞬間、シェリスは目を見開いた。

「こ、これ、お酒じゃないですか！？」

慌てた口調でそう言うシェリスに、クレスとアレンは同時に頷くと、美味いだろ、と言いながらグラスを口に運んだ。

「わ、私、お酒は……」

シェリスは最後まで言い切る前に、隣にいたクレスの膝に倒れこんだ。その様子は、まるで糸が切れたマリオネットの様だった。

「アレン、毒でも入れたのか？」

「まさか、『賢者様』が弱すぎるんだろうよ」

「賢者？」

クレスが首を捻りながら口にした言葉に、アレンが思わず溜め息を吐く。

「バカ息子、そんな事もわからないのか……」

アレンはそう言ってまた溜め息を吐く。クレスの膝の上では酒に弱すぎるシェリスが、いつの間にか寝息を立て始めていた。

「賢者の弟子だぞ。大精霊に愛されるには充分な存在だ」

大精霊に愛されるには、立派な魔術師であることが重要である。

この世界エルディアでは、精霊にさえ愛されれば魔術を使う事は出来る。つまりはクレス以外の人間全てだ。

だが、魔術と言えどピンからキリ。中にはほんの少し火を出したり、水をちょっとだけ操るなど、大した事しか出来ない者もいるのだ。クレスにはそれさえ出来ないが。

そのため、魔術師に成れる者は限られている。正確に言えば、魔術師を名乗れる者が限られている。魔術師を名乗るには、国が行う試験を通過しなければならないのだ。

更に魔術を使うには精霊とのシンクロが重要であり、沢山の魔術を使うにはそれだけ精霊とのシンクロができなければならない。

ちょっとしたシンクロならば誰にでも出来るが、高位魔術を使うにはより完璧なシンクロが必要になる。つまり、精霊とシンクロする素質が無ければならないのだ。

「けどそれだけで……」

賢者とは言えない、と言おうとしたクレスは、アレンが壁を見つめている事に気づく。正確には壁に掛けられた真っ青なローブ。さっきまでシェリスが着ていた物だ。

「お前はあのローブに付いてる石の意味を知ってるか？」

アレンの言葉に、クレスはローブの胸元に着いた石を見つめる。ローブと同じ真っ青な丸い石は、薄暗い中でも神秘的な光を放っていた。

クレスは必死に自分の記憶を呼び覚ますが、あの石に対しての記憶が何処にも無い。仕方なく、クレスは首を横に振った。

「まぁ知らなくても無理ねぇか。アレはそれぞれの賢者に受け継がれる魔石だ」

「そうなのか？　ってアレンが何でそんな事……」

「これでもギルド長だ、色々と知ってんだよ」

アレンはそう言ってグラスを傾けた。妙に様になっているその姿は、クレスが幼い頃から見てきた姿と変わりない。

（少し老けたよな……）

いつもは全くそんな事は考えないクレスだが、何故か今日はそんな風に考えていた。

明日には旅立つ、それがクレスにそうさせたのだが、クレス自体はそんな事には気づいていない。

「それにしても、ようやく一人立ちするかと思いきや、それが賢者の手伝いとはな……」

アレンはそう言って、急に目頭を押さえた。

「……流石は俺の息子だ」

「……親父」

クレスが久しぶりに言った『親父』と言う言葉に、アレンは遂に嗚咽を耐えられず、鼻水を垂らしながら泣き始めた。

（……ホント、バカだな）

クレスがそう思ったのは言うまでもない。

旅立ち

黒のズボンにいかつめのブーツ、そして肩が出る形になっている赤いシャツを着たクレスは、目の前にある扉を何度かノックする。ノックする腕は剣士にしては細いが、形のいいしなやかな筋肉が付いている。

「はい」

すると中から澄んだ声が聞こえてきた。

「クレスだ、入って大丈夫か？」

「いいですよ」

クレスはその声を確認すると、扉を開き部屋の中に歩を進めた。クレスが足を進める度に、首から下げたペンダントの鎖がジャリジャリと音を立てた。鎖の先には、盾を貫く剣が付けられている。

「よっ、起きてたか」

クレスが右手を挙げながらそう言うと、ベッドに座った人物シェリスは、口角をほんの少し吊り上げ微笑んだ。

シェリスの格好は昨日クレスの膝で寝てしまった時と変わらない。白い半袖のシャツに青いズボン、そしてシンプルなブーツ。首からは、菱形をした水色の石のペンダントが下げられていた。

「えーっと、私は昨日どうしたんでしょう？」

シェリスが悩ましげな表情を浮かべながら、クレスを見つめる。

「酒飲んだ瞬間に俺の膝で寝た」

クレスは昨日起きた事を至って簡潔に言葉にした。するとシェリスの顔が真っ赤に染まる。

「す、すみません」

ちょっとうつ向いたシェリスがそう言うのを見て、クレスは微笑んだ。

内心では昨日の殺気を漂わせたシェリスとの違いに少しだけ驚いている。

「あの、私を運んでくれたのは……」

何故か恐る恐る言葉を発するシェリス。クレスはそんなシェリスを見つめながらも、事実だけを伝える。

「あぁ、俺だよ。軽くて助かった」

すると真っ赤になっていたシェリスの顔が更に熱を持つ。耳まで真っ赤にしたシェリスは、ゆでダコの様になっている。

「これからどうするんだ？」

クレスは真っ赤になったシェリスを見つめながら、これからの予定について尋ねる。旅の理由と目的は聞いたが、具体的にどうすればいいのかわからなかったのだ。

「とりあえず、王都ミルディアに向かいます」

「王都か……」

王都ミルディアはクレス達のいるザナリアからは、少なくとも五日はかかる。クレスはそれについて何も言う気はなかった。五日位の旅はクレスにとってどうって事ない。

「って事は先ずはセレッソか……」

クレスは顎に手を当てて、王都への道筋を思い浮かべながら言葉を紡ぐ。

「はい」

「野宿を避けたいなら、今すぐ出ないとマズイぞ」

クレスの言葉にシェリスがベッドを立つ。そして壁に掛けられた真っ青なローブを手に取った。

「今すぐ出ましょう。野宿はマズイです」

シェリスは焦った表情を浮かべながら、真っ青なローブを手早く着ていく。クレスにはシェリスの焦る理由がわからないが、とりあえず従う事にした。

「んじゃ、俺も準備する。準備出来たら下の酒場で待っててくれ」

クレスはそれだけ伝えると自室へと走った。走る必要はなかったのだが、シェリスに感化されたのだ。

さっきの格好の上に黒の半袖ジャケット、そして背中に剣を背負ったクレスが酒場への階段を降りると、既にシェリスの姿があった。シェリスの周りにはクレスの仲間達が集まっている。

「悪い、遅くなった」

クレスは仲間達を掻き分けてシェリスの隣まで行くと、華奢な肩に手を置いた。

「あっ、クレスさん」

それなりに楽しく話せていたのか、シェリスは笑顔を浮かべながら明るめの声を出す。

「悪いな」

「気にしないで下さい」

シェリスはそう言って微笑むと席を立った。

「もう行くのか？」

背後から聞こえた声にクレスとシェリスが同時に振り向く。そこにはギルド長であり、クレスの義父、アレンが立っていた。

「あぁ」

クレスがそれだけ言うと、アレンはポケットから何かを取り出しクレスに向かって投げつける。クレスは顔に向かって飛んでくる小さな物体を、寸での所で掴んだ。

「餞別だ、持ってけ」

クレスが手を開くと、そこには何か文字が掘り込まれた指輪。隣にいたシェリスは、それを見て驚愕の表情を浮かべる。シェリスの表情から指輪が貴重な物だとはわかったが、クレスにはその価値など全くわからない。

「何だよこの指輪？」

「いいから付けとけ。それとシェリスさん、いや、『水の賢者』様にはこれを……」

『水の賢者』アレンの一言に、酒場にいたギルドメンバー達が驚きに満ちた絶叫を上げる。そんな中で、シェリスは目を見開いていた。

「……何故それを？」

「俺は少しばかり博識でして」

シェリスの目の前まで来たアレンはそう言って微笑むと、シェリスに向かい握られた右手を差し出した。

「お受け取り下さい」

その言葉に、シェリスがおずおずと左手を差し出す。するとアレンの握られた手が開き、シェリスの手の平に指輪が落ちる。

落ちた指輪はクレスが受け取った物と違い、赤い宝石があしらわれていた。

「これは？」

シェリスは自分の手の平に乗った指輪と、アレンの顔を交互に眺めながら尋ねた。

するとアレンが申し訳なさそうな表情を浮かべて口を開く。

「精霊とのシンクロをしやすくするための物らしいです。賢者様にコレは失礼でしたね」

「いえ、そんなこと。ありがとうございます」

シェリスはそう言って笑顔を作ると、指輪を右手の薬指に付ける。指輪は丁度いいサイズだったのか、シェリスの指に綺麗に収まった。

「綺麗だな」

クレスはシェリスの指を眺めながら呟くと、自分の左手の中指にアレンから貰った指輪を付ける。付けられた指輪はシンプルなデザインでありながら、重厚なまでの存在感を醸しだしていた。

「なぁアレン、こいつの効果は？」

「さぁな」

肩を竦めて首を横に振るアレン。

「は？」

「知らんと言ってるんだ」

クレスは苦虫を噛んだ様な表情を浮かべながら、シェリスに視線を移す。シェリスがこの指輪を見て驚いた表情から、シェリスなら効果を知っているとふんだのだ。

「なぁシェリス、こいつの効果って？」

「……私も知らないんです。前に古代書に載っていたのを見たことがあるだけで……」

何かを思い出す様にしながらゆっくり紡がれたシェリスの言葉。クレスはそれだけ聞いて、自分の指に付けた指輪をまじまじと眺める。

「古代書に載ってるって事は相当な価値だな。本当に貰っていいのか？」

クレスはまじまじと見つめていた指輪から目を離し、指輪をくれたアレンを見つめる。

「餞別って言っただろうが」

アレンが平然とそう言うと、クレスは口の端を吊り上げ嫌らしい笑みを浮かべる。

「んじゃ、金に困ったら売り払うわ」

平然としていたアレンだが、クレスの言葉に内心では怒りの炎が燃え上がる。だが、もしかすると今生の別れになるかもしれない今、そんな事を口に出すわけにはいかなかった。

「まぁ、冗談だけどな。ありがとよ、親父」

クレスはそれだけ言って振り向くと、外に出るための扉に向かい歩きだす。それを見たシェリスも後を追うように歩きだす。

集まっていたギルドメンバー達は、自然に扉までの道を空けた。その空いた空間を歩くクレスに、周りからは次々と声がかかる。

「死ぬなよ！！」

「絶対帰って来い！！」

周りからの声は、まるでクレスが旅立つ理由を知っている様だった。

それもそのはず、昨日酔っ払ったアレンがギルドメンバー全員を集めて伝えたのだ。

だが、クレスはその声に答えはしない。ただただ扉へと歩を進める。

扉まで辿り着くと足を止め、そのままの状態で口を開く。

「俺が帰って来るまで、一人たりとも欠けるなよ！！」

仲間達に背を向けたまま叫ぶクレス。

それを側で見つめるシェリスは、自然と頬が綻んでいた。近くで見ているためか、クレスの肩が小刻みに震えているのがわかったのだ。クレスが体の脇で握った拳も、ほんの少し震えている。

クレスが扉に手をかけた瞬間、一際大きな声が響く。

「行ってこい『最強最弱』！！」

アレンの太い声が酒場に響くと同時に、クレスは両開きの扉を押し開き足を踏み出す。シェリスもその後を追った。

二人が出ていくと、ギルド兼酒場内は静まり返っていた。
だが、メンバー達の顔に悲しみは無い。まるで余韻を楽しむような笑みを浮かべている。ただ一人を除いては。

「アレンさん泣かないで下さいよ」

「クレスならその内帰って来ますよ」

大人気なくも鼻水を垂らして泣くアレンを、ギルドのメンバー総出で励ます。なんとも滑稽な光景である。

「それに、水の賢者様の手伝いをするんですよ？　誇ってやりましょう」

そう言ったのはスキンヘッドの大柄な男。ギルド『フォーセリア』でも古株にあたる者だ。長い間クレスの成長を見守って来た男でもある。

「わ、わかってる。け、けどな……」

涙を止めたアレンは、吃りながらも言葉を続ける。だが、鼻水は止まっていない。

「クレスのやつ、最後の最後で……」

そこまで言って言葉を切ると、笑顔を浮かべるアレン。アレンはその笑顔のままギルドメンバーを見回した。

「また親父って言ってくれたんだぞ！！」

そう叫んだアレンは、今度は声を出して号泣し始めた。

昨日もクレスに親父と呼ばれたアレンだが、さっきの場面で呼ばれた事が相当嬉しかったらしい。

（親バカが……）

そんなギルド長を見て、誰しもがそう思うのは自然であった。

ザナリアからセレッソへと伸びる街道を、黒と青が肩を並べて歩く。周りには見渡す限りの草原が続き、遮られる事のない風が二人の周りを駆け抜ける。

二人の後ろに映るザナリアは、未だに人々のざわめきが聞こえてきそうな大きさを残していた。

「クレスさん」

「何だ？」

ギルド『フォーセリア』を出てからほぼ無言でここまで来てしまった二人は、シェリスの声でようやく顔を見合わせた。

「さっきアレンさんが言っていた『最強最弱』って？」

「あぁ、あれか」

シェリスの言葉に、クレスは口角をほんの少し吊り上げて笑みを作る。

「あれは俺の呼び名だよ」

「呼び名ですか？」

「ギルドの奴等がいつの間にかそうつけたのさ」

ギルド内では、大抵の者に二つ名と呼ばれる呼び名がある。それは自分自身が考えた物や、いつの間にか他人から呼ばれる様になった物のどちらかである。クレスの二つ名は後者に分類される。

「何でそんな名前を？」

名前の理由が解らないシェリスは、首をかしげながらクレスを見つめた。

「俺らしいんだとさ」

シェリスの問いにそう答えたクレスは、自分の二つ名が付けられた経緯を思い出し笑みを浮かべた。その光景を隣で見ているシェリスには、全く意味がわからない。

「俺って魔術が使えないだろ？」

「はい」

「だけど、剣術だけならギルドで一番だったんだよ」

クレスは清みきった空を見上げながら、語り続ける。

「それでさ、剣術だけなら最強で、魔術だけなら子供にも勝てない最弱。だから『最強最弱』。単純だろ？」

そこまで言い切ると、クレスは空からシェリスへと視線を移す。真っ青な空と変わらない、真っ青なローブと、それに負けない真っ青な髪。そして、まるで見るものを吸い込んでしまいそうな青い瞳が、クレスをじっと見つめていた。

「確かに単純ですね」

そう言って笑うシェリスを見たクレスは、顔が熱くなるのを感じた。

小さな頃からギルドで育ったクレスには、女性と接した経験が余り無い。あったとしてもギルドの女性陣であり、どちらかと言えば男性に近かった。

更に言えば、クレス自身から女性に接する事もしなかった。その原因はクレスの義父であるアレンにある。

アレンは若い頃は美人に目がなかった。所謂、面食いである。そんなアレンは美人と関わりを持っては問題を引き起こす。

それを見て育ったクレスには、幼いうちに今の持論が出来上がっていた。『美人は面倒事を背負ってやって来る』、コレは今もクレスの持つ持論で、間違いなく一番上に来る程に重要とされている。

今クレスの隣にいるシェリスは、間違いなく美人の部類にはいる容姿。そしてシェリスは、クレスの持論通りに面倒事を背負ってやってきた。
だがシェリスは面倒事だけでなく、クレスに自分の居場所を作るためのチャンスも背負ってきた。

「皆頭の中まで筋肉なのさ」

ほんのりと顔を赤くしたクレスは、それだけ言うと街道の先を見つめた。

草原はまだまだ広がっている。

（やれるとこまでやってやるさ……）

クレスはシェリスを横目で見ながら、自分にチャンスを与えてくれた水の賢者に負けない程の青い空に誓った。

実力

長い街道を歩き続ける二人。背後には既にザナリアは見えなくなっていた。
ザナリアを出た時には長かった影も、真上からの日差しを受ける事でいつの間にか短くなっている。

黙々と歩き続ける二人の前方には、木々が生い茂る森が見え始めていた。

「あの森さえ越えればセレッソだ」

「は、はい」

肩で息をしながら口を開くシェリス。
休みを取らず歩き続けた二人だ、クレスはいいとしても女性であるシェリスには体力的にキツい。賢者と言えど、体力的には普通の女性と変わりないのだ。

「休むか？」

「いえ、大丈夫です。進みましょう」

明らかに強がりと分かるシェリスの発言に、クレスは眉根を寄せた。

「強がるな、森に入ったら少し休もう」

「大丈夫ですから！！」

シェリスは足に力を入れると、少しペースを上げる。クレスは、溜め息を吐きながらそんなシェリスの後を追った。

森からは、風に揺られた葉の擦れ合う音が響いていた。

「転んで足を挫くなんて、あんたは本当に賢者か？」

「なっ、疲れてたんです。それでちょっと周りが」

さっきの言い合いから数分後。二人はまたもや言い合いを開始していた。

「やっぱり疲れてたんじゃないか、だから休めって言ったんだ」

シェリスが言い終わる前に、クレスの声が森に響く。

「す、すいません」

怒るクレスと落ち込むシェリス、対称的なまでの二人だが、今の二人の距離はゼロに近い。否、ゼロだった。

クレスが背中に背負っていた剣は腰に下げられ、剣の代わりに背中にはシェリスが背負われている。

「あ、あの、クレスさん」

「どうかしたのか？」

何とも言えない空気を嫌ってか、シェリスはクレスの耳元で呟く様に話しかけた。

「そのペンダントって……」

何とか空気を変えるためにシェリスが必死で考えた話題の矛先は、クレスが首から下げたペンダント。盾を貫く剣の装飾がされたペンダントは、クレスが歩くのに合わせる様に揺れていた。

「……こいつはアレンが作ってくれたんだ」

シェリスを支えているため腕が使えないクレスは、視線だけを下にやり呟く。

「アレンさんが？」

「あぁ、俺が小さかった時にな」

クレスがそこまで言ったところで、二人の間に流れる空気が変わる。

「クレスさん」

少しの緊張を含んだシェリスの声に、クレスは小さく首を縦に振る。そして、ゆっくりとシェリスを降ろすと、一度辺りを見回した。シェリスも直ぐにでも動ける様に、挫いた足にも力を込める。

クレスは目を細めると二人の間の空気が、否、二人の周りの空気が変わった原因を探す。

すると草むらや木の影から、五つの影が飛び出した。飛び出した

影は、二人を囲むようにして位置を取る。
現れたのは五人の男。短剣や斧を手にした男達は、下品な笑みを浮かべて二人を見つめていた。

「山賊か……」

「わかってるなら話が早い。女と持ち物置いてきな」

クレスの正面に立った髭面の男は、顔に似合った低い声を出した。いかつい身体付きをした男は、肩に斧を背負って気持悪い笑みを浮かべる。

「嫌だと言ったら？」

クレスは至って冷静だった。日の光が当たらない場所にはどうしてもこういう輩が現れる、それは周知の事実である。
クレスは横目で隣のシェリスを見る。シェリスも慌てた様子は無く、平然としていた。
男は肩に背負った斧を地に降ろす。そして、男がクレスの問いに答えるために口を開こうとした瞬間、クレスが剣を抜き走り出した。

クレスは自分二人分はあろうかという距離を一瞬でゼロにすると、驚いた表情を浮かべている男の左肩から袈裟に剣を振るう。
斧を地に降ろしてしまった事で防御が遅れた男は、クレスの剣をまともに受けて血を吹き出しながら仰向けに倒れた。

その光景を見ていた『四人』の時が止まる。自分達の仲間が一瞬にしてやられた事に、恐怖を覚えたのだ。

偉大なる水の賢者は、その隙を逃さなかった。

「水の精霊よ、我に助力を……」

シェリスが目を閉じて呟くと、周りの空気が一変する。するとシェリスの頭の中に、精霊の声が響く。

頭に響く言葉をなぞるようにして、シェリスの口が動き始めた。

「ラ・フェルト・リ・セルク……」

シェリスの周りの空気がどんどん鋭くなる。

呆然としていた山賊達は、それに気づくと走り出した。標的はシェリス。

だが、男達が動き出すのは遅すぎた。

「……イウ・ヴァル！！」

シェリスは叫ぶと同時に目を見開く。するとシェリスの周りに、何処からともなく沢山の水の塊が現れた。一つ一つが小石大のそれは、シェリスに迫る四人に襲いかかる。

山賊達は魔術で作られたそれを避ける事ができなかった。数が多すぎるのだ。

また魔術でそれを防ごうにもそんな時間も無く、次々にそれが山賊達の身体に当たる。

山賊達の身体に水の塊が当たる毎に、身体が破壊される嫌な音が響く。

それと同時に、山賊達の悲鳴と絶叫が静かな森を支配した。

「やり過ぎだろ……」

「ですね……」

山賊との対面から約三分、二人の周りには息も絶え絶えの山賊達が転がっていた。ある者は全身の骨が砕け、またある者は服から除く部分の殆どが腫れ上がっている。

「ただ、クレスさん程じゃありません」

「悪いけどアイツは死んでないからな」

クレスに最初に斬られた山賊は、確かに見た目は死んでいる様だが、気を失っているだけである。斬る際に僅かながら急所を外したのだ。クレスの腕があってこそ成せる技である。

そこで一人の山賊がよろよろと立ち上がる。それを見たシェリスが、再び魔術を唱えようとする。だが、クレスがそれを遮った。

「止めとけ、次は死ぬ」

クレスにそう言われたシェリスは、大人しくそれに従った。流石に人を殺したくないのだ。

それを見たクレスは満足気な表情を浮かべてから、立ち上がった山賊に近づく。

「わ、悪かった、み、見逃してくれ！！」

立っているのもやっとと言った山賊は、近づいて来たクレスを見るなり叫んだ。それは精一杯の命乞い。

「大丈夫だ。殺したりはしない」

クレスの言葉に山賊の目から涙が流れ始める。それは安堵の涙であった。

「仲間を早く手当てしてやれ。それと今後は山賊なんか辞めるんだな」

クレスはそれだけ言うと、後ろを振り返りシェリスの元へと戻る。

「行くか」

「はい」

クレスは剣を背中ではなく、腰に下げる。そして、シェリスに背中を向け屈んだ。

「乗れ」

「いや、もう」

胸の前で手を横に振り、自分の意思を表すシェリス。その意思表示を、クレスは軽く無視した。

「早く乗れ」

有無を言わさぬ言葉に、シェリスは仕方なくクレスの首に腕を回してしがみついた。

「それにしても、魔術はやっぱり凄いな」

「そうですか？」

「あぁ、何度も目にはしてるけど、さっきのは凄かった」

クレスの背にいるシェリスは、誉められた事が嬉しくなって微笑んだ。

「さすが賢者だな」

「大精霊の力ですよ」

少し声のトーンを落とすシェリス。クレスにはその理由がわからない。

「そうなのか？」

「はい。大精霊はこの世界を支える程の力を持っています。その大精霊が力を貸してくれるんですから、あれ位は簡単な事です」

「なるほどな」

クレスはそれだけを答えるとまた黙々と歩き出す。山賊達と遭遇したせいで、少しだが時間をくってしまったため、その分を取り返そうとしているのだ。

周りからは葉の擦れ合う音と、小鳥のさえずりが聞こえてくる。クレスから感じる体温と周りからの優しい音が、シェリスを眠りへと誘う。そしてシェリスは、意識を手放した。

自分の背中でそんなことが起きているとは気付かないクレスは、黙々と歩き続ける。日が暮れる前にセレッソに着かなければならないという思いが、クレスを無口にさせ、シェリスの眠りを手助けした。

結局、クレスがシェリスの居眠りに気づいたのは、セレッソに到着する直前。その原因はクレスの首筋を伝う液体だった。

「涎賢者め……」

「い、いや、あ、あの……すみませんでした！！」

世界を支える偉大な賢者は思い知る、『居眠りは大敵だ』と。

実力（後書き）

初の戦闘描写なんですが、相手がなにぶんあれなため、簡単に終わってしまいました。

とりあえず、次に期待して戴ければありがたいです。

いや、過度の期待は厳禁ですよ（笑）

魔術講座

「なぁ、涎賢者」

「なっ！？　さっきから謝ってるじゃないですか！！」

セレッソについた二人は、宿屋で騒いでいた。と言っても、シェリスが一方的に騒いでいるのだが。

「ホントに一部屋でよかったのか？」

「大丈夫です」

シェリスは不貞腐れながらもそう言うと、深く頷きおもむろにローブを脱ぎだした。ただローブを脱ぐだけなのだが、何故か恥ずかしくなったクレスは視線を窓へと移す。

外はすでに闇に染まっており、空には沢山の星が輝いていた。しかし、沢山の星が輝こうとも大地を照らすことは出来ない。夜は闇こそが主役の時。

「クレスさん」

「ん？　どうした？」

「今日は本当にありがとうございました」

ローブを脱いで、ベッドの上で畏まるシェリス。その右足首には包帯が巻かれていた。クレスが巻いてやった物だ。

「んな事は気にするな」

クレスはそう言って、シェリスに占領されているベッドの隣にあるソファに腰かけた。今日はここがクレスの寝床である。

セレッソに着いた時刻が遅かった事もあり、部屋が一つしか空いていなかったのだ。しかも一人部屋だったためベッドが一つ。必然的に、クレスがソファで寝ることとなった。それでもまだ、地べたよりはましである。

「なぁ、シェリス」

「何でしょうか？」

「そのペンダントに着いてる石って魔石なのか？」

クレスが言ったのは、シェリスが首から下げているペンダントに着いた菱形をした水色の石。普段はローブを着ているため見えないが、今は露になっている。

「これですか？」

シェリスが首から下げたペンダントを持ち上げるのを見て、クレスは無言で首を縦に振る。

持ち上げられた石は、光を反射して一瞬鈍く光った。

「これは水の魔石です。これに宿った魔力自体は微かなものですが、これは着けなくてはならないんです」

シェリスが言ったその言葉に、クレスは何か違和感を覚えた。何

故ペンダントを『着けなくてはならない』のか。魔石などとは全く縁の無いクレスには、その理由が全くわからない。
そんなクレスの考えを察してか、シェリスは一度微笑むと口を開く。

「コレは魔術師であることの証明なんですよ」

「証明……あぁ、なるほどな」

クレスもそこまで馬鹿ではない、むしろ頭の回転はいい方だ。

魔術師とは国から認められなくては、名乗ることが出来ない。だが、もし国から魔術師であると認められても、それを証明出来なければ意味が無い。そこで、ペンダント型の『証明書』が、認められた魔術師達に配られるのだ。

「ちなみに水色の石は、水の魔術師を表しています。他に赤は炎、緑は風、黄は土を表しています」

「へぇ……勉強になった」

クレスはそこまで聞いてから、ブーツに手をかけた。スルリとブーツを脱ぐと、寝床代わりのソファに横になる。

「寝るんですか？」

「いや、まだ寝ない。聞きたい事もあるしな……」

枕代わりに頭の後ろで腕を組み、天井を見上げるクレス。シェリスはベッドの上で足を崩し、その光景を眺めていた。

「聞きたい事って？」

「魔術ってどうやって使ってんだ？」

「エッ？」

シェリスは若干目を見開いてクレスを見つめた。今まで一度たりとも、そんな質問をされた事がなかったためだ。

この世界エルディアに住む人々は、成長するに従い自然と魔術が使える様になっていく。つまり魔術を使うのも成長の過程であり、本能として扱えるのだ。

今まで他の人間が魔術を使う場面を日常的に見てきたクレスだが、自分から魔術について聞こうと思った事は無かった。クレスには縁がないものだからだ。

クレスにそれを聞きたいと思わせたのは、シェリス、正しく言えば『水の賢者』と言う名であった。

「よく精霊とのシンクロが大切とかは聞くんだが、実際にやった事ないからよくわからなくてな」

クレスは鼻の頭を掻きながらシェリスを見つめる。シェリスはシェリスで、クレスに何と言っていいかわからず、何とも微妙な表情を浮かべていた。

「簡単でいいですか？」

何とか頭の中で話すことを纏めたシェリスが口を開くと、クレス

は満足気な表情で頷いた。

「先ず魔術を使うには、精霊との『契約』が第一条件です」

「契約？」

「あっ、すいません。精霊に愛される事です」

生まれた瞬間に精霊達に愛される事は、魔術師の中では『契約』と呼ばれる。一般的には呼ばれていないため、クレスの様に反応したというわけだ。

「そして次に大切なのが精霊とのシンクロです。このシンクロと言うのは、簡単に言うと精霊と心を合わせると言ったところです」

「精霊と心を？　精霊には自我があるのか？」

「勿論です。精霊も私たち人間と何ら変わりはありません」

シェリスはそう言って窓から外を眺める。クレスも釣られる様に外を眺めた。

「ただ、精霊達は眠ったりはしませんけど」

「そうなのか？」

シェリスは子供の様な表情を見せるクレスを見て、柔らかな微笑みを浮かべる。

「精霊達が寝てしまうと、世界の均衡が保てませんから」

「そりゃ困る」

クレスは一度欠伸をすると、未だに夜の闇を見つめるシェリスに目をやった。

ローブに包まれていないためか、シェリスの体のラインがよくわかる。

全体的に細いシェリス。その中で一番際立つのは、細く引き締まったウェスト。綺麗なクビレを作っている。そのクビレの上には、理想的なまな板が置かれていた。

「そして精霊とシンクロを果たす事で、自分の中に精霊の力を取り入れます」

急に話を戻した、シェリス。クレスは欠伸をした事により、目に溜まった涙を指で拭いながら耳を傾ける。

「この精霊の力を取り入れると言うのは、説明すると難しいんですが……」

頬に手を当てながら、悩む素振りを見せるシェリス。その青い瞳にも悩ましげな色が浮かぶ。

「簡単で大丈夫だ」

「では……」

シェリスは一度考える様な表情を浮かべると、クレスを見つめて喋り始める。その瞳は、ちゃんと聞いといて下さいね。とクレスに

語りかけているようだった。

「精霊の力を取り入れると言うのは、精霊を体内に取り入れると言った方が正しいです」

「精霊を？」

「はい。一度人を愛した精霊は、その人間が死ぬまで絶対に側を離れる事がありません。その精霊を体内に入れるんです」

そこまで聞いたクレスは一度起き上がり、ソファの上で胡座をかくとシェリスに向き直る。そしてシェリスの真っ青な瞳を、自分の真っ黒な瞳で覗き込んだ。

「ちょっと待ってくれ。今の話だと、人を愛した精霊は常にすぐ側にいるのか？」

手を挙げながら質問をするクレス。その顔には興味津々な表情が浮かんでいた。

「はい」

「って事はだ。大精霊がこの部屋にいるわけか？」

クレスはそう言って、部屋中に視線を巡らせる。だがそれらしき者は全く見つからない。

そんなクレスを見つめるシェリスの口許には、自然と笑みが浮かんでいた。

「無理ですよ、クレスさん。精霊は人の目には映りませんから」

「そうなのか？」

「高位の魔術師や、シンクロの才能が高い人なら可能ですけどね」

シェリスの話からすると、クレスの目に精霊が映らないのは当たり前である。

精霊は基本的に契約主の目以外には映らない。精霊とシンクロをする才能が高い魔術師なら、集中力を高めれば自分に付いた以外の精霊も見える事はあるが、精霊に愛されていないクレスではそれは不可能である。

「それに、今私を見守ってくれているのは、大精霊の思念体でしかありません」

「思念体？」

「簡単に言うと大精霊の分身です。大精霊は源域を出る事ができませんから。……あっ、源域（げんいき）はわかりますか？」

「大丈夫だ」

源域とは大精霊達の住まう場所を示す。大精霊が世界の源であることから、こう呼ばれる様になった。

源域はそこに住まう大精霊の力の象徴とも言われている。例えば水の大精霊が住まう場所は、世界で最も綺麗な湖と称されている。

「源域を出れない大精霊は、思念体を作り私を見守ってくれているんです」

「その思念体ってのも凄い力を持ってるのか？」

クレスの言葉に、シェリスは虚空に目をやりながら、何か考えている素振りを見せた。

「……そうですね。大体、大精霊の五分の一程度ですが、それでもかなりの力です」

「五分の一でアレかよ……」

クレスは森で出会った哀れな山賊達に、心の中で手を合わせる。

「本当なら、賢者である私も長い時間源域を出ることは好ましい事ではありません。しかし、今はそうも言っていられないので」

「……世界の危機だからな」

「はい……」

そう言ったシェリスの哀しげな瞳。それを見たクレスは、自然と顔を逸らしていた。

「……話を戻しますね」

「あぁ」

シェリスはいつもの瞳でクレスを見つめ口を開く。顔を逸らしたクレスはその雰囲気を察すると、また青い瞳を見つめる。

「精霊を体内に取り入れる時に大切なのが、心の波長を合わせる事。つまりシンクロですね」

右手の人差し指を立てながら、子供にものを教える様にして喋るシェリス。それを頷きながら聞くクレス。

その光景は、まるで師匠と弟子の様である。

「そして体内に入った精霊は、術者の心を読み取ります」

精霊と術者は心で会話をすることが出来る。この段階までは、全ての人間が出来るとされている。

「例えば私が『水の球を打ちたい』と考えると、精霊がそれに見合った魔術を選択してくれます。そして、その魔術を放つための詠唱を教えてくれるんです。それをシンクロしながら口ずさめば魔術の完成です」

だが、シンクロの素質が無い者は心の中で精霊との会話が上手く出来ない。そのため魔術を放つ段階に行く前に、精霊が体外に出てしまったりして魔術を失敗する事があるのだ。

また、きちんと詠唱が出来ていても、詠唱中にシンクロが乱れたりする事で魔術が失敗に終わる事もある。つまり精霊といかに心の波長を合わせるか、シンクロ出来るかで魔術を上手く使えるかどうかが決まるのだ。だからこそ、シンクロの素質は魔術師にとって重要なものとされている。

シンクロで始まり、シンクロで終わる。それが魔術なのだ。

「詠唱ってのは何となくわかる。ただ、あれは一体何て言ってるんだ？」

クレスは山賊達がやられた場面を思い出しながら口を動かす。
あの時シェリスは確かに何か呟いていた。だがそれを見ていたクレスには、言葉の意味が全くわからなかったのだ。

「あれは精霊達の言葉ですので、私達人間にはわからなくても仕方ありませんよ」

「ん？　って事は自分が何を言ってるのか分からずにやってんのか？」

クレスの言葉を聞いたシェリスは、口許に手をやるとクスッと微笑んだ。

「いえ。シンクロをしている時には自分が何を言ってるのか頭ではわかってるんですよ」

「へェー、そういうもんなのか」

「はい」

何となくだがシェリスの言っている事を頭で理解したクレスは、ソファに横になる。
横になったクレスの目に映るのは、白い天井。その白を見つめながらシェリスの言葉を頭の中で整理する。

「つまりは魔術を使うにはシンクロが全てで、必然的に魔術師にはシンクロの才能が必要なわけか……」

頭の中で整理した情報を自然と口にするクレス。呟き終わると、

眠りに就くために静かに瞼を閉じた。

「それだけではありませんよ」

その言葉に、クレスは閉じた瞳を再び開きベッドに座る青を見つめた。眠りに就こうとしたクレスを現実に引き留めるのは、シェリスからの否定の言葉。

「確かに魔術師にはシンクロの才能が必要です。しかし、それだけでは魔術師にはなれません」

楽し気に口許を綻ばすシェリス。クレスはその微笑みに見入った。

「そうなのか？　それじゃあ後は何が必要なんだ？」

シェリスが青い瞳を細める。細められた瞳に映るのは、シェリスの言葉を待ちわびるクレスの顔。その顔はまるで、知識を獲ることを楽しむ子供。

シェリスはその顔を見つめながら、勿体振るようにして口を開く。

「簡単に言うならば……」

シェリスの勿体振る様な話し方に、クレスは息を呑む。そして偉大なる水の賢者の言葉を、一言一句聞き逃さぬ様に聞き耳を立てた。

「運ですね」

「はっ？」

勿体振った割にあっさりとした一言に、クレスは思わず我が耳を

疑った。

「運です」

偉大なる水の賢者から発せられたのは、一番予想外の言葉。

『運』。それが魔術師に成るために必要だと言う言葉に、クレスは目を見開いた。

「運って一体どう」

「精霊は、大まかに言うなら四つの種族に別れています」

クレスの言葉を遮る様にして、シェリスが喋り始める。その言葉は『運』についての説明とは程遠い。

しかし、シェリスの声からはふざけた様子が感じとれないクレスは、大人しくその言葉に耳を傾ける。

「これは属性で別けられていると考えて下さい」

精霊の種族はそれぞれの持つ力によって別けられている。

炎の種族『ラムレス』、水の種族『クラムレス』、風の種族『ヴェニレス』、土の種族『テラデレス』、この四つが精霊の種族である。

「そしてその種族には、私達人間と同じ様に地位があります」

「精霊に地位が？」

「私達人間がそういう風に言っているだけで、精霊達はそうは思っ

ていないでしょうけど……」

そう言って哀しげな表情を浮かべるシェリス。クレスにはその表情の真意がわからなかった。

人間は地位に執着する生き物である。その執着心は時に人を愚かにし、狂わせる。

クレスはその執着心の恐さを知らない。しかし、シェリスは知っている。自分自身が水の賢者と言う地位にあり、国の『象徴』であるが故に。

「人間で言う国王、これが大精霊です。そして、その下には大きくわけて三つ」

そこまで聞いて、クレスは体を起こし、また胡座をかいた。真っ正面から、黒い瞳で青を見つめる。

「先ずは大精霊に次ぐ上位精霊、その下に中位精霊、下位精霊と続きます」

「簡単なんだな。それはどうやって別けてんだ?」

「簡単に言えば、その精霊が持つ魔力で別けられます」

人間にも強い者と弱い者がいるように、精霊達にも力の差は存在する。それが保有する魔力の差である。

そしてこの魔力の差が、術者にも影響を及ぼす。

「それじゃ、魔力の差があるとどんな事が起きるんだ?」

「例えば私のように大精霊と契約した者ならば、水を自在に操る事も可能です。しかし、魔力の少ない下位精霊と契約した者だと、いくらシンクロの素質が高かろうと、水を生み出す程度の魔術しか使えない者もいるんです」

「……なるほど。だから魔術師に成るには『運』が必要なわけか」

クレスはそう言って頷くと、またソファに横になる。

「はい。結局は魔術師になるには、自分を愛してくれた精霊の力によるところが大きいんです」

シェリスの言葉に、クレスは瞼を閉じた状態で頷いた。瞼を閉じたクレスには、天井の白も映らなければ、綺麗な青も映らない。映るのは夜の闇よりも深い闇。

そして、耳からは澄んだ声が聞こえていた。

「そのため、いくらシンクロの素質があろうと、魔術師に成れない人々は沢山い……」

シェリスは指を振るいながら続けていた熱弁を止める。規則的に聞こえる寝息がシェリスを止めたのだ。

「……寝ちゃいましたか」

シェリスは独り言の様に呟きながら、クレスの寝顔を眺める。安らかなクレスの寝顔はまるで少年の様で、シェリスは口の端をほんの少し吊り上げた。

「明日からもよろしくお願いしますね」

今日の事を振り返りつつそう言ったシェリスは、ベッドに横になる。ふかふかではないが固すぎない布団が、優しくシェリスを受け止めた。

「おやすみなさい。……『予言の人』」

『欠陥品』対『完成品』

「うっとうしい……」

そう言ってため息を吐きながら歩く青年。黒い髪に黒い瞳。パッと見整っているともいないとも言える、何とも微妙な顔。

クレスはセレッソの大通りを一人で歩いていた。沢山の視線に悩まされながら。

黒い髪に黒い瞳、それがクレスに視線を集めていた。肌に突き刺さる様な沢山の視線。その視線には畏怖と嫌悪が入り混じっている。

クレスにとってはいつもの事であるそれは、端から見れば異様な光景にすぎない。

（一緒じゃなくてよかったかな……）

宿屋に置いてきた青の女性、水の賢者を思い浮かべながらクレスは頬を掻いた。

シェリスは足の腫れはひいたが、まだ痛みが残っていたために宿屋で休んでいる。そのため今日一日暇になってしまったクレスは、こうして大通りを歩いているのだ。

（それにしても……）

クレスはさっきから自分に突き刺さる視線の中に、一つだけ異様な視線を感じていた。他の視線が異様でないとも言えないが、クレスからすればそれは受け流せる程度である。

クレスが感じているのは、自分に向けられている殺気。それも並

の殺気ではない。

「誰だか知らないけど、売られた喧嘩は買ってやるか」

小さな頃からギルドのメンバー、特に義父アレンに言われ続けた『男なら売られた喧嘩は買ってやれ』という言葉。

クレスはその言葉を思い出しながら、大通りから脇道へと歩を進める。

昼間だと言うのに薄暗い脇道は、すんなりとクレスを受け入れた。暗い路地に入ったクレスを最初に襲ったのは異臭。路地には至る所にゴミが捨てられていて、綺麗な大通りとの違いは歴然であった。

ただ、今のクレスにはそれを気にするだけの余裕が無い。喧嘩を買ってやると意気込んだはいいが、路地に入った所で先程から向けられていた殺気が、更に大きくなっていたからだ。

「しくじったか……」

自分に殺気を飛ばしていた者は、かなりの実力者である可能性が高い。それを肌で感じたクレスの口からは、自然とそんな言葉が漏れていた。

そんな中でクレスは思わず笑っていた。『男なら売られた喧嘩は買ってやれ！！　但し勝てない喧嘩はするな！！』。そんなアレンの言葉を思い出していたのだ。

しばらく歩いた所でクレスは足を止める。するとクレスに向けられていた殺気が、ピタリと止んだ。

大通りからの喧騒も聞こえない場所。クレスが足を止めた事で、ブーツとレンガのぶつかる音も消えた。それはまるで、嵐の前の静

けさ。

「俺に何か用か？」

クレスはそう言いながら、今まで自分に殺気を飛ばしていた人物に振り返る。

そこにいたのは真っ赤な髪をした女性。短く切り揃えられた髪から覗く瞳は、髪と同じく赤。

茶色のジャケットから出た腕には程よい筋肉が付いている。そして、ジャケットの下に着た黒のシャツは、ヘソが見える程に短い。

だが目を惹くのはヘソではなく、その周り。鍛え上げられた腹筋が、その存在を主張していた。おそらく黒いズボンに覆われた下半身にも、美しいまでの筋肉が付いているだろう。

その女性が腰から下げるのは、闘うためだけに作られた物。それは女性が『剣士』であることを示していた。

クレスはその女性を、驚愕の表情を浮かべたまま見つめる。

クレスが驚いたのは、自分に向けられていた殺気が女性からのものだったからではない。クレスは女性でもそれだけの殺気を出せる人物を、数人知っている。

クレスが驚いたのは女性の容姿。シェリスも美人だが目の前に立つ二十代後半、もしくは三十代に届きそうな女性もまた、極上の美女だった。

「……悪いけど、死んでもらうわ」

女性の声が路地に響く。その次に響いたのは、女性が剣を抜く音。

「どうやら、俺はとことん……」

クレスは口を開きながらも手を動かし、背中に背負った剣を抜く。

「……美人と縁があるらしい」

クレスが言い終わると同時に、女性が動き出す。

赤い剣士は女とは思えないスピードでクレスに走り寄ると、クレスの首めがけて突きを放つ。最短距離を駆け抜けるそれは、並のスピードではなかった。

だが、クレスはそれに反応していた。突き出された剣を、自らの剣で横から弾く。そして女性の右肩めがけて突きを放つ。

戦場が狭い路地とあってか、突きが一番効率のいい戦法なのだ。振るう事も出来るがリスクが大きい。もし横の壁に剣が突き刺さろうものなら、待ち受けているのは、死。

女性はバックステップで距離を空ける事でクレスの突きを回避すると、また攻撃に移る。流れる様な動き。

そこからは両者共に譲らない突き合い。女性が突きを出せばレスが弾き、クレスが突きを出せば女性が避ける。まさしく一進一退の攻防。

暗い路地に響くのは、両者の剣が空気を切り裂く音と、ブーツとレンガが擦れ合う音だけだった。

だが、そんな攻防にも終わりは来る。

女性が突き出した剣を弾いたクレスは、今日一番のスピードで突きを放つ。女性はまたしてもバックステップで剣を避けるが、クレスの剣が一瞬速かった。
クレスの剣が女性の肩に触れる。その瞬間、赤い鮮血が宙を舞った。

「浅かったか」

クレスはそう言って顔を歪める。血は出たが、女性の傷は浅かった。
追撃しようとするクレスだが、女性が距離を空ける方が速い。いつの間にか二人の間に、大人四人は寝かせられるであろう距離が出来ていた。

「……やるわね。黒髪の剣士」

女性は傷口に手を当てると、まるで自分が怪我をしたことを喜ぶ様な顔を浮かべた。

「いい腕よ、殺してしまうのが惜しいわ……」

「そりゃどうも。出来れば回れ右して帰ってくれないか？」

クレスが場の空気にそぐわない声のトーンで、冗談混じりの言葉を放つ。クレスの口許は笑っているが、黒い瞳を携えた目は笑っていなかった。

「それは無理ね。依頼のためにも、貴方には消えてもらわなくちゃ」

女性がそう言った瞬間、路地に流れる空気が変わる。

クレスはその空気を知っていた。自分には出来ない芸当。

それは魔術。

「させるか」

クレスは走り出す。魔術を使われたら、自分に勝ち目はない事がクレスにはわかっていた。

クレスは女性の近くまで辿り着いた瞬間、高速で突きを放つ。だが、その突きは女性に届かなかった。

クレスの突きが放たれる瞬間、女性がまたバックステップで距離を取ったのだ。

距離を取りつつも、女性は詠唱を続ける。それは魔術師としても一流の証。

シンクロが上手くない人間では、動いた事によりシンクロが乱れてしまう事が多い。だが一流になると、それ位でシンクロは乱れないのだ。

クレスの剣を避けながらも、女性は詠唱を続ける。

「……フラウ・ヴァル」

女性がそう言った瞬間、女性の周りに数個の火球が現れる。触れた物全てを焼きつくすかの如く燃え盛る人の頭大の火球。

狭い路地と、燃え盛る火球。それはクレスにとって絶望的なシュチュエーションだった。

（避けきれるか？）

女性の周りに浮く火球は全部で四個。常人よりは反射神経がいいであろうクレスでも、この狭い路地では難しい。

そんな最悪のシュチュエーションの中、クレスの出した答えは。

「逃げるが勝ち」

逃げる事であった。回れ右をして、全力で走り出すクレス。

「させないわよ！！」

女性が叫ぶと、それに呼応するように火球が動き出す。高速で動き出した火球は、瞬く間にクレスに迫る。

クレスは一度後ろを確認し火球が自分に迫るのを確認すると、右側の壁に向かい大きく跳躍した。

「なっ！？」

火球の後ろを走る女性は、思わず声を上げた。それほど迄に、クレスの行動は予想外なものだったのだ。

右側の壁に向かって跳躍したクレスは、壁を蹴り更に上に跳ぶ。そして、次に左側の壁を蹴り上げた。

クレスに向かっていた火球が、クレスの真下を通っていく。

クレスは空中で体の向きを変え、右手で持った剣を両手で持つと、そのまま大上段に剣を振り上げる。

女性はその姿を見てようやく動き出す。まさか火球を避けられると思っていなかったため、行動が遅れたのだ。

迎撃体勢を取る暇は無いと感じた女性は、防御の体勢に廻る。剣を両手で持ち頭上で横に構える。
クレスは女性が防御の姿勢を取ったのを見ると、勢い任せに剣を振るう。落下で速度を増した剣は高速、否、神速。
クレスの振るった剣が女性の剣に当たった瞬間、甲高(かんだか)い音が薄暗い路地に鳴り響く。
次に響いたのは剣がレンガに落ちる音と、人が倒れる音だった。

「私の完敗ね」

クレスに押し倒された形になった女性は、やんわりとした口調でそう言った。そんな口調だが、女性の喉元にはクレスの剣が突き付けられている。

「紙一重だろ？」

「そう言ってもらえるとありがたいわ」

女性は剣を突き付けられているにも関わらず、綺麗な笑みを浮かべる。その笑みがあまりにも綺麗で、クレスは一瞬見とれてしまった。だが、剣は突き付けたままだ。

「何故俺を狙った？」

「依頼のためよ。ギルドのね」

クレスはそれだけ聞いて、依頼主を聞き出すのが不可能だと悟る。クレス自身、ギルドがどういう物であるかよく知っているからだ。ギルドに所属する人間は、絶対他人に依頼主を明かさない。それが絶対的な決まりである。

「依頼内容は？」

「それくらいは教えてあげる。貴方と一緒にいる賢者様の殺害よ」

女性はそう言うと妖艶とも言える笑みを浮かべ、自分に剣を突き付けるクレスを見つめた。女性の赤い瞳とクレスの黒い瞳が交差する。

「いつからだ？」

「随分前からよ。あの賢者様、中々隙を見せないのよね」

剣を突き付けられていると言うのに、女性は全く気にした様子を見せずに言葉を紡ぐ。

「つまりは俺が邪魔だったわけか……」

「そういうこと」

女性の言葉から襲われた理由を大体察したクレスは、真っ黒な瞳を細めた。

「何で負けたのかしら……」

女性の呟く様な言葉に、クレスは眉間に皺を作ると難しい表情を

浮かべた。

「貴方は魔術も使わなかった、なのに私は負けた……何故かしら？」

「一つ訂正だ。俺は魔術を使わなかったんじゃない、使えないんだ」

女性の目が見開く。信じられないものを見るような目。それは驚愕の表情だった。

クレスは思わず笑ってしまった。女性の行動が、予想通りのものだったから。

「……嘘でしょ？」

「こんな冗談考える奴の顔が見てみたいね」

クレスはそう言うと、女性に突き付けたままの剣を鞘に収めた。真っ赤な女性からの戦意が感じられなかったからだ。

「私は欠陥品に負けたのか……」

虚ろな目でクレスを見つめながら、女性が口許を歪めた。

何となくだが、その言葉を予想していたクレスは動じない。

欠陥品であろうと、クレスを必要としてくれる人間がいる。それだけで、クレスは強くなれた。

クレスは心の中で、青い賢者に感謝する。

「あんたは確かに完成品だ。しかも一流のな」

女性は間違いなく一流の剣士だった。普通の人間に言わせれば、クレスが勝つのは不可能。もし勝てたなら、奇跡と言うだろう。
だがクレスは勝った。クレスにとってそれは奇跡ではなく、ただの勝利。

「あんたが俺に負けた理由は……」

クレスはその黒い瞳に自信を湛えながら、血の様に赤い瞳を覗き込む。

「一流の『完成品』だからさ」

そしてクレスは不敵な笑みを浮かべた。

「一流じゃ、超一流には勝てない」

クレスが拳を振り上げる。そしてその拳を、女性の鳩尾に突き刺した。それは女性の意識を刈り取る一撃。
女性の意識がなくなった事を確かめると、クレスは立ち上がり、呟く。

「まぁ俺は、超一流って言っても、超一流の『欠陥品』だけどな」

誰も聞く者がいない言葉が、薄暗い路地に響いて消えた。

商業都市レディス

太陽が真上より少し西に傾いた頃。黒と青は肩を並べて、広い通りを歩いていた。

セレッソを出てから三日、クレスとシェリスの二人がいるのは商業都市レディス。

赤褐色のレンガが敷き詰められて整った通りは、沢山の人間が闊歩している。その通りの周りには、道に沿うように沢山の出店が並び、賑わいを見せていた。

「凄い人の数ですね」

「そうだな」

このレディスは、王都を目指す者達が絶対に通る都市。謂わば王都への門。したがって、必然的にここを通る人間が多くなる。

「あっ！！　クレスさん、あの時計台凄いですよ！！」

シェリスが指差す先には、空まで届くような高さの時計台。まるで空を支えるかの如く立ったそれは、レディスのシンボルである。

「確かに凄いな」

クレスはそう言いながら、一度周りを確かめる様に視線を走らせた。

赤い剣士との闘いから三日、クレスは常に周りへの注意を怠らなかった。殺気を感じる事は無かったが、それでもあの女性が諦めた

とは考えにくい。ギルドの依頼とはそういう物だからだ。

「少し位はくつろいで下さいよ」

そんなクレスを見つめながら、シェリスは綺麗な顔を歪めた。

「こないだみたいに危険な人は近くにいませんから」

シェリスの言葉に、クレスは目を見開く。それと共にその足が思わず止まる。それに続く様に、シェリスの足も止まった。

「気づいてたのか？」

「精霊達が教えてくれました。相手まではわかりませんでしたけどね。クレスさんが何も言わなかったから、聞きませんでした」

シェリスはそう言ってから足を動かし始める。クレスもそれに続く様に、再び足を動かし始めた。

「それに、随分前から自分が狙われているのも知っていました」

シェリスは眉間に皺を寄せながら、時計塔を見上げる。青い瞳が、天まで届くであろう高い時計塔を映す。その瞳には、いつもの様な力は宿っていなかった。

僅かにシェリスの後ろを歩くクレスには、そんなシェリスの表情は窺えない。

「だから野宿は避けたかったのか？」

クレスは旅立ちの朝を思い出しながら、シェリスに尋ねた。

「はい。今まで黙っててすいませんでした」

シェリスはまた立ち止まり振り向くと、頭を下げた。クレスからは頭を下げたシェリスの表情は窺えないが、その声は僅かに震えていた。

只でさえ、その容姿で視線を集めるクレス。そのクレスに頭を下げるのは、違った意味で視線を集めるシェリス。

周りからの視線は畏怖や嫌悪から、次第に殺気に変わり始める。

「や、止めろよ、シェリス！！」

さすがのクレスも、そんな視線に耐えられなくなり、シェリスの肩を掴んで顔を上げさせた。

「はっ？」

シェリスの顔を見たクレスは、思わず自分の目を擦る。

声からはシェリスが泣いているとも感じたクレスは、シェリスの顔に浮かんだ表情を信じられなかった。

「エへへ……」

満面の笑みを浮かべながら、声を出して笑うシェリス。対称的に、クレスの顔に浮かぶのは明らかな怒りの表情。眉を吊り上げ目を細めるクレス。

「おま」

「初めて……」

怒りに満ちたクレスの声を遮るのは、嬉しさに満ちたシェリスの声。そのシェリスの声に、クレスは思わず押し黙った。

「……初めて名前で呼んでくれましたね」

シェリスがそう言った瞬間に、時計塔の頂上に着いた鐘が大きな音を立てる。レディス中に響くその音はしばらく鳴り響き、大通りを行き交う人々の足を止めさせていた。

「さすがは商業都市だな」

「そうですね。他では見られないものが沢山あります」

クレスとシェリスは、宿屋を探して歩いていた。まだ時刻は早いが、今日はレディスで宿を取ることにしたのだ。

レディスから王都までは、早くとも半日はかかる。今出れば間違いなく野宿は免れないのだ。

「それに色んな人がいますね」

「だな」

クレスが周りを見れば、大きな荷物を背負った商人の様な人物や、筋骨隆々の逞しい人物等と様々な人間が歩いている。

「さすがは王都の門って呼ばれるだけある」

「そう呼ばれているんですか？」

首をかしげながら口を開くシェリス。首をかしげた瞬間、シェリスの綺麗な青い髪が揺れた。

「知らなかったのか？」

「はい」

幼い頃から水の賢者の弟子として源域で生活をしていたシェリスは、源域の外の世界をあまり知らない。所謂、世間知らずと言うやつだ。

「この街レディスは、王都の門って言われてる。これは、王都に行くために絶対に通る街だからだ」

魔術の事を教わった時とは逆に、クレスが教える立場になりながら歩き続ける。

「ちなみに、商業都市って言われる様になった所以だが……」

クレスはそこまで言って口を閉じた。隣にいるはずのシェリスが消えていたのだ。

クレスが慌てて周りを見回せば、シェリスは近くの屋台に首を突っ込んでいた。

「おい」

「クレスさん、この食べ物は何ですか？」

シェリスが見つめる先には、三角形をした薄茶色の食べ物。屋台の周辺には、甘い匂いが漂っている。

「そいつはマルシュだ。食べるか？」

マルシュとは、小麦粉や砂糖等を混ぜて焼き上げた食べ物である。その甘さから、特に幼い子供達に好まれる。

「はい！！」

そう言って満面の笑みを浮かべたシェリスを見て、クレスは自分の顔が熱くなるのを感じた。実際に、クレスの顔はほんのり赤くなっている。

（態度が余所余所しくなくなったな……）

隣でマルシュを頬張るシェリスを見ながら、クレスは思わず微笑んでいた。

「クレスさんも食べますか？」

「俺は甘い物は嫌いでな」

クレスがそう言うと、シェリスは残念そうな表情を浮かべながら手に持つマルシュを見つめた。

「美味しいのに……」

この数日で、シェリスのクレスに対する態度が変わった。それはクレスの考えの通りである。

一番の変化が見られたのは今日であるが、クレスはその理由がよくわからない。

理由は実に簡単なものだが、女性の扱いに慣れてはいないクレスにはその簡単な理由さえわからなかったのだ。

更に、クレスはこの数日で、青い賢者様は年齢にそぐわず以外に子供っぽい一面があるという事に気づいた。

そこでクレスの目に、宿屋の看板が飛び込んだ。

「あそこにするか」

クレスはそれだけを言うと、宿屋に向かい足を進める。シェリスはマルシュを頬張りながら、その後に続いた。

暮れ始めた日は、商人の街レディスを黄昏に染める。

レディスのシンボルである時計塔の鐘は、日を反射して黄金に輝いた。

商業都市レディス（後書き）

シェリスが予想外に乙女になってしまいました（笑）
このまま乙女ロードをぶっちぎらせますかね。

さてさて、次は戦闘入りまーす。
戦闘描写は楽しいから好きですね。

剣対槍、水対土

広い草原を貫く街道。沢山の人が行き交うその街道は、王都ミルディアへと続く道。流石に王都へ続くだけあり、街道はしっかりと石で舗装されている。

心地よい風が吹くその街道を、ガリアと呼ばれる八足歩行の生物に引かれた荷車が沢山の荷物を乗せて王都に向かう。そして、その荷車の荷物に紛れて黒と青がいた。

「今日もいい天気ですね」

「だな」

本当にこれが世界を救うために動いている二人なのか。そう問いたくなる程に、閑な雰囲気を醸し出す二人、クレスとシェリス。

青い空には、その二人の雰囲気を手助けするように、白い雲が一つ揺ったりと漂っている。

「ミルディアに着いたらどうするんだ？」

「先ずは国王に謁見します」

二人の間に流れていた空気に、ほんの少し緊張感が走る。

「国王か……」

「はい。これでも賢者です。それくらいは出来ますよ」

ハルメリア国王、ヴァルゼルフ＝ハルムは、二十歳になる頃に王

位を継承した。それより三十年余り、民の事、国の事を考える良き国王と言われ国民に慕われている。
戦士としても有名で、その剣と魔術の実力から、老いた今でも敬われている。

「その後は？」

「まだ考えていませんが、とりあえず、土の賢者を止めるために動く事になると思います」

「だよな」

クレスはそう言って、荷車を引くガリアを見つめた。ふさふさの毛に覆われた体と、頭に生えた二本の角が特徴的な八本足の生き物。ガリアは、ゆっくりとではあるが確実に荷車を引く。

「クレスさん……」

クレスはゆったりと動くガリアから、空にも負けない青さを持つシェリスへと視線を移す。
そこには初めて会った時の様な表情を浮かべるシェリス。

「王都に着いた後も」

「協力するに決まってるだろが」

シェリスが言い切る前に、クレスは言葉を被せた。
そんなクレスの言葉に、シェリスが目を見開く。普段から大きな目が更に大きくなり、クレスを見つめる。

「……いいんですか？」

恐る恐るそう言ったシェリスに、クレスは全く反応しなかった。

「……乗りかけた船から降りるような男になるな！！　乗りかけた船には最後まで乗り続けろ！！」

急に叫ぶクレスと、目を見開いたままのシェリスの間を、緩やかな風が流れる。その風はクレスの黒い髪と、シェリスの青い髪を揺らす。

「って、アレンがよく言ってた」

クレスがそう言って微笑むと、シェリスは見開いていた目を細める。そしてクレスの微笑みに返すように、笑顔を浮かべた。

「最後まで一緒に闘ってやるよ」

それはクレスの精一杯、まるで誓いの様な言葉だった。

「それに、シェリスなら舵を任せるには充分だ」

そこで、荷車を引くガリアが低い声でゆったりと鳴く。ガリアの性格を表す様な鳴き方。

「水の賢者が舵を取る船だぜ。沈む筈がないしな」

クレスがそこまで言ったところで、街道に響いていたガリアの鳴き声が変わる。その鳴き声は、まるで威嚇の様な声。

二人を揺らしていた荷車が止まった。

「どうかしたのか？」

クレスは身を乗り出すと、荷車の座席に乗る白髪の老人に話しかける。街道を歩いていたクレスとシェリスを、荷車に乗せてくれた親切な老人だ。

老人はガリアを叩くための鞭を持ったまま、クレスに振り向いた。

「ガリアが急に座り込んでしまってのぉ。ちょっとばかし待っててくれな」

そう言って老人が鞭を振り上げた瞬間に、周りの空気が一変する。クレスは肌でそれを感じ取ると、老人の頭に手をかけていた。

「伏せろ！！」

クレスと老人が座席に伏せた瞬間、頭の上を高速で飛んできた岩が通過する。伏せていなければ、間違いなく頭が弾き飛ばされていただろう。

「シェリス！！」

クレスは後ろにいるシェリスの名を叫ぶと、荷車から飛び降りた。

「爺さん、ここまでありがと！！　早いとこここから離れるんだ！！」

クレスは慌てながらもそう言うと、先に飛び降りたシェリスの隣に走る。

「敵は？」

クレスが焦りながら出した声に、シェリスは無言で草原の先を指差した。

指の先にいたのは、緑の草原には不釣り合いな茶色のローブを纏った人物と、長い槍を携えた大柄な男。

ローブを着た人物は、フードを深く被っているため、どんな人物か判断が出来ない。逆に槍を持った男は、隠れるのは不可能と言わんばかりの真っ赤な服に身を包んでいた。

「どうする？」

「逃げるのは無理でしょうね」

冷静なまでのシェリスの言葉。だがその顔には緊張が浮かんでいた。

「だよな」

クレスが剣に手をかけると、シェリスが隣でシンクロに入る。

すると、槍を持った大柄な男が動き出した。

槍を持った男とクレス達との距離はまだかなり離れている。更に、茶色のローブを着た人物は全く動かない。

「シェリス、援護頼んだ！！」

クレスは剣を引き抜くと、それを右手に持ち駆け出した。槍の男をシェリスに近づけないために。

槍の男とクレスの距離が一気に縮まる。男が携えるのは槍、クレスの持つ剣とはリーチの差が大きい。つまり、ほぼ間違いなく先制攻撃は槍の男。

（先制攻撃はくれてやる……）

二人の距離が、大人二人分程になった瞬間、男が右手一本で槍を突き出した。その突きは、空気を切り裂く凄まじい音と共に、クレスの頭を狙う。

だが、それはクレスに当たらない。初撃を的確に見極めたクレスは、首を捻るだけで槍をかわす。かわす際に頬が切れたが、そんな事は気にしない。

男の懐に入ったクレスは、男の左肩から袈裟に剣を振るう。

筈だった。

男の懐に入った瞬間、頭の中で何かが警鐘を鳴らす。男が繰り出した突きへの違和感がそれをさせたのだ。

（何故コイツは、右腕一本で突きを出した？）

普通槍を突き出す時は、両手で構えて突き出す。片手では槍を扱うのが困難だからだ。だが例外もあり、もう片方の腕に盾等を持っていたり、余程力に自信があるなら片手で扱う場合もある。力に自信があっても、基本は両手持ちだが。

振り上げられた男の左手を見た瞬間、クレスは弾ける様に真横に跳んだ。

クレスが跳んだ瞬間、男の左腕が大上段から振り下ろされる。左腕が振り下ろされた先の草は、綺麗に刈り取られていた。
クレスは草の上を二回転程すると、回転の勢いで跳ぶように立ち上がる。そして直ぐに身構えた。だが、男からの追撃は無い。

そんな男の様子を見つつ、男が左手に持った『武器』を確かめる。無色透明なそれは、間違いなく武器だった。
男が左手に持つのは、近くで見なければ絶対に気づかない魔術で作った風の刃。刃のある部分だけ、空気が歪んでいた。

クレスはそれを見抜いて回避したのだ。もしクレスが並の動体視力ならば、草原にはクレスの首が転がっていただろう。

「やるな小僧」

顔に似合った渋い声で、大柄な男が喋り始めた。
顔から見て三十代半ばであろう白髪の男が身に纏う衣服は、派手な赤。そのデザインは、まるで国軍が着るような制服に近い。右手に持った長い槍は鉄製なのか、鈍く輝いている。そして、一番目を惹くのが左の頬にある大きな傷。

「今のを避けるとはな。大抵の奴は今ので終わってる」

男はそう言って槍を地面に突き刺すと、空いた右手で顎に生える真っ白な無精髭を撫でた。

「俺はオルグ、オルグ＝ゼルデルハ。お前の名は？」

急に名を聞かれたクレスは一瞬戸惑うが、剣を構えたまま口を開く。

「敵に名乗る名はない」

「つれないねぇ。せっかく今から……」

オルグはそこまで言うと一度言葉を切る。そして、不敵な笑みを浮かべた。

「……殺し合いをするのによ」

その瞬間、クレスは凄まじいまでの殺気を感じた。発信源は、間違いなく目の前にいるオルグ。

オルグは地面に突き刺さった槍を引き抜くと、力任せに水平に振るう。

凄まじい殺気に充てられた事で、クレスの判断が一瞬遅れる。いつもならバックステップで距離を取り、かわす一撃。だが、それが間に合わない。

クレスは剣の腹に左手を当て、オルグが繰り出した槍を受け止める。

だが、そこには明らかな力の差が存在した。槍を受け止めたクレスが、次の瞬間吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたクレスは背中を地面に打ち付けると、小さな呻き声をあげた。

その間にも、オルグは追撃の手を休めない。左手に持った、風の刃を振り上げる。

「イウ・フレチュ！！」

オルグが風の刃を振り下ろそうとした瞬間、澄んだ声が草原に響く。
それを聞いたオルグは、体格に似合わない機敏な動きでバックステップをすると、倒れたクレスと距離を取る。
次の瞬間、オルグが立っていた場所に、数本の水の矢が突き刺さった。
「クレスさん！！　大丈夫ですか！？」
そう言ってクレスに手を差し出すのは、偉大なる水の賢者だった。
「なんとかな」
クレスはシェリスの手を掴み起き上がる。オルグはその光景を見つめて、舌打ちをしていた。
「すまない、助かった。……ローブの奴は？」
クレスはオルグを警戒しながらも、シェリスを見つめる。
「あそこです」
シェリスが指を差したのは、オルグの後方。そこに茶色のローブの人物が立っていた。
茶色のローブを着た人物はゆっくりと歩いてオルグの隣まで来ると、深く被っていたフードを外した。
フードの下から現れたのは、幼さが残る顔。恐らく十代半ばであろう少女は、短く切り揃えられた茶髪から大きな目を覗かせている。

茶色の瞳を携えた少々吊り上がった大きな目は、少女の気の強さを表していた。

「悪い。邪魔したわね」

「全くだ！！　殺し損ねた！！　自分の担当くらい、ちゃんと抑えときやがれ！！」

オルグは少女に罵声を浴びせるが、少女は全く意に介した様子はなく、ただただクレスとシェリスを見つめている。

「おい！！　聞いてんのかキアラ！？」

「水の賢者、死んでもらうわよ」

キアラと呼ばれた女がそう言うと、纏う空気が変わる。シンクロを始めたのだ。

それに負けじと、シェリスもシンクロに入る。

「我に助力を……」

クレスはシェリスの隣でその言葉を聞きながら、オルグを見つめた。オルグは動く気は無いらしく、キアラの隣で直立不動を保っている。

クレス達とオルグ達の間には、大体大人三人分の距離。これは大した距離ではない。

クレスならこの距離を一瞬で詰め、詠唱中のキアラに攻撃を加える事は出来る。だが、それをすればオルグが動く。つまり、両者動かないのが得策。

「レ・シェルド・リ・ハレイド・シル・セイド……」

シェリスの詠唱が、こないだの山賊の一軒の時よりも長い。それに連れて、シェリスの周りの空気が鋭くなっていく。

「……ソル・パイン」

先に詠唱を終えたのはキアラだった。キアラが魔術の名を叫んだ瞬間、キアラ達の前の地面から土で出来た棘の様な物が生える。

その棘はクレス達に迫る様にして次々と地面を埋め尽くす。しかもクレス達に迫るにつれて、棘が段々と大きくなっていく。

「シェリス！！」

高速で迫る棘。それを見ていたクレスは、シェリスを棘から遠ざけようと華奢な肩に手を掛けた。

「ディラク・バッディ！！」

その瞬間、シェリスが魔術の名を叫ぶ。すると高速で迫る棘の前に、大量の水が現れた。

現れた大量の水は、まるで全てを飲み込む津波の様に、土で出来た棘を飲み込む。

そのままの勢いでオルグとキアラを襲った。

「やったのか？」

クレスは、シェリスが起こした津波が通った後を見ながら呟いた。津波の通った場所は地面が抉られ、見るも無惨な光景になっている。そこに白髪と茶髪の姿は無い。

「わからない……です」

そう言って倒れそうになったシェリスを、クレスが支えた。シェリスはかなり疲れた様子で、クレスに体を預けている。

「大丈夫か？」

「ちょっと大技でしたから……」

肩で息をするシェリスは明らかに衰弱していた。

魔術を使用するには、精霊が所有する魔力の他に、術者本人の体力を消費する。

シェリスが先程放った魔術は、水の魔術の中でも上位に位置する威力を持っている。そのため体力の消費が激しかったのだ。

大精霊本来の魔力を借りれば容易い魔術だが、生憎と今シェリスの側にいるのは大精霊の思念体にすぎない。そのため、シェリス本人の消費が激しかったのだ。

シェリスはそれをわかっていながら、大技を放った。これは、四大属性の関係に起因する。

四大属性には優劣が存在する。例えば炎、炎は水に弱く、風に強い。この様な優劣である。

水は炎に強く、土に弱い。この優劣の関係から、シェリスは大技を使うしかなかったのだ。
更に言えば、キアラが使った土の魔術も、上位魔術であった。
クレスは、シェリスを支えたまま周りを見回す。広い草原には何の影も捉えることは出来ない、更に言えば、後ろの街道を通る影も無かった。
クレスはそれを確認すると、疲れきったシェリスに口を開く。

「奴等は退けたみたいだし、少しや」

少し休め。そう言おうとしたクレスは口を閉じた。自分に向けられる凄まじい殺気を感じたのだ。その殺気は、先程感じたものと同じ。
瞬間的に周囲に視線を走らせる。だがそれらしき人物は見当たらない。

クレスの隣にいるシェリスも、その殺気を感じていた。だが、体が言うことを聞かない。

「クレスさん……」

「任せて休んでろ」

クレスはそう言ってシェリスを草の上に座らせてから、ある影に気づいた。
出来るはずのない影が、確かにそこに存在する。

「上か！！」

クレスが影の正体を確かめる様に空を見れば、そこにはオルグと、

肩に担がれたキアラ。
オルグが凄まじい音と共に草原に着地すると、一瞬小さな地震の様な揺れが起こる。
「流石は賢者様だな。魔術で空に逃げるのが一歩遅れてたら、間違いなくやられてたぜ」
オルグは肩に担いだキアラを、ゆっくりと地面に降ろす。降ろされたキアラはぐったりとしていて、意識が無い様子だった。
「キアラが気を失う程の魔術放って、それに撃ち勝ってもまだ、意識を保つだけの力があるとはな」
オルグは笑みを湛えながらそう言うと、シェリスを見つめる。そして、左手に持った槍を両手で構えた。
「敵ながら天晴れだぜ。まぁ、死んでもらうがな！！」
オルグが動くよりも速く、クレスが動く。オルグをシェリスに近づけない様に、剣を構えて立ち塞がった。
そのクレスに、オルグが神速とも呼べる突きを繰り出す。両手で持った事により、突き自体さっきよりも速い。クレスはギリギリでその突きをかわすが、かわしきれずに服が切られる。
クレスはそれを気にせず、槍の引き際を狙い懐に飛び込もうとした。
だが、それはできない。

（速すぎる！！）

オルグからの第二射が速い。懐に飛び込むだけの時間が無いのだ。

オルグの槍は一見力任せだが、突きは的確に最短距離を走り、更には速さがある。そして、それに負けない引きの速さと速射性が備わっていた。

近づく事も許されないクレス。ギリギリでオルグの槍をかわしているが、段々と生傷が増えていく。

「リ・シュル・ラント……」

オルグは素早い突きを繰り出しつつも、魔術の詠唱を始める。それは一流の証。

「ヴェン・レイム」

オルグが呟いた瞬間、クレスを風の刃が襲う。

空気が歪んでいるので肉眼で捉えられない事はないし、数が多すぎるわけではない。だが、クレスはそれをかわせなかった。

風の刃に気を逸らせば、オルグの槍に貫かれる。そんなイメージが、クレスの頭にハッキリと浮かんでいたのだ。

一旦距離を取ろうにも、クレスの後ろにはシェリス。

風の刃がクレスを斬りつけた。肩や太股から、血が噴き出す。

クレスは痛みに顔を歪めるが、止まりはしない。止まれば死ぬ。

その現実がクレスを止めさせない。

そんな状況の中で、クレスの頭をよぎるのは自身の幼少時代だった。

大きくもなく、小さくもない広場。そこに、赤髪と黒髪がいた。

「まだまだだなクレス」

そう言いながら、小さな木造の剣をかわし、笑顔を浮かべる義父アレン。そして小さな木造の剣を振るうのは、アレンの胸元あたりまでしかない小さなクレス。

「やれやれー！！」

「今日こそ一発かましせよー！！」

その二人を囲むようにして見つめるのは、アレンが作ったばかりのギルド『フォーセリア』に所属する人間達。どの顔にも、笑顔が張り付いていた。

幼いクレスは木造の剣を握りしめると、アレンに向かって振り上げる。

だが、クレスの剣は虚空を斬った。

「こっちだ、こっち」

アレンはそう言って舌を出し、幼いクレスを挑発する。幼いクレスはそれだけで頭に血が昇り、がむしゃらに斬りかかる。

すると、アレンが目を閉じた。幼いクレスの剣が、目を閉じたア

レンに迫る。
だが、それはまたしても虚空を斬った。
「エッ！？」
さすがに目を閉じたアレンには当てる事が出来ると思っていたクレスは、すっとんきょうな声を出していた。
「ハンデだ。早く撃ってこい」
アレンが目を閉じてそう言った事に対して、クレスは更に頭に血を昇らせる。そして、なりふりかまわず剣を出した。
大上段からの振り下ろし、そこからの振り上げ。左右からの袈裟斬り、横一線。
全てがギリギリでかわされる。その間もアレンの目が開く事はない。
遂には幼いクレスの体力が底を尽き。クレスは地面に倒れた。
「目を、閉じてんのに、何で、当たん、ないんだ……」
地面に仰向けになったクレスは、肩で息をしながら独り言の様に呟いた。
目を閉じたアレンにかする事さえ出来ない。その事実が幼いクレスに、悔しさを与えた。
「人が武器を振るう時、その武器には殺気が宿る」

地面に仰向けになったクレスに聞こえる様にして、アレンが喋り始める。クレスは真っ青な空を見つめながらも、義父の話に耳を傾けた。

「そしてお前の剣にもそれはある。俺はそれを感じ取って動いただけだ」

「殺気を、感じて？」

息を整えたクレスは、仰向けになりながらアレンを見上げた。

「そうだ。目だけに頼るな、肌で感じ取れ」

アレンはそう言って、大きな掌を仰向けになっているクレスの頭に置いた。そのゴツゴツの手で、クレスの真っ黒な髪をかき混ぜる。

「アレンさん、クー坊にはまだ無理ですよ」

『クー坊』、それは幼き頃のクレスの呼び名。

「今はな……」

アレンはクレスの頭をかき混ぜるのを止めると、赤い瞳を細めた。

「だが、クレスならいつかは出来る。なんせ俺の息子だからな！！」

アレンの言葉に、周りにいた人間達は声を揃えて笑った。

オルグの槍が頬を掠める。その風圧に、クレスの真っ黒な髪が揺れた。

（……目に頼るな、肌で感じろ！！）

オルグの怒濤の突き、それはまるで槍の雨。その一つ一つが的確に急所を狙い、一つ一つが一撃必殺の威力を持っている。

クレスはその槍を目で追えているが、時折混ぜるフェイクが読みきれない。

「しぶといな、小僧」

クレスはその声に耳を傾けない。右耳の直ぐ脇ををオルグの槍が掠め、凄まじい音がクレスの耳にはいるが、クレスはそれも気にしなかった。

オルグの顔には笑みが浮かぶ、その笑みはクレスにとって死神の笑み。クレスは死神を視界の端に置きながら、繰り出される槍だけに意識を向ける。

槍だけに意識を向け、他の物は排除する。それを可能にするのは凄まじいまでの集中力。

クレスは集中力を限界まで研ぎ澄ますと、自ら『視覚』を切り捨てた。

「何だと？」

オルグは自分の目の前にいる、黒い剣士の行動が信じられなかっ

た。
闘いの最中に目を閉じる。それは自殺行為に他ならない。
「遂に観念したか」
オルグはそう言って口角を吊り上げると、今日一番の突きを放つ。
しかし、その突きがクレスに当たる事はなかった。
クレスは槍をギリギリでかわすと、弾幕の中に歩を進める。目を閉じた状態のクレスだが、瞼の裏の暗闇には全てが『映って』いた。
一瞬驚愕の表情を浮かべたオルグだが、直ぐに嵐の様な突きを再開。
クレスの瞳にそれは映らないが、クレスはそれがわかっていた。次々に自分に迫る槍を、木の葉の様にかわす。
クレスは肌で感じていた。自分に向けられる殺気と、武器に宿る殺気を。
クレスは、肌で、耳で、オルグの繰り出す槍の威力を感じていた。一発でも当たれば命を刈り取られる。その恐怖が、クレスの背中を流れる冷や汗となる。
だが、クレスは足を止めず、一歩一歩オルグに近づく。その間にも、轟音は鳴り止まない。槍が起こす風が、クレスの真っ黒な髪を弄ぶ。
そしてクレスは遂に到達する。難攻不落に思われた、オルグの懐に。
クレスが目を開けば、真っ黒な瞳に映るのはオルグの驚愕の表情。クレスは剣を両手で構えると、闘いを終わらせるために剣を振るう。

だが、その剣がオルグに当たる事はなかった。オルグの脇腹から右肩にかけて振りきられる筈だったクレスの剣が、地に落ちる。
剣に続くようにして、クレスの膝が崩れた。

「なん、だ？」

自分が斬られると思っていたオルグが目を見開く。
目の前に横たわるのは、今しがた自分を追い込んだ黒の剣士。

「クレスさん！！」

状況を理解出来ないオルグと地に伏せるクレスの間に、青が滑り込む。何とか立つ事が出来たシェリスが、飛び込んだのだ。

「危なかったわね」

黒と青に目を奪われていたオルグは、少し高めの声に振り向いた。

「……キアラ」

オルグの視線の先に立っていたのは、土の魔術師キアラ。その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「お前がやったのか？」

「えぇ、体力的に初歩的な魔術しか使えなかったから、殺せはしなかったけど」

いつの間にか意識を取り戻したキアラは、クレスがオルグに剣を振り上げる直前に魔術を放っていた。
キアラがやったのは土の球体を飛ばすという初歩的な魔術だが、それでも後頭部にクリーンヒットすれば意識を飛ばす位は簡単なことだ。

「殺すなら私だけにしなさい！！」

静かになった草原に響いたのは、シェリスの澄んだ声。シェリスは真っ青な瞳で、オルグとキアラを睨みつける。

「あなた達は私を狙って来たんでしょ？　なら、クレスさんは殺さないで！！」

それは偉大なる水の賢者からの懇願。世界の均衡を支える賢者からの、切なる願い。

「考えといてあげるわ。貴女はとりあえず死んで」

キアラはそう言ってローブからナイフを取り出すと、そのナイフをシェリスの喉元に突き付ける。

キアラが白く細い首にナイフを突き刺そうとした瞬間、オルグの大きな手がそれを止めた。

「なっ！？　オルグ、裏切るの！？」

「まさか」

オルグに手を掴まれたキアラは、その大きな目を見開いてオルグを見つめる。
ほんの少しだけシェリスの首に食い込んだナイフの先からは、青とは対照的なまでの赤が流れた。

夢と現実

真っ赤な鮮血を撒き散らしながら、シェリスの首が飛ぶ。真っ青な髪が揺れながら、シェリスの頭が音を立てて地面に落ちる。
赤と青が混じり合うそれは、凄惨な光景でありながら幻想的な美しさを醸し出していた。

「シェリス！！」

黒い剣士は叫ぶと同時に目を覚ました。
そこは白い部屋。窓から入る月明かりが、クレスの眠っていたベッドを照らしている。

「……夢？」

クレスは一度周りを見回すと、自分の身体に目を移す。上半身は裸で至る所に包帯が巻かれ、肩や太股は熱を持っているらしくジンジンと痛む。

白い部屋には様々な薬品の匂いが漂い、クレスの嗅覚を刺激する。
そしてクレスは気づいた。自分がいる場所が医務室であることに。

クレスを焦燥感が襲う。医務室であることはいいとして、肝心の青が見当たらないのだ。

「……夢じゃなかったのか？」

凄惨にして美しい光景が、クレスの頭から離れない。もしあれが現実だとするならば、水の賢者はこの世にいない。

「そんなことない！！」

クレスは自分の考えを振り払う様に頭を振ると、シェリスを探すためにベッドから起き上がる。

『あれだけ強いシェリスが、死ぬはずがない』。クレスを動かすのはその思いだけだった。

そこで医務室の扉がゆっくり開く。月明かりだけしかない部屋に、扉の隙間から明かりが差し込む。

クレスは自然と身構える。オルグ達に自分が捕まった事も考えられたのだ。

クレスには体術の心得もある。剣が無くとも少しは闘える。

（来るなら来やがれ……）

「起きましたか、クレスさん」

扉を開けた人物が発したのは、クレスの名。柔らかなその声は、クレスが聞きたかった澄んだ声。

偉大なる水の賢者シェリス＝ミアルタはいつもと変わらない真っ青なローブを着て、笑顔を浮かべながらそこに立っていた。

瞬間、クレスは走っていた。そしてシェリスを力一杯抱き締める。

「良かった！！　生きてたんだな！！」

クレスは自分が上半身裸なのを気にせず、シェリスを抱き締める。体の節々が痛むが、今のクレスには関係なかった。
シェリスが生きていた。その事実がクレスに痛みを忘れさせる。

「ク、クレスさん、苦しいです！！」

シェリスの声に我に返ったクレスは、シェリスの背に回していた手を一瞬にして引っ込める。
勢いで抱き締めてしまったクレスと、抱き締められたシェリスの顔が一気に赤くなる。その様は端から見れば滑稽で、しかし、見る者によっては初々しさを感じさせるだろう。

そこでクレスはある事に気づく。シェリスの首に、いつもは無い物が巻き付いている事に。白いそれは、包帯。怪我をした場所に巻くための物。

「シェリス、その首……」

そう言ったクレスの顔から、一気に熱が引く。夢で見た光景を思い出したのだ。

「あぁ、ちょっと斬られちゃいまして」

シェリスはそう言って微笑んだ。殺されそうになったにも関わらず、微笑みを浮かべるシェリス。
クレスは自然と、シェリスから顔を逸らしていた。

「……すまない」

顔を逸らしたクレスから漏れたのは謝罪の言葉だった。

「俺が弱いばかりに、お前に」

「クレスさん」

クレスが言葉を言い切る前に、シェリスの澄んだ声が部屋に響く。シェリスの声には、心なしか怒気が含まれていた。

「私は、この傷がクレスさんのせいだとは思っていません」

シェリスは自分の首に手をやり、クレスを見つめる。真剣な眼差しに見つめられたクレスは、思わずたじろいだ。

すると、シェリスが急にクレスの肩に触れた。包帯の上からだがクレスは一瞬痛みを感じる。だが、顔には出さなかった。

「クレスさんの怪我こそ、私の責任なんです……」

そう言ったシェリスの青い瞳が細くなり、憂いを帯びる。

「私がクレスさんを巻き込まなければ……」

遂にはシェリスの頬を涙が伝う。流れる涙は、不安からくる涙。自分のせいでクレスが死にかけた。その事実が、シェリスの肩に重くのしかかっていたのだ。

「シェリス……」

クレスはこういう時にどうしていいか分からない。と言うか、今まで女性が目の前で泣いた事を見たことがない。

顔には出さないが内心慌てるクレスと、嗚咽を堪えて泣くシェリ

ス。

この空気を何とかせねばと、クレスは頭の中で沢山の言葉を想像しては打ち消す。気が利いた言葉が全く浮かばないのだ。

「……おあいこ」

考えのまとまらないクレスから放たれた言葉に、シェリスはうるんだ目でクレスを見つめた。不謹慎にもそのうるんだ瞳が綺麗に思えたクレスは、ほんのりと顔を赤くする。

「おあいこって事にしとこうぜ」

それは、とりあえず何か言わなければ、そんなクレスの想いから出た言葉だった。

「俺も死にかけたし、シェリスも死にかけた。けど、俺たちは生きてる」

クレスはそこまで言ってから一度微笑むと、シェリスの頬を伝う涙を指で拭う。その急な行動にシェリスは顔を赤くするが、クレスはそれに気づかない。

月明かりとドアから入る明かりだけの室内は、まだ暗かった。

「それでいいだろ」

「……はぃ」

闇に消え入ってしまうんではないかと言う程に、小さくか細いシェリスの返事。

だがクレスにはそれで充分だった。目の前に存在する青は、闇に消え入るような存在ではない、クレスはそれを感じていたから。

「それに俺たちは仲間だ。『誰か一人に責任を押しつけるなんて、仲間のすることじゃねぇ！！』って、昔アレンが言ってた」

義父アレンの教え、それがクレスの中核を形作っている。

「……仲間」

「あぁ、偉大なる水の賢者と欠陥品。随分と不釣り合いな仲間だ」

クレスがそう言って笑顔を浮かべた瞬間、泣き止んだかに見えたシェリスの目から涙が溢れだす。

今度はクレスが慌てる事はない。クレスにさえわかっていた。

シェリスの涙が、嬉しさから来る涙だと。

暖かな涙を流し続ける青は誓う。黒き剣士を信じ続ける事を、仲間を信じる事を。

体中包帯だらけの黒は誓う。今よりも強くなる事を、青き賢者を護れるだけの強さを手に入れる事を。

人々が眠りに就く夜。その闇を照らすのは沢山の星と、真っ白な月。白き月と沢山の星は、黒き剣士と青の賢者の誓いをしっかりと受け取った。

赤い髪

灯りを付けた医務室。その真っ白な医務室の真っ白なベッドに、対称的なまでの真っ黒な剣士と、白に映える青い賢者が座っていた。

「とりあえず聞きたいんだが……」

服を着たクレスは隣に座るシェリスに声をかけた。クレスの着ていた服はボロボロだったため、シェリスが持ってきてくれた代えの服を着ている。

シェリスが持ってきた服は、クレスが今まで着ていた物と大して変わらない。黒いジャケットに赤のインナー。少し変わった所があるとすれば、クレスの胸元から覗く白い包帯ぐらいだ。

「ここは何処だ？」

クレスの疑問は当然のものだった。

クレスの記憶の中には、草原でオルグ達と闘った時の物までしかない。自分が何故医務室にいるか分からないのだ。

「王都ミルディアです」

クレスの問いを予想していた様に、シェリスがサラリと言葉を紡ぐ。その言葉に、クレスは頭を掻く。

クレス達がいるのは、王都ミルディアにある病院の医務室。小さな病院のため病室が無い。そのため、クレスは医務室のベッドに寝させられていたのだ。

「何故ミルディアにいるのかはいいとして……」

クレスは次の疑問を聞くのを躊躇った。さっきのシェリスの涙が頭から離れない。

だが、クレスはそれを聞かずにいられなかった。

「……じゃあ、俺たちは何で生きてる？」

クレスがそう言った瞬間、二人の間を流れる空気が変わる。張りつめた空気は、少しの緊張を含んでいた。

「実は……」

シェリスの青い瞳が、クレスの黒い瞳を捉える。シェリスは後に続けるべき言葉を探すが、それがわからなかった。

「……私にもわからないんです」

だからこそ、シェリスは正直に事実を口にした。形のいい眉を下げ、申し訳なさそうな顔をするシェリス。

クレスは全く予想していなかったその言葉に目を見開く。

「何だそりゃ……」

クレスの一言で、二人の間に張りつめていた空気が変わる。そこに緊張は無い。

そしてクレスは、思わず笑みを浮かべた。

「命が助かったのに、その理由を知らない二人ってどうなんだ？」

「それもそうですね」

シェリスはクレスに釣られる様に笑顔を浮かべる。だが、直ぐに何かを思い出した様な表情を浮かべた。

シェリスが思い出したのは、自分が気を失う前に見た色。

「クレスさん」

「どうかしたか？」

クレスは笑顔を浮かべながらシェリスを見つめる。

しかしそのクレスの表情は、次のシェリスの一言で一気に強ばる事になる。

「赤です」

「……赤？」

「私が意識を失う直前に見たのは、赤でした」

キアラにナイフを突き付けられたシェリスが、最後に見たのは『赤』。燃える様な赤が、自分とキアラの間に滑り込んだ姿だった。

『赤』その色をした人物をクレスは知っていた。クレスの知る赤ならばあの草原に現れる事も可能だろう。だが、クレスはその考えを打ち消す。

あり得るはずが無いからだ、クレスの知る赤の目的はオルグ達と同じ目的。その赤が自分達を救った。クレスはその考えを、頭を振って再度打ち消した。

「きっと私たちを王都まで運んでくれたのも、あの『赤』だと思います」

シェリスはそう言って立ち上がる。立ち上がった瞬間、シェリスの青い髪が揺れた。

「お医者様に、クレスさんが起きた事伝えて来ますね」

そう言ってシェリスが部屋を出ていく。その時、シェリスの真っ青なローブからある物が落ちた。

二人はその落ちた物に気づかない。気づくはずがない物だから。

木の床に音もなく落ちたのは髪。それは、まるで燃える様に赤い髪だった。

◇

「退けるだけでこれとは、流石は『帝槍』オルグね」

月の光も届かない路地を、赤い剣士が歩く。闇の中でも映える白、二の腕に巻かれたそれには真っ赤な液体が滲んでいた。

「姉ちゃんお暇かい？」

赤い剣士の前に二人の男が飛び出した。明らかに柄の悪い二人は、赤い剣士を見てニタニタと下品な笑みを浮かべる。

「暇なんだろ？」

「暇なら酒の」

そこまで言って二人の男は目を見開いた。その目に映るのは、レンガで舗装された道。

「悪いけど、忙しいのよ」

赤い剣士の口調は大人の色気を感じさせる。だがその声には、圧倒的なまでの狂気が含まれていた。

「死んでは駄目よ。黒の剣士と青き賢者……」

暗い路地に四つの音が響く。人が二人倒れる音と、二つの首が落ちる音。

「あなた達を殺すのは私なんだから」

赤い剣士は自分を倒す奇跡を起こした黒い剣士と、剣士の護る青い賢者を想い浮かべる。

そして剣士は口角を吊り上げた。妖艶な笑みを浮かべた赤き剣士は、幻想的な白い月を見上げる。

謁見

王都ミルディアは、ハルメリア国で最も美しいと言われる都である。王が住まう場所『ミルディア城』を中心に広がる円形の都には、沢山の川が流れている。その大量の水は、水の大精霊の恩恵に他ならない。

そして、赤褐色のレンガで整備された道の脇には、沢山の木が植えられている。その木々と沢山の川のおかげで、都でありながら自然界の風景を断片的に作りあげていた。

「変わらないな」

城へと続く大通りを歩く黒は、独り言の様に呟く。その隣を歩く青には、その呟きが聞こえていた。

「クレスさん、王都に来たことあるんですか？」

「ん、あぁ幼い時にな」

クレスの頭には、ギルドの仕事により王都に行くアレンに、無理矢理連れて来られた記憶があった。

それを思い出したクレスは、思わず声を出して笑う。

「どうしたんですか？」

そんなクレスを見て怪訝な表情を浮かべるシェリス。隣を歩く人物がいきなり笑い出したら、誰であろうとシェリスの様な表情を浮かべるだろう。

「昔、王都に来た時の事を思い出してな」
「聞いてもいいですか？」
「大して面白くないかもしれないぞ」
無骨なブーツでレンガを叩きながら、クレスが苦笑いを浮かべた。
「それでもいいです」
シェリスの目は輝いていた。それはまるで、知識を得ることを楽しむ幼子。
「俺が小さい時に、アレンが仕事で王都に来ることになってな。俺を連れてこうとするんだよ。その時俺が『行きたくない！！』って言ったら、アレンどうしたと思う」
「……物で釣ったとか」
シェリスの答えを聞いたクレスは、口の端を上げて微笑んだ。
「それならまだましだな」
「ましなんですか？」
シェリスはアレンの事を思い出す。
短い間しか接していないが、それでもシェリスの中にはアレンのキャラが確立していた。所謂、『親バカ』として。
「あの時初めて息子に土下座する親を見たよ」

「はっ？」

クレスの言葉を聞いたシェリスは、思わず間抜けな声を漏らしていた。それはシェリスからは、考えられない様な間抜けな声。

「泣きながら『クレスが来ないと、死んじゃうー！！』って言って土下座とか、あり得ないよな」

笑顔でそう言うクレスを見つめるシェリス。

その時シェリスの頭の中では、アレンが究極の親バカとして位置付けられた。

「それにしても、変わらないな」

クレスがもう一度呟いた言葉に、シェリスは頷いて返すと、中心にそびえ立つ城を見つめた。

シェリスは気づいていない、クレスの言葉に秘められた真意に。

周りからは昔と変わらない痛々しいまでの視線が、クレスに突き刺さっていた。

しばらく他愛もない話をしながら歩いた二人は、いつの間にかミルディア城の門まで辿り着いていた。馬車等も通れそうな大きな門は、重厚な雰囲気を醸し出している。

「国王陛下と謁見したいのですが？」

鎧に包まれた門番二人を前に、偉大なる水の賢者が告げる。門番達は一度クレスとシェリスに目をやると口を開いた。

「国王陛下はお忙しい、早々に立ち去れ」

門番はそれだけ言うと、クレスとシェリスから目を離す。門番の無骨な鎧が、日を反射して鈍く輝く。

「水の賢者シェリス＝ミアルタが、謁見を望んでいるとお伝え下さい」

至って丁寧なシェリスの言葉に、鎧を着た門番二人の目付きが変わる。そしてシェリスの胸元に付いた魔石を見た瞬間、門番二人の顔が一気に青ざめた。

シェリスが胸に付けた魔石は一般的には意味が知られていない。実際に、クレスも魔石の意味を知らなかった一人だ。だが、城に仕える者達なら誰もがその意味を知っている。

「た、直ちにお伝えいたします！！　ご無礼お許し下さい！！」

シェリスは慌てる門番に笑顔で頷くと、呆けた表情を浮かべるクレスに目をやる。

「クレスさん、口」

クレスはそう言われてから、自分の口が開いている事に気づき直ぐに閉じた。シェリスはそれを見て笑顔を浮かべる。

「流石は賢者様」

「止めて下さいよ。賢者と言っても、もし大精霊の力が無ければただの魔術師に過ぎませんから……」

クレスには、そう言って微笑んだシェリスの表情に陰りが見えた。だが、クレスはそれについて追求しない。

賢者と言う高い所にいるからこそ、沢山の重圧や期待を背負うシェリス。そのシェリスの気持ちが自分に分かる筈がない、クレスはそう考えていた。

「それにしても、俺が国王様と謁見か……」

クレスは数日前までの自身を思い浮かべて苦笑を漏らす。

昼はギルドの依頼をこなし、夜は仲間と酒を飲む。それが当たり前だったクレスが、一国の主と対面する。

（さすがに緊張する……）

クレスは自身の真っ黒な頭を掻くと、一度溜め息を吐いた。

「大丈夫ですよ。国王陛下は素晴らしい方ですから」

シェリスの笑顔が余計にクレスを強ばらせる。

そこに門番の一人が帰って来た。

「お待たせしました！！　国王陛下が謁見の間でお待ちです」

「わかりました。ありがとうございます」

シェリスは笑顔でそう言うと、開かれた門を通り城内に足を進め

る。クレスは黙ってその後を追う。

クレスの前を歩くシェリスの足が一定のリズムを刻む。広い王城内を淀みなく進むシェリス。

まるで迷路の様に沢山の道と部屋がある王城内、クレス一人では間違いなく迷子になっているだろう。

クレスはシェリスに感心しつつ、前方に大きな扉を発見する。

その扉の前に立つ一人の男性が目に入った。金の鎧に身を包まれたその立ち姿は、その人物の位の高さを示している。

「久しぶりですな。賢者様」

その人物はシェリスが近づくと、ほんの少し頭を下げてそう言った。

「お久しぶりです。と言いたい所ですが、そんなに久しくないですよ」

「そうでしたかな？　歳を取ると記憶が曖昧になって仕方ない」

そう言って白い髪を撫でながら微笑む人物。

顔には深い皺が走り、その人物が高齢であることを窺い知る事ができる。だが、金の鎧に包まれていてもなお知る事が出来るがっしりとした身体つきは、年齢のそれを感じさせない。

ふと、クレスと金の鎧を着た人物の目が合った。その青い瞳はクレスを射抜く様にして見つめている。本当に高齢なのかと疑いたくなる程の眼力に、クレスは一瞬たじろいだ。

だが何がそうさせたのか、クレスは自身の黒い瞳に力を宿すと、金の鎧を着た人物を睨む様にして見つめ返す。

すると突然、金の鎧を着た人物が目を細めた。

「良い目をしておる。こちらが賢者様が探していた者かな？」

「はい。クレスさんです」

シェリスがそう告げると、金の鎧を着た人物がクレスに手を差し出した。

「陛下直属近衛師団団長、ギルバート＝ライズディングじゃ」

「あんたが、団長？」

明らかに五十歳は過ぎているであろうギルバートの言葉に、クレスは眉間に皺を寄せた。

近衛師団と言えば、国の中でも超一流と呼ばれる戦士だけが成れるものである。だからこそ、目の前にいる老兵の言葉がクレスには信じられなかった。しかも、老兵は自分を団長と言うのだ。

「まだまだ若い者には負けんよ。それと、目上への言葉使いがなっとらんな」

そう言ってギルバートがもう一度前に出した手を取った瞬間、クレスの中でギルバートへの認識が百八十度変わる事になる。

無骨な手を握った瞬間クレスが感じたのは、超一流の者だけが持つ圧倒的威圧感。ギルバートが故意に抑えていた物が、瞬間的に噴

き出したのだ。

「ク、クレス＝バーキンスです」

その圧倒的威圧感に充てられたクレスは、思わず自分の名を告げていた。

「ほぅ、バーキンスとな。もしやアレンの息子か？」

ギルバートの低い声がほんの少し高くなる。眉を上げ楽し気な表情を浮かべるギルバート。

「アレンを知っているんですか？」

近衛師団団長から出た名に、クレスはまた眉間に皺を寄せた。そして思い浮かべる、親バカとも言える自分の義父の顔を。

「今から十五年前の内戦を知っておるかな？」

十五年前の内戦、それはハルメリアを二つに別ける大きな内戦。現国王ヴァルゼルフ＝ハルムを、その地位から引きずり下ろそうとした人間達が原因となった戦である。後に国王の名を借りて『ヴァルゼルフ大戦』と呼ばれる事になったこの内戦は、ハルメリア史上最も大きな内戦となった。

「はい」

「アレンはあの内戦で素晴らしい成果を上げてな」

ギルバートはそう言いつつ、顎から生えた真っ白な髭を撫でた。

そして青い瞳を細め、クレスを見つめる。

「懐かしいのぉ」

クレスとアレンの顔は全くと言っていいほど似ていない。義理の家族なのだから当然である。それでもギルバートは確かに感じた、クレスの中に『炎帝』と呼ばれた若き頃のアレンを。

「さて、陛下がお待ちじゃ。くれぐれも粗相のないように」

ギルバートはそう言うと、自分の後ろにある大きな扉に手をかけた。

クレスは一度ゴクリと喉を鳴らすと、ゆっくりと開く扉を見つめる。その隣にいるシェリスは、至って平然とした表情を浮かべていた。

（……すげぇ）

扉の向こう側の景色を見た瞬間、クレスは心の中で感嘆の声をあげた。

先ず目を惹くのが、扉から玉座まで伸びる真っ赤な絨毯。その赤はまるで血の色。そしてその赤き道を囲むのは、鋼鉄で出来た鎧を纏う沢山の兵士。その全てが胸の前で剣を構え、直立不動の体勢を維持していた。

金色の鎧を身に纏ったギルバートが、その赤き道を進む。その後を黒と青が追う。

歩調を合わせて進む二人の顔には、全く違った表情が浮かんでいる。シェリスは平然としているが、クレスは緊張からか顔が強ばっ

ていた。

そして二人は辿り着く、ハルメリア史上最強最高と呼ばれる国王、ヴァルゼルフ＝ハルムの元に。

またの名を『戦神』と呼ばれる国王は、クレスとシェリスを笑顔で招き入れた。

王の前まで辿り着くと、シェリスは真っ赤な絨毯に膝を突き頭を下げた。クレスもそれに倣い膝を突く。

二人の前を歩いていたギルバートは、玉座に座る王の隣に立っている。その姿は、正に王を護るガーディアン。

「面をあげよ」

少し低めの声が静まりかえった謁見の間に響く。その声に従う様に、クレスとシェリスが顔を上げた。

玉座に座るのは国王ヴァルゼルフ＝ハルム。

その顔にはギルバート程でないにしろ、深い皺が刻まれている。その金色の髪と金色の瞳は一国の主である気品を漂わせ、沢山の装飾が施された衣服がその地位を示していた。

服の上からでも分かる身体つきは、五十を過ぎたとは思えない程に鍛え上げられている。

「よくぞ無事で」

そう言ったヴァルゼルフは、笑顔を浮かべてシェリスを見つめた。細められた金色の瞳からは、シェリスを本当に心配していた様子がよくわかる。

「ありがたき御言葉です」

シェリスはそう言って笑顔を浮かべる。ヴァルゼルフはそのシェリスの笑顔を見ると、シェリスの隣にいるクレスへと視線を移した。

ヴァルゼルフの金色の瞳が、クレスの黒を映す。

「その剣士が例の？」

「はい」

ヴァルゼルフの言葉に、シェリスは至って簡潔に返事をした。

「お主、名は？」

ヴァルゼルフの言葉に、クレスの心臓が跳び跳ねる。クレスの握りしめられた手には、いつの間にか汗が滲んでいた。

「ク、クレス＝バーキンスで、です」

極度の緊張から吃りながら喋るクレスを見て、ヴァルゼルフが笑みを浮かべる。

「そう緊張するな、何も取って喰おうというわけではないのだからな」

ヴァルゼルフは柔和な笑みを浮かべてクレスを見つめた。ヴァルゼルフの顔にある沢山の皺が更に深くなるのを見て、クレスは思わず笑いそうになる。

だが、クレスは何とか笑いを堪える事に成功した。頬の筋肉は痙攣しているが。

（ここで笑えば間違いなく首を落とされる……）

未だ痙攣する頬。笑ってしまえたらどれだけ楽か。だがそれをすれば、クレスは金輪際笑えなくなるかもしれない。その思いがクレスを笑わせなかった。

「は、はい」

クレスが絞りだした返事にヴァルゼルフは笑みを浮かべる。今度の笑みは控えめな物で、それは気品を感じさせた。

「さて、本題に入ろう」

ヴァルゼルフの顔から笑顔が消える。その瞬間、ヴァルゼルフから発せられた威圧感にクレスの背を冷たい汗が流れた。

ギルバートから発せられた物も充分過ぎる物だったが、『戦神』と讃えられる王が出したそれは格が違った。

それは、謁見の間にいる全ての者が感じていた。『近づけば虫けらの様に踏み潰される』。そんなイメージを誰もが持つほどの威圧感。

「……セレスタ国が土の賢者の手に落ちかかっている」

王が発した一言は、謁見の間にいる全ての者の目を見開かせる威力を持っていた。

「早急に手を打たねば、この世界エルディア始まって以来の大戦になりかねん」

ヴァルゼルフは苦渋の表情を浮かべた。その顔には民を思う一国の主の想いが表されている。

「それは真ですか？」

沢山の兵士がざわめき始める中、シェリスは至って冷静だった。

「セレスタ国に忍び込ませている者からの情報だ、ほぼ間違いない」

ヴァルゼルフの言葉に、シェリスは何度か頷くと急に立ち上がった。

「ならば、私は今すぐにでもセレスタに向かいます」

凛としたシェリスの声に、謁見の間を包んでいたざわめきが消える。するとそこにいる全ての者の瞳が、赤い絨毯の上に立つ青へと向けられた。

「今すぐはならん」

王の厳格な言葉が、謁見の間を支配した。瞬間的にシェリスの目が見開く。

「何故ですか！？」

シェリスにしては珍しい事に眉を吊り上げ声を荒げた。しかもそれは、一国の主に向かっての言葉である。

しかし、一国の主であるヴァルゼルフは全く気にした素振りも見せず口を開く。

「剣士の実力を見たい」

「僭越ながら、優先すべき事とは思えません」

シェリスは今度は声を荒げはしない。だがその声に含まれているのは、明らかな冷たさ。

隣にいたクレスは、シェリスの声に思わず身震いした。その声に含まれていた冷たさは、シェリスと初めて会った日に感じたものと一緒。土の賢者を仇と言った時のシェリスと一緒だった。流石に王の前ということもあってか、あの時の様な殺気は感じないが。

「これは命令だ」

クレスの身震いは更に大きくなる。王から発せられた威圧感がそうさせたのだ。クレスの隣にいるシェリスは、その威圧感に喉を鳴らした。

だが次の瞬間一国の主が浮かべた表情は、殺伐とした雰囲気には全くそぐわない物だった。

「シェリスよ。その者がお主を護るに相応しいか、それだけを確かめたいのだ」

国王ヴァルゼルフが浮かべたのは、明らかにシェリスを心配する表情。まるで子を心配する親の様な表情であった。

「俺はいいですよ」

黙ってしまったシェリスの代わりに口を開いたのは、話の議題になっていたクレス。

「陛下の御気持ちは察しました。一国の象徴である賢者と共に闘う者が弱くては仕方ない。更に相手は土の賢者、万が一も考えられる。そして土の賢者を敵に回す事は、下手をすればセレスタを敵に回し兼ねない。だからこそ国軍の介入は不可。つまり俺とシェリスが頼みの綱……」

クレスの口が語るのは、秘められた王の想い。クレスの予想でしかないその言葉に、王は金色の瞳を細め聞き入る。

「だからこそ俺の実力が知りたい。それでよろしいですか？」

クレスはそこまで言うと膝を突くのを止めて立ち上がる。青の隣に立った黒が醸し出すのは、王やギルバートの様な圧倒的存在感ではない。

だがそれは、金色（こんじき）の王に笑みを作らせる力を持っていた。

「ギルよ」

「はい」

ギルと呼ばれたガーディアン、ギルバートは笑みを浮かべ旧知の仲とも言える王を見つめた。

「早急に近衛師団の中で腕の立つ者を一名選べ」

「畏まりました」

ギルバートが歩き出すと、ヴァルゼルフは玉座を立った。

ヴァルゼルフの金色の瞳が、真っ赤な絨毯の上に立つ黒と青に向

けられる。

「シェリスよ」

「はい」

「お主が見つけて来た剣士の実力、しかと確かめさせてもらう」

シェリスは苦い表情を浮かべたまま黙って頷くと、隣にいるクレスに目をやる。

「黒き剣士よ」

「はい」

「お主の実力見せてみよ」

黒き剣士はその場に不釣り合い過ぎる笑みを浮かべると、力強く頷いた。

成長

城にある唯一の訓練所は、沢山の兵士達で埋め尽くされていた。沢山の兵士と一国の主が見つめる先にいるのは黒き剣士。

その正面に立つのは白銀の鎧を身に纏う一人の青年。鎧と同じ様な色をした髪は長く、まるで女性の様に整った容姿をした青年の美しさを際立たせていた。

その青年が持つのは木造の槍。対してクレスが持つのは木造の剣であった。

「近衛師団レイクス＝アルバートです。以後お見知りおきを」

そう言って笑顔で手を出すレイクスに、クレスは何とも堅い表情を浮かべながら差し出された手を取った。

クレスをそうさせたのは、レイクスから発せられる雰囲気。明らかに優等生の雰囲気を持つレイクスは、クレスが一番苦手とするタイプだった。

「クレスさん」

レイクスと握手を終えたクレスに声がかかる。声の出所は王の隣に立つ賢者。水の賢者シェリスは、青い瞳に心配気な色を浮かべていた。

「無理しないで下さいね……」

「わかってる、心配するな」

シェリスが最も心配している事は、クレスの身体中にある怪我。

クレスが昨日受けた怪我はまだ傷口が塞がっていない。激しく動けば今以上に傷口が広がる可能性があるのだ。

「クレスさんと言いましたね」

「あぁ、そうだが」

シェリスに目を向けていたクレスは、目の前に立つ銀髪の優等生に視線を移す。

「賢者様に向かって口の利き方がなっていませんね」

レイクスの言葉に、思わずクレスの眉間に皺が寄る。

そして、クレスは確信した。レイクスと自分は間違いなく仲良く成れない事に。

「少々懲らしめてあげます」

そのレイクスの言葉と共に、クレスの腕試しが始まった。

先制したのはレイクス。槍のリーチを活かし、クレスの攻撃範囲外からの強烈な突き。

だが、クレスは慌てない。クレスは槍の特性を充分に理解している。剣対槍ではそのリーチ差から、先制されるのは当たり前。クレスはそう考えていた。

クレスは眼前に迫る槍を、首を捻るだけでかわす。だがほんの少し、槍がクレスの頬に触れた。すると頬に血が滲む。

レイクスの放った一撃は木製の槍ではあるが、確かな威力を持ち合わせていた。

（やるな……）

今の一撃でレイクスの力量を完全に計れたわけではないが、クレスの中でレイクスはかなりの強者であると位置づけられた。

そんな槍使いを前に、クレスは不適な笑みを浮かべる。レイクスの実力を計りきれたわけではない、だがクレスは確信していた。

（オルグ程じゃない……）

レイクスが次に仕掛けたのは、槍による横一線。

クレスの目の前を、勢いが付いた槍が走る。クレスはバックステップで距離を取りそれをかわす。

槍が巻き起こした風が、クレスの黒髪を揺らす。

揺らされた髪が元に戻るよりも早く、クレスが動き出す。大振りの後を狙うのは戦闘に於ける定石。

だが、クレスがレイクスの懐に入る事はなかった。クレスは自分から足を止めたのだ。

クレスが足を止めた理由は、レイクスの口元と纏う空気。世話しなく動く口と鋭くなる空気。それは間違いなく魔術の発動を意味していた。

「……ヴェン・フレチュ」

レイクスがそう言った瞬間、クレスに向かい風の矢が放たれる。

風で作られた矢は空気の歪みから目視することも可能だが、実際にそれをすることは難しい。

クレスは魔術に乗せられた殺気を肌で感じながら、弾ける様に横に跳んだ。
クレスが跳んだ瞬間に、レンガが敷き詰められた床に亀裂が走る。それを見たクレスは、思わず目を丸くした。
（あんなのくらったら、下手すりゃ死ぬな……）
そんなクレスの考えを余所に、銀髪の槍使いレイクスは追撃の手を緩めない。着地したクレスめがけて、初撃よりも明らかに速い突きを繰り出した。
魔術の着弾場所に目をやっていたクレスだが、その突きを身体を半歩ずらすことでかわす。
次に目を丸くしたのはレイクスだった。絶対に当たると思っていた突きを、簡単にかわされたからだ。
クレスは目を丸くしたレイクスから、再びバックステップをすることで距離を取る。
間違いなく懐に入れる、上手くすれば勝負を決められるチャンスだったが、クレスは敢えて距離を取る事を選んだ。自分の中に芽吹き始めた感覚を確かめる為にも、まだ勝負を決めるわけにはいかなかった。
オルグとの闘いで、クレスは目に頼らない闘い方をした。だがクレス自身、まだあの感覚がはっきりしていない。しかし、魔術を避けた時と今の一撃で明らかに感じたのだ、武器や魔術に乗せられた殺気を。
そしてクレスは行動に移る。それはオルグを追い詰めた時と同じ行動。

クレスは真っ黒な瞳を細めると、自身の視覚を切り捨てた。

「なっ！？　何をしているんです！？」

クレスの前に立つレイクスが叫ぶ。それに続く様にして、二人を見つめる沢山の兵士達からもざわめきが起きた。

その中で平然としている者が三人。国王ヴァルゼルフ、近衛師団団長ギルバート、そして偉大なる水の賢者シェリスであった。

「ふむ。随分と面白い男だな」

クレスのした行動を見つめながらそう呟いたのは、国王ヴァルゼルフ。その隣に立つギルバートは、国王の呟きに微笑んだ。

「面白くなんてありません」

ヴァルゼルフの呟きを聞いてか、シェリスが反論する。顔には出さないがシェリスは内心ハラハラしていた。胸の前で握られた手には、汗が滲んでいる。

実はこの王と賢者、非常に仲が良い。幼い頃から国の象徴である賢者の弟子として育ったシェリスは、源域の中で人生の大半を過ごしてきた。そしてその源域に立ち入りを許されているのが、国王とその側近達だけである。

したがってヴァルゼルフはシェリスにとって数少ない知り合いであり、言い方を変えれば『友人』なのだ。随分と歳の離れた友人ではあるが。

「陛下は『炎帝』をお忘れですかな？」

シェリスの『友人』の一人であるギルバートは、胸の前で手を握

り締めるシェリスを見ながら口を開いた。
「十五年前の内戦で活躍した者か？」
「はい」
「確か……ア、アレスだったか？」
ヴァルゼルフは自身の名が付けられた内戦を思い出しながら、こめかみに手を当てる。
「アレンでございます。アレン＝バーキンスです」
ギルバートはそう言って、顔に走る深い皺をより一層深くする。
「あれは、それの息子です」
ギルバートが言いながらクレスを見た所で、腕試しを見ていた兵士達から大きな歓声があがる。
その歓声の中心では、首に木造の剣を突き付けられた銀髪の槍使いが悔しそうな表情を浮かべていた。
「それまで！！」
クレスがレイクスの首に木造の剣を突き付けた所で、低めの声が訓練所に響く。それと共に、騒ぎ立てていた兵士達が一瞬で静まり返った。
一声で場を支配したのは、近衛師団団長ギルバート。ギルバートの隣では、国王ヴァルゼルフがその顔に笑みを湛えていた。

「素晴らしき闘いであった。クレス＝バーキンス、『炎帝』の息子よ」

『炎帝』と言ったヴァルゼルフの言葉に、クレスの幼き日の記憶が蘇る。自分が幼き頃に、義父アレンがそう呼ばれていたのを思い出したのだ。

王の言葉に、一度は静まり返った兵士達がまたざわつき始める。『炎帝』、その呼び名を知らない兵士はいない。卓越した剣術と凄まじい炎の魔術により、一騎当千と呼ばれた剣士。それがクレスの義父、アレン＝バーキンスであった。

水の賢者シェリスも王の言葉に目を見開いていた。『炎帝』、その呼び名はシェリスでも知っていた。だが、まさかあの親バカであるアレンが、『炎帝』だったとは思ってもいなかったからだ。

「さて、クレスよ」

「何でしょうか？」

ヴァルゼルフは楽しそうな笑みを浮かべながらクレスを見つめた。次第にその金色の瞳が細められていく。

「もう一勝負せんか？」

ヴァルゼルフの言葉にクレスは一瞬戸惑うが、静かに首を縦に振る。クレスをそうさせたのは、更に強い者と闘い強くなりたいという想い。

「ギルよ」

「はい」

「わしに剣を」

国王の言葉に、訓練所にいた全ての者が驚愕の表情を浮かべた。
ほぼ全ての者が驚愕の表情を浮かべる中、ただ一人だけは溜め息を吐いた。ギルバートである。

「だろうと思っていましたよ」

ギルバートはそう言いながら、まるで用意していたかの様にヴァルゼルフに木造の剣を手渡した。

ギルバートとヴァルゼルフには兵士と王、それ以上の繋がりがある。
ヴァルゼルフが幼き頃から城に仕えていたギルバートは、まるで弟の様にヴァルゼルフと接していた。それはまるで本当の兄弟の様な光景であった。

ヴァルゼルフが王に即位する時に、ギルバートは今の地位を与えられる。実際に若き頃のギルバートには、それだけの実力があった。
それから三十年余り、ギルバートはヴァルゼルフの右腕として、国に、王に尽くしてきた。そんな二人には、王と一兵士以上の関係が出来上がっていたのだ。

だからこそ、ギルバートはヴァルゼルフが発した言葉に驚きはしなかった。

「流石はギルだな」

そう言って満足気な表情を作り木造の剣を受け取ったヴァルゼルフは、訓練所の中心に向かい歩き出す。

その身に纏うは圧倒的存在感。

（格が違う……）

訓練所の中心に居座るクレスの手が震えだす。

今からクレスが対峙するのは、『戦神』と呼ばれ讃えられる人物。その存在感、威圧感は、今までクレスが闘ってきた全ての者と格が違った。

しかし、クレスの頬は自然と緩んでいた。何故そうなったのかは、クレス自身にも分からない。

クレスが剣を持つ手の震えは止まらない。その震えが恐れから来るものなのか、はたまた武者震いなのかはクレス自身にもわからない。

『最強最弱』対『戦神』

訓練所の空気が張り詰める。まるで時が止まってしまったかの様に、全ての人間が息を、瞬きをするのを忘れていた。

その中心に居座るのは五十歳を過ぎてもまだ圧倒的存在感を持つ金色と、精霊に愛されなかった黒色。二人の間に流れる空気は、今だけなら、おそらく世界中の何処よりも重い。

「わしは魔術を使わん」

唐突にそう言ったのは『戦神』ヴァルゼルフ。その顔には笑みが貼り付いていた。

「ハンデはいりません」

その言葉に答えるのは『最強最弱』クレス。その黒い瞳に映るのは、最強の金色。

「ふむ。怪我をしたお主相手に魔術は使えんよ」

瞬間、時が止まっていたかに思われた兵士達が騒ぎだす。その兵士達の顔に浮かぶのは驚き。近衛師団である銀髪の槍使いを倒したクレスが、怪我をしているとは誰一人思っていなかった。

「……気づいていたんですか？」

「わしの目を甘く見ないでもらいたいな」

そう言って笑うヴァルゼルフ。笑みを浮かべているが止まない威

圧を肌で感じ、クレスの切れ長な目が鋭くなる。
そこでヴァルゼルフが、ギルバートへと目をやる。ギルバートは自身の君主の言いたい事を察すると、右手を高々と挙げた。

「始め！！」

ギルバートの声が響くと同時にクレスが動く。
自分より明らかに格上のヴァルゼルフに、先手を取らせるわけにはいかない。下手をすればそれだけで決着が着きかぬないのだから。
クレスは一気にヴァルゼルフとの距離を詰めると、力任せに大上段から剣を振り下ろす。
その一撃がヴァルゼルフを捉える事は無い。ヴァルゼルフがクレスの振り下ろしに合わせる様にして、剣を振り上げた。
訓練所に、木と木がぶつかり合う甲高い音が響き渡る。
互角に見えた初撃だが、クレスの腕は痺れていた。ヴァルゼルフの力はクレスが昨日闘った、オルグのそれに近い。
クレスにとって剣を弾かれなかっただけ、まだ幸運だった。
痺れが取れるまで打ち合いを避けたいクレスは、バックステップで距離を取ろうとする。だが、眼前に立つ金色はそれを許さない。クレスのバックステップに合わせる様に踏み込むと、強烈な突きを放つ。
あまりの速さに一瞬驚いたクレスだが、身体を捻る事でその突きを紙一重でかわす。だがかわした瞬間、クレスは凄まじい殺気を感じた。

即座にヴァルゼルフの剣と、自身の身体の間に剣を滑り込ませる。
驚くべきことに、ヴァルゼルフは突きを放ったままの体勢から、凄まじいまでの横払いを仕掛ける。
腕が伸びきったままの状態から放たれたそれは、轟音と共にクレスを剣ごと吹き飛ばした。
クレスはその身を床に叩きつけられると、くぐもった声を発する。だが、身体を二、三回転させると飛び跳ねる様に起き上がった。
（直で当たれば肋骨がいかれてたな……）
立ち上がったクレスは、肩で息をしながらもヴァルゼルフの追撃を警戒する。
だがクレスの予想とは裏腹に、ヴァルゼルフからの追撃はなかった。
「今のを防ぐとは、やりおるな」
そう言うと、ヴァルゼルフは笑みを浮かべながらクレスを見つめる。
クレスに芽生え始めた新たな感覚、それが無ければ今の一撃でこの闘いは終わっていただろう。
クレスは昨日闘ったオルグに感謝をしながら呟く。
「規格外が……」
クレスの呟きはヴァルゼルフの耳には届かなかった。
クレスは一度服に付いた埃を払い足に力を込めると、ヴァルゼル

フに向かい駆け出した。
ヴァルゼルフは口角を吊り上げながらクレスを迎え撃つ。
ヴァルゼルフの目前まで迫ったクレスは、走った勢いを乗せ突きを放つ。その突きは今のクレスが出せる最速の突き。スピードと体重、そして力を全て乗せた神速とまで呼べる突き。
そんなクレスの突きは『戦神』には届かない。
ヴァルゼルフは目前まで迫った突きを、下から一気にかち上げたのだ。甲高い音を立てて弾かれるクレスの剣。
その瞬間クレスに大きな隙が出来る。ヴァルゼルフがそれを見逃す事はなかった。
ヴァルゼルフはクレスの剣をかち上げた動作に連続して、大上段に剣を構える。
（……予想通り）
クレスは自分の突きが弾かれるのを予想していた。そして自分に隙が出来た瞬間に、ヴァルゼルフが動く事も。
ヴァルゼルフが大上段に剣を構えて振り下ろす瞬間に、クレスは右足を振り上げる。
それはヴァルゼルフの顎を的確に狙った蹴り。バランスを崩したクレスからは、考えられない程に綺麗な蹴りだった。
だがその蹴りも当たる事はない。ヴァルゼルフはほんの少しだけ上体を反らす事でクレスの蹴りを避ける。
「やるな小僧！！」

クレスの右足が目の前を通り過ぎるのを見送ると、ヴァルゼルフは金色の瞳を細め口角を吊り上げる。

その顔は一国の主として慕われる王の顔ではなく、戦場で最も恐れられた『戦神』の顔だった。

右足を避けられる事はクレスの予想の範疇だった。

クレスは右足を振り切るとその勢いを利用して身体を反転させると、両手をレンガで敷き詰められた床に突く。そして逆さまの状態から左足を突き上げた。

クレスの左足が空気を切り裂きながら、ヴァルゼルフの顔面めがけて走る。

それを見たヴァルゼルフが、顔の前で腕を交差させる。その交差させた腕にクレスの左足が突き刺さった。

蹴りを受け止め、ヴァルゼルフの体が初めて揺らぐ。

それを見たクレスは素早く体勢を立て直すと追撃に出た。

下段に構えた剣をヴァルゼルフの右脇腹めがけ斜めに振り上げる。

体勢を崩していたヴァルゼルフは、クレスの剣が避けられないと見るや右腕に持った剣を振り下ろす。

ヴァルゼルフが狙うのは、相討ち。相討ちと言えど、それはクレスにとっては致命的な一撃になりかねない。

避けなければ間違いなくやられる。だが、クレスは振りだした剣を止めない。今止めたとしてもヴァルゼルフの剣を避けるには手遅

れだと悟っていた。

（やるしかない！！）

クレスは決意を固めると、獣の様に咆哮をあげる。そしてヴァルゼルフの脇腹に、持てる力の全てを乗せた一撃を叩きつけた。

その一撃はヴァルゼルフの脇腹に突き刺さると、鈍い音を立てた。

その一撃を叩きつけた瞬間、クレスは自分の左肩に凄まじい衝撃を感じる。

それは『戦神』が放った一撃。まるで天からの雷。

圧倒的な衝撃と痛みに、クレスの意識はそこで途切れた。

「クレスさん！！」

床にうつ伏せに倒れたクレスに、最も早く駆け寄ったのは顔を真っ青にしたシェリスだった。汗が滲んだ手でクレスを抱き起こすシェリス。

「陛下！！　やり過ぎです！！」

そう言ったシェリスに睨まれたヴァルゼルフは、まるで悪戯が見つかった子供の様な表情を浮かべる。

「すまん。ついつい血が騒いでな」

「ついついじゃありません！！」

兵士達は唖然としていた。自分達の主が、賢者とは言えどまだ若い一人の女性に怒られている。その光景は、兵士達の時を止めるには充分過ぎた。

「う、ぐ……」

その兵士達の時を再び進め始めたのは、一国の主が漏らした呻き声。

「陛下大丈夫ですか？」

低く力のある声がヴァルゼルフにかかる。声の主はギルバートである。

「肋骨を数本持っていかれたかもしれん」

ヴァルゼルフの言葉に、周りにいた兵士達がざわつく。だがギルバートだけは、一人満面の笑みを湛えていた。

「それはよかったですな」

「全くだ」

隣で二人の話を聞いていたシェリスは首をかしげていた。怪我をしたというのに、ヴァルゼルフとギルバートが喜んでいるからだ。

そんなシェリスを見てか、ヴァルゼルフは金色の瞳を細めると口を開く。

「久しぶりなんじゃぞ、わしに手傷を負わせた輩は」

シェリスはその言葉に、自然と頬が緩んでいた。自分が信頼するクレスが認められたことが素直に嬉しかったのだ。

「よかったですね。クレスさん」

優しさが溢れる声でそう言うと、シェリスは自身の白い手で、意識の無い黒き剣士の真っ黒な髪を優しく撫でた。

『最強最弱』対『戦神』（後書き）

国王様少しばかり強すぎましたね（笑）
まぁ戦神と言われる程ですから、クレスじゃ歯が立ちませんよ。
物語はまだまだ序盤、さぁさぁ今後どうなるのか！？
どうなるんでしょ（汗）

月下の邂逅

「いっつぅ……」

焼き付く様な肩の痛みに、黒き剣士が目を覚ます。

クレスが目を覚ましたのは、ふかふかのベッドの上だった。上半身だけを起こし周りを見回す。周りには沢山の家具が溢れている。しかも、その全てが高級品の雰囲気を漂わせていた。

そこでクレスは気づいた、自分が上半身裸であることに。身体には昨日よりも包帯が巻かれている。

「死んではないな……」

クレスの呟きは部屋を包む闇の中に消え入る。部屋を包む闇を和らげるのは、窓から差し込む月明かりだけだった。

そこでクレスは気が付いた。月明かりが無ければ多分気づかなかっただろう。

「シェリス……」

ベッドの隣に置かれた椅子に座り、上半身をベッドに突っ伏して眠る賢者。月明かりに照らされた横顔は、幻想的な美しさを醸し出していた。

クレスはシェリスを起こさない様にベッドから抜け出すと、ベッドの脇に置かれていたブーツと自分の服を見つける。それを手早く身に纏い、寝ているシェリスに手をかけた。

ベッドに突っ伏したシェリスの上半身を自分の方に寄せ、膝の裏に手を通し静かに持ち上げる。その姿は、所謂、お姫様抱っこである。

初めて会った日を思い出し、クレスは一度微笑んだ。

「今回は酒を飲んでないけどな」

クレスは静かに呟くと、シェリスをふかふかのベッドに横たえる。シェリスの軽い体は、ふかふかのベッドに優しく包まれた。

クレスはベッドの脇に置かれていた剣を背負うと、扉に向かって歩き始めた。目的はないがとりあえず歩いてみようと思ったのだ。

扉を開けてから、チラリと後ろを振り返る。

ベッドに横たわる青は、月明かりに照らされ神秘的な雰囲気を醸し出していた。

月明かりだけが照らす中庭の脇を通る道。ほぼ闇に包まれたその道に、一定の感覚で高めの音が響く。音の発信源は、クレスの履いた無骨なブーツ。

「誰かいないもんかね……」

その呟きが聞こえたと言うわけではないだろうが、クレスの前から足音が聞こえてくる。その軽い足音から、クレスは近づいてくるのが女性だと気づいた。

闇の中に白いシルエットが浮かび上がる。クレスの目に映るのは、白いローブを身に纏う細身の女性。クレスはその姿を見た瞬間、思わず息を呑んだ。

真っ白なローブに映える、流れる様な緑の髪。ローブの上からでもわかる整った体のライン。月明かりに照らされたその女性は、クレスが見てきた女性の中でも五指には入る美貌を携えていた。

「あら？」

月明かりに照らされた女性から発せられたのは、透き通る様な声。そこでクレスはあることに気づく。

（目が……）

暗闇を歩いているにも関わらず、女性は目を閉じていた。にも関わらずクレスに近づいて来る女性の足には迷いがない。

「どちら様ですか？」

女性の言葉にクレスは顔をしかめた。そして確かめる、女性が本当に目を閉じているのかを。

「私の目は見えていませんよ」

クレスがその言葉に目を見開いた瞬間、女性は閉じていた目を開けた。

開かれた大きな目にあるのは、真っ白く濁った瞳。その瞳は焦点が定まっていない。

「この瞳には何も映りません」

女性はそれだけ言うと瞼を下ろした。瞼を下ろしただけなのに、女性の行為からは気品が漂っている。

「見えてないのにわかるのか？」

クレスは首をかしげながら、とりあえず聞いておきたい事を口にした。

「はい」

女性はクレスの言葉に微笑みを浮かべながら、左手で胸元にあるペンダントを持ち上げた。そのペンダントに付いているのは、水色をした菱形の石。

クレスはそれに見覚えがある。それは水の賢者が首から下げているのと同じ物。

「目が見えなくても、精霊が教えてくれますから」

穏やかな口調でそう言う女性。クレスはその言葉にとりあえず納得して、何度か首を縦に振った。

「貴方のお名前は？」

「あぁ、クレスだ。クレス＝バーキンス」

クレスが名を名乗ると、女性は何やら思案する様な表情を浮かべた。

「……もしや、シェリスが連れてきた黒髪の剣士様ですか？」

「そうだけど……」

クレスは二つの事に気づく。一つは、いつの間にか自分がちょっとした有名人になってしまっていること。

『戦神』とまで呼ばれる国王と闘ったのだから、当たり前と言われればそれまでだが。

そしてもう一つは、目の前にいる女性とシェリスの関係。賢者を呼び捨てにするという事は、間違いなく親密な仲であることを表していた。

「あっ、私はサーシャ、サーシャ＝ライズディングと申します」

「ライズディング……」

クレスは女性サーシャの姓を聞いた瞬間に、眉間に皺を寄せた。明らかに最近何処かで聞いた名前だったのだ。

だがまだ寝起きという事もあってか、クレスはそれが誰の名であったか思い出せない。

そんなクレスの雰囲気を肌で感じたのか、サーシャは微笑みながら口を開く。

「近衛師団団長、ギルバート＝ライズディングの娘です」

その言葉にクレスの時が止まる。時が止まったクレスの頭に浮かぶのは、沢山の深い皺が走る顔。

クレスは自分の頭に浮かぶ顔と、自分の前にいるサーシャの顔を頭の中で比較する。

「……冗談だろ」

クレスの口からは、自然とそんな言葉が漏れていた。

予言の人

「よく食べますね」

沢山並べられたテーブルの一つに、沢山の食べ物が置かれている。そのテーブルには一組の男女。

黒き剣士クレスと盲目の魔術師サーシャは、向かい合わせに座っていた。

「精霊はそんなことも教えるのか？」

「私の目になってくれていますから」

クレスはサーシャの言葉に頷きながら、肉にかじりついた。クレスにかじりつかれた肉は、肉汁を撒き散らしながらクレスの口の中で咀嚼されていく。

「一つお聞きしてもよろしいですか？」

「ん、ひょっとまっへ」

クレスは口に入っていた肉を一気に呑み込むと、食べ物からサーシャへと視線を移した。

サーシャはクレスの言葉が可笑しかったのか、口元を抑えて控えめに笑っている。

「……んで何？」

「クレスさんは魔術が使えないんですか？」

その一言に切れ長な目が見開いた。

サーシャに、自分が魔術を使えない事を一言も話した覚えがない。にも関わらず、サーシャは自分の欠点を言い当てたのだ。

クレスに明らかな動揺が走る。

「何でそれを？」

「精霊ですよ」

サーシャはそう言って、自分の右斜め上辺りの空間を指差した。そこにサーシャの精霊がいるのだが、生憎クレスには精霊が見えない。

「私の精霊が、クレスさんには精霊がついていないと」

クレスは、この間シェリスに聞いた事を思い出しながら何度か頷いた。

『一度人間を愛した精霊は、その人間から離れる事がない』。裏を返せば、『精霊がいなければ魔術が使えない』と言っているようなものだ。

「魔術無しで近衛師団のレイクスさんを破り、陛下とまで闘って怪我を負わせた……」

サーシャは満面の笑みを顔に貼り付けると、ゆっくりと言葉を発する。

「……流石は『予言の人』ですね」

そこで食堂に何人かの兵士が、何やら喋りながら入って来る。
だがクレスの注意はそちらには向かない。クレスは目の前に座る盲目の魔術師を、黒い瞳でじっと見つめていた。

「予言の、人？」

クレスはそんな言葉に全く聞き覚えが無かった。
クレスはその容姿や魔術が使えない事から、今まで様々な呼び名をつけられた事がある。だがサーシャが口にしたそれは、その何れにも当てはまらない。

「あら？　シェリスから聞いていませんか？」

「いや、全く」

クレスの言葉に、サーシャは眉間に皺を寄せた。その顔に浮かぶのは明らかな疑問の表情。

「ホントですか？」

「嘘言って俺に得があるのか？」

「確かに……」

サーシャはそう言うと、顎に手をやり何やらぶつぶつ言い始めた。
クレスは、仕方がないのでそれが終わるまでテーブルの上の食べ物を処理する事に励むことにした。

「では、私がお教えします」

サーシャがそう言ったのは、クレスがほとんどの食べ物を食いつくした後だった。

「頼む」

クレスはそれだけ言うと、水の入ったグラスを手に持つ。そしてグラスを口元まで運ぶと、その水を一気に流し込む。

クレスは一瞬で水が無くなったグラスを皿に重ねると、真っ黒な瞳に真剣な色を浮かべた。

「元水の賢者ラムセル＝アリディーニの死後、シェリスが水の大精霊と契約し賢者を継ぎました」

それくらいはクレスにもわかっている。

土の賢者によって殺された元水の賢者ラムセル＝アリディーニ、シェリスの師匠。土の賢者を仇と言った時のシェリスを、クレスは忘れたくても忘れられなかった。

「ただ、シェリスと水の大精霊は、先代の死後直ぐには契約出来ませんでした」

「……なぜ？」

一時期水の大精霊の力が弱まった事により、エルディアには雨が降らなかった。これは大精霊自体の力が弱まったのではない。

大精霊はその偉大なる力を、人間と契約することで初めて使えるとされている。この理由は未だ未知とされ、魔術師達の研究の的とされている。

「原因はシェリスの心……」

サーシャはそう言って口を接ぐんだ。目を閉じているからか、その表情からサーシャが何を思っているか、クレスには読み取れない。

「……シェリスの心は憎しみに支配されてしまいました」

ゆっくりと発せられた言葉に、いつの間にかクレスは頷いていた。初めて会った日の夜、シェリスが発した殺意は『憎しみ』と呼ぶに相応しい物だったからだ。

「自分の師であり、親とも呼べる先代を殺されたシェリスは、土の賢者への復讐を誓いました」

「だから大精霊はシェリスを愛さなかった……か？」

「はい」

だが今現在、大精霊はシェリスを愛し契約をしている。しかし、シェリスの中に憎しみの心は消えていない。

だからこそ、クレスにはその矛盾がわからない。

「なら」

「クレスさんは精霊に心があることはご存知ですか？」

クレスは矛盾を解くために口にしようとした疑問を言い切る事ができなかった。口を開けたまま、サーシャの言葉にゆっくりと頷く。

「大精霊は、シェリスを救ってあげたかったんだと思います」

サーシャはそう言いながら、自分に付いた精霊がいるであろう空間に顔を向ける。そして見えない目を開いた。白く濁った瞳が、何もない空間に向けられる。

クレスには精霊は見えない。ただ、サーシャを包む暖かい空気を肌で感じた。

「先代の賢者は、シェリスを我が子の様に育てました。常に側にいた大精霊も、それを感じていたんでしょう」

サーシャはそう言ってクレスに顔を向ける。サーシャの開いたままの目が、クレスに向けられた。白く濁った瞳が、真っ黒なクレスを映す。

見られてはいるが、サーシャにクレスは見えていない。その何とも言えない感覚に、クレスは何とも言えない表情を浮かべた。

「大精霊は、憎しみに縛られるシェリスを救ってあげたかった。この世界が出来てから長い間、人々を見守ってきた大精霊だからこそ、憎しみは何も生み出さないと知っているから……」

最後は消え入る様な声を出すと、サーシャはうつ向いた。微かに見えるサーシャの顔には、明らかな悲しみの表情が浮かんでいる。

何故サーシャがそんな表情を浮かべるのかクレスにはわからない。だからこそ、クレスは何も言わなかった。否、何も言えなかった。

クレスはうつ向くサーシャから、自然と目を逸らしていた。
テーブルを挟んで座った二人の間を気まずい空気が漂う。その空気の中、先に口を開いたのは盲目の賢者。

「話が逸れましたね。本題に戻りましょうか」

「あぁ、頼む」

クレスはぎこちなく頷くと、サーシャの透き通る様な声に耳を傾けた。

「シェリスが賢者になる時、つまりは大精霊と契約する時。シェリスはある言葉を聞いたんです」

「言葉？　大精霊が何か言ったのか？」

「いいえ、違います。何でも初めて聞く声だったらしいです」

サーシャの言葉にクレスは首をかしげた。そんなことがあり得るのかと思ったのだ。
そんなクレスに助け船を出す盲目の魔術師。

「私の予想では、声の主は創造主様ではないかと考えています」

「クレイエントか……」

創造主クレイエント、この世界エルディアを創ったとされる神。
大昔から語られる神話では『創造主、世界を見つめ、世界の危機に地に降り立つ』と言われている。

「シェリスが聞いたのはこうです」

サーシャは右手の人差し指を立てながら口を動かす。

「……『大いなる闇動きし時、闇よりも黒き戦士立ち、全てを照らす光とならん』だそうです」

クレスはその言葉に唖然とした。まさに開いた口が塞がらない状況。

クレスは気づいてしまったのだ。どんなに頭の悪い者でも気づくだろう事に。 その予想を認めたくないクレスは、何度も頭を振ってそれを消し去ろうとする。だが、一度芽生えた考えはクレスの頭を離れない。

そんなクレスに向かい、サーシャは言葉を放つ。

「黒き戦士、これはほぼ間違いなくクレスさんだと思われます。他に黒髪で黒い瞳の持ち主なんて聞いた事ありませんし」

クレスはその言葉に右手で顔の上半分を覆った。自分の前に立つ美しき魔術師からの、死刑宣告の様な言葉を信じたくなかったからだ。 美しき死神とも呼べる魔術師は、白く濁った瞳を細め口角を気持ちばかり吊り上げる。

「頑張って下さいね」

美しき死神サーシャはそう言って前のめりになると、クレスが顔を覆っていた手を掴んだ。クレスの手に、しなやかで綺麗な指が絡み付く。

普段のクレスならばその行為に顔を赤くしていただろう。だが、今のクレスにはそんなこ気にする余裕はない。

（俺が……光？）

人とは違う黒髪と黒い瞳を持ち、精霊にさえ愛されなかった自分。そんな自分が『全てを照らす光』。

クレスはその言葉を全く信じる事ができなかった。例えそれが神である、創造主クレイエントの言葉であっても。

「……信じて下さい」

サーシャの急な言葉に、クレスは目を見開いた。慌てながら、空いていた左手を自分の口に押し当てる。

「何も言ってませんでしたよ」

サーシャはそう言って微笑むと、言葉を続ける。

「クレスさんの容姿も、精霊に愛されなかったのも、きっと何か意味があるんです。創造主を、自分を信じて下さい」

「何で」

「クレスさん！！」

何でわかるんだ。クレスがそう言おうとした瞬間、食堂に大きな声が響く。その声には明らかな怒りが込められていた。

大股で二人がいるテーブルに近づいて来るのは、青いローブを来た女性。その歩き方には明らかな苛立ちが見て取れる。

水の賢者シェリス＝ミアルタは、真っ青な瞳に怒りの炎を燃やしていた。

「あっ、起き」

「何でちゃんと寝てないんですか！？」

急に真っ正面から放たれた声に、クレスは目を丸くした。その音量に離れた所にいた兵士達も目を丸くする。

「いや、だってな……」

「だってじゃありません！！　陛下との闘いで傷口が開いてしまってるんですから、ちゃんと安静にして下さい！！」

クレスの頭にシェリスの大声が響く。あまりの大きさに、クレスは自分の体よりも鼓膜を心配したくなった。

そんなクレスに助け船を出すのは、サーシャ。

「まぁまぁシェリス。クレスさんお腹が減ってたみたいだし、そんなに怒らなくてもいいじゃない」

そう言ったサーシャが、クレスには女神に見えた。さながら美の女神と言った所だ。

「サー姉がそう言うなら……」

そう言いながらも、シェリスはちょっと頬を膨らましながら一度

クレスを睨んだ。
　クレスは青い瞳に睨まれつつも、シェリスが口にしたサーシャの呼び方から、二人の関係が自分が予想していた以上に親密であると知る。

「それにそんなにうるさいと、クレスさんに呆れられちゃうわよ」

「べ、別に、クレスさんと私はそういう関係じゃ……」

「あら？　どういう関係なの？」

　サーシャがそう言って微笑むと、シェリスの顔が次第に赤くなっていく。遂には熟れた林檎の様になると、シェリスは勢いよくクレスの腕を掴んだ。

「と、とにかく、クレスさんはちゃんと寝てて下さい！！」

「もう少しサーシャと話がしたいんだが……」

「駄目です！！」

　クレスの言葉に更に赤くなったシェリスは、青と赤のコントラストを浮かべながらクレスの腕を引っ張る。
　左腕を引っ張られたクレスは、思わず痛みに悲鳴をあげた。左腕を引っ張られた事で、『戦神』の凄まじい一撃を受けた左肩が凄まじい痛みを放ったのだ。

「シェ、シェリス、腕が取れる！！　離せ、離してくれ！！」

　真っ黒な瞳をうるませながらのクレスの言葉は、耳まで真っ赤に

なった賢者様には聞こえない。そして黒と青は、様々な視線を受けながら食堂を後にした。

「随分と面白い人だったわね」

二人がいなくなった後のテーブル、盲目の魔術師は独り言の様に呟いた。だがそれは、独り言ではない。

話し相手はサーシャを愛した精霊。名を『レイルフェルス』、水の上位に位置する精霊である。

「勝手に心を読んじゃ駄目？　読みたくなったんだもの」

サーシャはそう言って微笑むと、クレスが残していった食器に手をかける。

「片付け位ははしていってほしいわね」

盲目の魔術師はそう言って立ち上がる。開かれた目には、白く濁った瞳が浮いていた。

盲目の魔術師サーシャ＝ライズディング、彼女はある特別な力を持っている。視覚の代わりに得たその力は、触れた者の心を読む力。

その力を持つ彼女を人々はこう呼ぶ、『心眼の魔術師』と。

新たな仲間

沢山の兵士が周りを囲む真っ赤な絨毯の上、黒と青は肩を並べて玉座に座る金色を見つめていた。金色の隣に居座るのは近衛師団団長。

「では、本当に二人で行くのか？」

「はい。それが一番よろしいかと」

ゆっくりと口を動かしたヴァルゼルフの問いに答えるのは、青の賢者シェリス。空の様に青いローブに包まれたシェリスは、血の様に赤い絨毯から玉座を見つめる。

「確かに大人数でない方がいいのは判る。それでも二人と言うのは……」

心配気な声を出したヴァルゼルフの、太く立派な眉は若干下がっていた。

「陛下もクレスさんの力は分かったはずです。それに私はこれでも賢者、そう簡単には死にません」

力強くそう言ったシェリスの瞳に浮かぶのは、決意。そして、隣に居座る黒き剣士の真っ黒な瞳にもそれは浮かんでいる。

玉座に座るヴァルゼルフは二人を見つめ小さくかぶりを振ると、大きな溜め息を吐いた。それが表すのは呆れに近い感情。

「ならばお主ら二人に、託して良いのだな？」

「お任せ下さい」

シェリスはそう言って頭を下げる。隣にいたクレスもそれに倣って頭を下げた。

「その言葉を信じるとしよう」

ヴァルゼルフはそれだけ言うと、隣に立つギルバートに視線を移した。

「ギルよ、二人に馬をやれ」

「かしこまりました」

ヴァルゼルフはその返事に満足すると、玉座から立ち上がる。立ち上がった王が放つ存在感と威圧感に、自然にクレスとシェリスの背筋が伸びた。

「水の賢者シェリス＝ミアルタ、予言の戦士クレス＝バーキンス……」

『予言の戦士』、クレスはその言葉に一瞬顔を歪めた。

「はい」

クレスとシェリスは揃って返事をする。王はその返事に笑顔を浮かべると、広い謁見の間の隅々まではっきりと聞こえるであろう大きな声を出す。

「死ぬことはこのわしが許さん！！　生きて帰れ！！」

二人はその言葉に力強く頷くと踵を返す。王は二人にそれ以上は告げなかった。

二人が歩き出した瞬間、赤い絨毯を囲んでいた沢山の兵士達が胸の前で構えた剣を一斉に頭上に掲げる。沢山の鎧が擦れる音が謁見の間を支配した。

その中をクレスとシェリスは静かに進む。二人の目に宿るのは決意だった。

「どの馬がよいかな？」

クレスは迷っていた。眼前には沢山の馬。どれも毛並みが良く、何れも賢そうな顔をしていた。

「難しいな……」

顎に手を当てながら悩むクレスを見て、ギルバートは笑みを浮かべる。その隣では、シェリスが何とも言えない表情を浮かべていた。

「どの子でもいいんじゃないですか？」

「そうはいかないだろ」

ぶっきらぼうなクレスの発言に、シェリスは少し顔を歪めた。

「……何でですか？」

「馬にだって色々あるんだ」

クレスは喋りながらも馬を眺める。シェリスの方には一切顔を向けない。

そんなクレスを見てか、シェリスは一度眉間に皺を寄せると、勝手にして下さい。と小さく呟いた。

クレスが沢山の馬達から目を離しシェリスに視線を移した所で、ふと、あるものを見つけた。見つけたのは少し離れた所にある小さな小屋。

「ギルバートさん、あの小屋は？」

「あぁ、アレはちょっとわけありな小屋でな」

ギルバートは真っ白い髭を撫でながら、何とも言えない表情を浮かべた。だがその表情は、クレスを見つめると何故か楽しそうな表情へと変わる。

「行けばわかるじゃろう」

ギルバートはそう言って歩きだす。その足が向かうのはわけありと言われた小屋。

クレスは怪訝な表情を浮かべながらギルバートを追う。そしてシェリスがその後に続いた。

木が軋む音と共に、小屋の扉がギルバートの手によって少しずつ開き始める。両開きになっている扉から察するに、多分馬小屋なのだろうと考えながら、クレスは扉が開ききるのを見守った。

「なっ！？」

「うわぁ……」

扉が開いた瞬間にクレスが驚きの声を、シェリスは感嘆の声をあげる。その二人の反応に、扉を開いたギルバートは顔に走る沢山の皺を深めた。

扉の先にいたのは真っ白な体をした大きな生き物。毛並みが良く賢そうな顔をしたそれは、自分とは全く違った色を持つクレスをつぶらな瞳で見つめていた。

「何でこいつが……」

クレスはそう呟くと、ギルバートを見つめた。

「半年程前かな、近くの森で怪我していたのを保護してな」

クレスはその言葉に小さく頷きながら、それの額に生えた物へと視線を移す。

額から生えた物こそが、それが馬ではないことを示している。馬と同じ体を持ち、額から角が生えた生き物。

「……チェバリス」

クレスがチェバリスと呼んだそれは、創造主の使いと呼ばれる生

き物。乱獲が原因で今では見る事が奇跡とまで言われる生き物であった。

「初めて見ました……」

シェリスの言葉にクレスが深く頷く。話に聞いた事はあるが、クレスも実際に見た事はなかったからだ。

クレスは知らぬ間にチェバリスに惹かれていた。チェバリスが持つ美しさは、正に創造主の使いと言いたくなる程の美しさ。それは気品とまで呼べるだろう。

「怪我は治ったんじゃが森に帰りたがらなくてな。しかも、誰であろうと背に乗せん。困っているんじゃよ」

ギルバートがそう言っている間にも、クレスはチェバリスに近づいていた。そして、その真っ白な身体に手を伸ばす。

「クレス！！　迂濶に手を出すと角で」

一突きにされるぞ。と言うはずだったギルバートは目を見開いた。ギルバートや国王でさえ身体に触るだけで一苦労だったチェバリスに、クレスはすんなりと触ったのだ。更には、チェバリスがクレスに顔を擦り寄らせている。

「何と……」

ギルバートは口を開けながらその光景を見つめた。

いつの間にかギルバートの隣にいたシェリスは、その光景を見ながら笑顔を浮かべている。

「創造主の使いに、創造主から予言された戦士、最高の組み合わせですね」

シェリスの言葉に、ギルバートは口を閉じ納得の表情を浮かべた。そして、対照的とも言える黒と白を見つめる。

「流石は創造主がお選びになった者ですな」

ギルバートはそう言うと、顔に刻まれた沢山の皺をより一層深くした。

「ギルバートさん。決めたよ、コイツがいい」

黒き剣士が選んだのは、自分とは対照的までに白いチェバリス。青い空の下、響く声には喜びが含まれていた。

第一印象

「なぁ、シェリス」

王都を出て少し経った時、クレスが自分の後ろにいるシェリスに向かい口を開いた。

二人が乗る真っ白なチェバリスは、商業都市レディスに向かいゆったりと足を運ぶ。

街道を流れる風は、クレス達とオルグ達が闘った日と変わりなかった。

「何ですか？」

風に煽られ顔にまとわり付いた青い髪を指で摘まみながら、シェリスが返事をする。もう片方の手は、しっかりとクレスの腰に置かれていた。

馬などに乗った事がないシェリスは、クレスの後ろに乗っているのだ。

「なんか視線感じるな……」

時折、街道を行き交う人々から向けられる視線は、まるで珍しい物を見るような視線。クレスはそんな視線には慣れているが、やはり居心地が悪い。

「私が逆の立場なら見ますね……」

シェリスは苦笑いを浮かべながら、風に煽られる髪を押さえる。

街道を行く二人と一匹。真っ白なチェバリスと真っ黒な剣士、そこに真っ青な賢者、目立たないわけがない。否、目立つなと言うのが無理だった。

それでもまだ、チェバリスの角がシェリスの魔術により消されているだけましである。

「それもそうだな」

クレスは諦めた様な溜め息を吐くと、自分が乗るチェバリスを見つめた。

本当に野生で育ったのかと言いたくなる程美しい毛並みと、気品のある鬣。どれを取っても最高級なチェバリスには、一つだけ欠点があった。

「……お前は平気か？　シロ？」

黒き剣士がつけた名前である。

「その名前やめませんか？」

シェリスが引き吊った笑みを浮かべながらそう言うと、クレスの顔に疑問の表情が浮かぶ。

「シロも気にいってるんだし、いいじゃないか。なぁ、シロ」

クレスが名を呼ぶと、チェバリスの耳が動く。それを了承のサインと読んだクレスは満面の笑みを浮かべた。

そんなクレスの表情は、後ろに乗っているシェリスからは全く見えない。
シェリスは一つ溜め息を吐くと、クレスのネーミングセンスの無さに苦笑いを浮かべた。

「それに第一印象は大切だぞ」

「それはわかりますよ。ただ、単純過ぎると言うか……」

シェリスはこれ以上何を言っても無駄だと気付くと、自然と優しげな笑みを浮かべた。
その笑みは、クレスの意外な一面を見れた嬉しさからくる物。ただ、シェリス自身はそれに気づいていない。

「なぁ、シェリス」

クレスはシロを一撫でしてやると、昨日サーシャと話をしてからずっと疑問に思っていたことを聞くために口を開く。街道の先を見つめる黒い瞳には、草原の緑と空の青が映る。

「はい」

「何で最初に、本当の事言わなかったんだ？」

瞬間、少し強めの風が吹く。その風が黒い髪と青い髪を弄ぶ。

クレスからはシェリスの表情は見えない。ただ、シェリスから感じる空気が明らかに変わった事に気づく。
腰に巻かれた腕が、ほんの少し震えていた。

「……すみませんでした」

何とか絞り出せされたそれは、謝罪の言葉。

「謝る様な事じゃないだろ」

クレスは思わず振り向きそうになるのを堪えた。流石に、振り向いたら落馬する可能性があったからだ。

そんなクレスの気持ちを察してか、シロが速度を落とす。その頭の良さにクレスは少し驚きながら、肩越しにシェリスを見つめた。

うつ向いているため、シェリスがどんな表情をしているか窺えない。

「……だって、結果的にはクレスさんを騙して……」

「そうかもしれないけど、俺は別に気にしてない」

シェリスの手がクレスの服を握りしめる。一体どんな気持ちで自分の服を握っているのか、クレスは知りたくて仕方なかった。

「……くれないと思ったんです」

「えっ？」

風にさらわれてしまいそうなシェリスのか細い声に、クレスは思わず聞き返していた。

「本当の事を言ったら、着いて来てくれないと思ったんです……」

「……かもな」

クレスは正義感の塊の様な出来た人間ではない。どちらかと言えば、今が楽しければいい、そんな考えを持っている。
そんなクレスが初対面のシェリスに、貴方は選ばれた人なんです。と言われても、間違いなく断っていただろう。

「嘘ついて良かったじゃないか」

『嘘をついて良かった』。クレスの言葉に、シェリスはうつ向いていた顔を上げた。

「必要な嘘だってあるんだよ。それが許される事もある」

「クレスさん……」

肩越しに見つめていたシェリスの瞳が、段々とうるみだす。クレスはそれを見て、前方へと視線を向けた。

「それに、着いてきた理由はちゃんとあるしな」

クレスはあの日の事を思い出しながら、口角を吊り上げた。勿論、その笑みはシェリスには見えていない。

「初対面であれだけ言われれば、見返したくもなる」

クレスがそう言ってまた振り向くと、シェリスは顔を赤く染めていた。いつの間にか、いつものシェリスに戻ったらしい。

「あ、あれは、その……」

「作戦みたいなもんだろ？」

クレスがそう言って微笑むと、シェリスは目を丸くした。

「わかって？」

「当たり前だ。あんな芝居に誰が引っ掛かるか」

あの時のクレスは実際には引っ掛かっていた。後々考えて気付いたのだ。

「なら、何で？」

「教えない」

クレスはそれだけを言うと、また顔を前方へと向ける。

街道の向こうに商業都市レディスの街並みが見え始めていた。

「教えて下さいよ」

「嫌だ」

クレスは言わない、『必要としてくれたから』など、恥ずかしくて言えない。

決定的だったのは、シェリスと水の女神が被って見えた時。クレスはあの時、シェリスに何処までも着いて行く事を誓った。

だが、本当の理由を聞いたクレスには迷いもあった。自分が創造主に予言された戦士、未だにそれが信じられなかったからだ。

「教えて下さいよ」
「嫌だね。……まぁ、とりあえず一つ教えてやる」
隔てられる事がない風達が、クレスの真っ黒な髪を弄ぶ。
「シェリスの第一印象は最悪だったな」
クレスはそう言って、声高らかに笑い始める。
真っ青な空に向かって放たれるその笑い声は、シェリスの頬を膨らませるには充分なものだった。

間抜けな守護者

「さて、どうするか？」

商業都市レディスに入った二人は悩んでいた。太陽はあと少しで沈み始めるが、シロをとばせば次の街に夜には着ける。

だが、シェリスを狙う者たちからすればそれは好都合な展開。流石の二人も夜襲されるのは避けたかった。

「今日はレディスで宿を取りましょう」

「いいのか？」

「土の賢者に辿り着く前にやられてしまっては、意味がありませんから」

「だな」

その時だ。シロの手綱を引きながら歩くクレスの目に、路地裏にうずくまるあるモノが飛び込んだのは。

「……人？」

クレスの呟きを聞いて、シェリスもその者に目をやる。そこには茶色いマントに身をくるんだ人間が横たわっていた。

瞬間的にシェリスが走る。その人物の元まで走ると、細い手で自分よりも大きな人物を抱え上げた。

「クレスさん！！　まだ息があります！！」

路地裏にシェリスの声が響く。

それを聞いたクレスはシロをその場に残し、シェリスと茶色いマントの人物の元に走る。頭のいいシロはその場でじっとしていた。

「大丈夫か！？」

クレスがシェリスに抱えられた人物に大きな声をかける。

するとその人物が口を動かす。あまりに小さくて今にも消えそうな声に、二人は耳を傾けた。

「何か、食い物……」

そう言ってその人物が手を伸ばす。言葉に気が抜けた二人は、その行動を気にしていなかった。

虚空を掴むように伸ばされた手が、シェリスの無い胸に辿り着く。

「……い、いやぁぁぁああ！！」

絶叫と共に、激しい炸裂音が路地裏に響いた。

「いやー、ホント助かったぜ」

そう言って食べ物を次々に口に運ぶ金髪の男。その頬には真っ赤に浮かぶ手の跡。シェリスにビンタされた跡がくっきりと残っていた。

「……」

「……」

クレスとシェリスは黙ってその男を見つめる。シェリスは若干頬が膨らんでいるが。

短い金髪に緑色の瞳をした男の体格は、明らかに戦士のそれだった。動くためだけに洗練された、膨らみ過ぎていない筋肉が付いた身体。

その身体を包むのは、黒のジャケットに藍色のズボンという、至ってシンプルな服装。そしていかつめのブーツと、腕にはめた革製のグローブ。動き易さを全面に押し出した格好であった。

食べ物にがっつく男を見ながら、クレスはある疑問を口にする事にした。

「お前名前は？　何であんな所で倒れてたんだ？」

「おいおい、質問は一つずつ頼むぜ」

一瞬だが、クレスのこめかみがピクリと動く。だが、クレスは両手を握り締める事で我慢に成功した。

「まぁ、とりあえず。俺の名前はセヴァーン、セヴァーン＝マクレイだ」

そう言って金髪をかきあげるセヴァーンを見て、二人は同時に溜め息を吐いた。

そんなことに構わずセヴァーンは続ける。

「んで二つ目だが、コレが重要なんだ……」

セヴァーンが真剣な目付きになったのを見て、クレスとシェリスは思わず息を飲む。

「金をすられちまってな、腹が減りすぎて倒れてたってわけだぜ」

真剣な目付きのセヴァーンから放たれた言葉に、二人は思わずテーブルに突っ伏してしまいそうになる。

（変なのと関わってしまった……）

クレスの心のぼやきは誰にも聞こえない。

「ところでよ、人を探してんだが知らねぇか？」

テーブルの上にあった物を全てたいらげたセヴァーンが腹を擦りながら口を開く。

自分の食事をたいらげたクレスと、まだ食べ掛けのシェリスはセヴァーンへと視線を移す。

「どんなやつ何だ？」

「ギルドの依頼だからあんまり言えねえんだが、黙っててもらえるか？」

「お前ギルドの人間だったのか……」

クレスは瞬間的に身構えた。もしかすると、自分達を狙っている可能性が考えられたからだ。
だが、クレスは小さくかぶりを振って考えを打ち消す。もしセヴァーンが自分達を狙っているとしたら、既に襲われているはずだったからだ。

「おぅ！！　王都のギルド『メリーバル』の『金色（こんじき）の風』とは俺の事だぜ！！」

クレスはその名に目を見開いた。
『金色の風』。その名はハルメリア内にあるギルドでは有名な名。風の様なスピードで標的を刈る事からそう呼ばれる様になった、ハルメリアでも一流の戦士。

クレスの隣に座るシェリスは、未だ食事を続けている。

「やっぱり驚きやがったな。サイン欲しいか？」

「いるか。それで、黙っておいてやるから依頼の内容を教えろ」

セヴァーンはクレスの言葉にちょっと残念そうな表情を浮かべると、声量を抑えて口を開く。
その瞳には真剣な色が浮かび、ギルドの人間の目になっていた。

「国王直々の依頼で、昨日の夜に急に入ってな」

「内容は？」

クレスも声をひそめながらそう言うと、隣にいたシェリスが食事

を中断して二人の話に耳を傾けた。

「何でも、水の賢者様と黒い剣士を秘密裏に護衛することらしいんだ。んで先行してレディスに来た」

瞬間的に、クレスとシェリスが顔を見合わせた。二人の目は真ん丸と見開いている。

「なのに見つからないんだよなぁ……」

「プッ……」

「フフッ……」

その言葉に、クレスとシェリスは笑いを耐える事ができなかった。二人の笑い声が宿の食堂に響く。

その二人を見て、対面に座るセヴァーンが目を見開いた。その目に宿るのは明らかな驚き。

「い、一体何だ！？」

「いや、お前の探してる二人の特徴は？」

腹を抱えながら何とか言葉にするクレス。シェリスは笑いすぎて目がうるみ始めていた。

「確か、水の賢者は青いローブに青い髪。黒い剣士はまんま黒らしい……」

セヴァーンはそう言いながら、自分の想像した人間達と、自分の

前に座るクレスとシェリスを照らし合わせる。
セヴァーンはようやく気づく。クレスとシェリスの容姿が、明らかに自分の探していた二人だと。
普通の人間ならば間違いなく最初に気づいただろう事だが、セヴァーンは今だった。
「お、お前らか！？」
クレスとシェリスは否定する理由も見つからず、同時に首を縦に振った。顔には笑みを貼り付けたまま。
「……なかった事にしてくれねぇか？」
秘密裏という事を気にしてか、セヴァーンは明らかに無理な頼みをする。だが、二人はその頼みに同時に首を横に振った。
「た、頼む！！」
「どうせですし、一緒に行きましょうよ。クレスさんはいいですか？」
シェリスの言葉に、セヴァーンは驚愕の表情を浮かべ口を開けていた。
「国軍ってわけでもないし、実力は周知の事実だ。シェリスが良ければいいぞ？」
実力よりも、国軍の関係ではない。クレスとしてはそれが一番ありがたかった。実際に、シェリスもそのため一緒に行くことを提案

したのだ。
国軍の関係者は、絶対に体の何処かに国のシンボルマークが入れられている。そのため、クレスとシェリスは軍の関係者だけは連れて行きたくなかったのだ。
「じゃあそういう事で、よろしくお願いしますセヴァーンさん」
シェリスはそう言って手を差し出した。
だが、セヴァーンはその手をすんなりと取らない。迷っていると言うのが一番ぴったりな表情を浮かべている。
「だが、依頼は……」
「今更秘密裏にも出来ないだろうが」
クレスは呆れた表情を浮かべながら、悩むセヴァーンを見つめた。
確かにギルドの依頼は大切だが、今更セヴァーンがそれを遂行するのは無理がある。それに護衛をするならば、一緒にいた方が楽だ。
「……確かに」
そう言いつつもまだ悩むセヴァーン。
そんなセヴァーンに、シェリスは手を突き出した。早く握れと言っているような動作。
「……じゃあ、よろしく頼むわ」
そしてセヴァーンは、シェリスの白く細い手を取った。
握られた手を見ながら笑顔を浮かべるシェリス、そしてその光景

を見つめるクレス。

セヴァーンが着いてくる事はいいが、クレスにはある心配が浮かんだ。

それは世界を救うために動く者とは思えない様な悩み。

（金どうするかな……）

「よろしくな！！」

クレスの悩みなど知らず、金髪の守護者は明るい声を響かせた。

疾風迅雷

町中に漂う潮の薫り、沢山の船とそれを乗りこなすいかつい男達。それらがシンボルとも言える街『サマス』を、三人と二匹が歩いていた。

黒、青、金、様々な髪色をした三人の人間と、角を隠した真っ白なチェバリス、そして金髪が盗んできた茶色の馬。統率感ははっきり言ってゼロ。

「疲れたか？　シロ」

黒い剣士が、自身が手綱を握る真っ白なチェバリスに尋ねた。人間の言葉など分からないであろうチェバリスは一度鼻を鳴らす。それはまるで、まだまだ行ける。と言っている様だった。

「シロじゃありませんよ。『クレイア』にするって言ったじゃありませんか」

そう言って黒き剣士をたしなめるのは、青いローブを着た賢者。

クレスとシェリスがセヴァーンと出会ってから早三日、変わった事と言えばシロの名前が変わった事だろう。クレスがシロの名前を呼ぶ度にセヴァーンが笑い過ぎて死にそうになるので、シェリスがなんとかクレスを説得し名前を変えたのだ。

その新しい名前は『クレイア』。創造主クレイエントを基にした名前である。

「わかったよ」

クレスは残念そうに言葉を吐き出すと、シロもといクレイアの手綱を引く。

「なぁ、クレス」

「どうかしたか？」

クレスが声のした方に目をやれば、セヴァーンが道の後ろを振り向きながら自分の馬の手綱を差し出していた。

「俺の馬頼むわ」

ウィンクしながら手綱を差し出すセヴァーンというのは酷く気色悪いものだと思いながらも、クレスはその手綱を自然と受け取っていた。

「理由位は言ってけ」

クレスは受け取った手綱を握りながら、いつもより少し低めの声を出した。

その声に、走り出そうとしていたセヴァーンの足が止まる。セヴァーンは一度振り向きクレスとシェリスに目をやると、可愛い子がいたんだ。と言って、切実な表情を浮かべ走り出す。

そのスピードは正に風、セヴァーンはクレスとシェリスが口を開く前に遥か彼方に消え去った。

二人は顔を見合わせ大きな溜め息を吐く。そんな二人の顔には、明らかな呆れが浮かんでいた。

ただ、呆れながらも二人は気づいていた。セヴァーンが走り去っ

た本当の理由に。

◇

石畳の道をいかついブーツが叩く。セヴァーンは走る、自分の任を果たすため。

誰に向けられていたかはわからないが、明らかに自分達に送られていた殺気。サマスに入る直前辺りから、ずっと向けられていた殺気を追い風の様に走る。

向けられていた殺気が、街の外れの林へ入る。セヴァーンは迷わずそれを追った。

全く手入れされていないそこには、手入れをされる事を知らない沢山の草が生えている。セヴァーンは自分の身の丈を越える程ある草を掻き分けて、殺気の『発生源』を追った。

幸いにも、草が少し倒れた場所を追えばいいだけなので、追跡は簡単だった。

しばらく行くと急に拓けた場所に出る。

その場所の中心に、セヴァーンが追ってきた『発生源』は立っていた。腰に手を当て、楽しそうな笑みを浮かべながら。

「あら、予想外の獲物が掛かったわね」

『発生源』は女。真っ赤な髪をした美女は、クレスがセレッソで退

けた赤い剣士。当然、セヴァーンはそのことを知らない。
セヴァーンは赤い剣士の言い回しに舌打ちした。

「もしや罠だったわけ？」

セヴァーンは自分の迂闊さを後悔しながら周りを見回す。周りからは他に人の気配を感じなければ、特にトラップと言った物も見つからない。

「フフッ、別に何も仕掛けてないわよ」

そんなセヴァーンを見ながら女は笑うと、剣を抜いた。日の光に当たった剣が銀色に煌めく。
それを見たセヴァーンが身構える。

セヴァーンは武器を持たない、セヴァーンの武器は己の体。所謂、格闘家と言われる人種である。

「罠なんか必要ないもの」

その言葉が闘いの始まりを告げた。

女は剣を構え走り出すと、突きの体勢に入る。それを見たセヴァーンは、バックステップで距離を空けるために体重を少し後ろにかけた。
左右に避けた場合、突きを出した後に剣を振るわれればそれを避けるのが難しい。武器を持たないセヴァーンには、それを防ぐ手もないのだ。だからこそのバックステップ。

女が突きを繰り出す。その速さにセヴァーンは思わず目を見開い

た。だが、しっかりとバックステップで距離を取りかわす。

「あら？　中々いい動きするじゃない」

突きを出した女はその場に立ったままそう言うと、剣を下段に構えた。

「こんな美人に誉められるとは、涙が出そうだぜ」

セヴァーンが軽口をたたきながら、真っ正面から突っ込んだ。

何の小細工も無い真っ正面からの特攻。それは、端から見れば無謀に過ぎない。

実際、剣を持った相手に対して武器を持たぬ者がそれをするのはあまりに無謀。

だが、セヴァーンにはそれが普通だった。幼き頃に格闘家を夢見たセヴァーンは、武器を持った相手とばかり闘ってきた。圧倒的に不利な中、生き残ってきた。

赤い剣士はセヴァーンが間合いに入った瞬間、剣を振り上げる。脇腹から左肩めがけて繰り出されたそれは、セヴァーンの服を掠めた。だが、肉は切り裂けない。

セヴァーンは剣が振り上げられた瞬間、十あったスピードを一瞬でゼロにした。肉体の限界を越える様な動きに、様々な所から悲鳴があがる。だが、セヴァーンは直ぐに次の行動に移る。

剣を避けられ驚きに目を見開いた赤い剣士の懐に飛び込む。超接近戦、それこそがセヴァーンの狙い。

剣は接近戦で扱う物である。だが、近すぎる相手に振るうのは難しい。

女はセヴァーンから離れようとバックステップをした。だが、セヴァーンは距離を空けさせない。女のバックステップに合わせる様に、力強く踏み込む。

そして腰の回転を使っての右フック、狙うは女の脇腹。先ずは剣士の足を止める、それがセヴァーンの狙いだった。

鈍い音が響くと共に、女の体がくの字に曲がる。

次の瞬間、女は呻き声と共に地面を転がった。

「やっぱり女だな、軽い」

セヴァーンは振り切った右腕を見ながら呟くと、直ぐに追撃に出る。

倒れた女との距離を一瞬で詰め、女の腹部めがけて足を振り下ろす。

だが、それは当たらない。女は地面を転がりセヴァーンの足を避けると、そのままの勢いで跳ぶ様にして立ち上がる。

セヴァーンは自分の足元から、立ち上がった女へと視線をやりながら一度舌打ちした。

セヴァーンの足元には陥没した地面。くっきりとブーツの足跡が残っていた。

セヴァーンのブーツにはちょっとした工夫がされている。蹴りの威力を高めるために鉄板が仕込まれているのだ。重さは増すが、セ

ヴァーンからすれば大した重さではない。
「美人を痛めつけるのは心が痛むわけなんだわ。大人しく殺られてくれ」
「あら、もう勝った気？」
女がくすりと微笑むと、纏う空気が変わる。それに合わせ、セヴァーンも精霊とのシンクロに入った。
「リ・シュル・ラント……」
詠唱を唱えながらも、セヴァーンは赤い剣士への注意は逸らさない。一流の戦士ならば、詠唱をしながら動くのは簡単な事だからだ。
女の考えもセヴァーンと同じ様で、じっとセヴァーンを見つめていた。
「……フラウ・ヴァル！！」
「……ヴェン・レイム！！」
二人が魔術の名を叫ぶのはほぼ同時だった。僅かにセヴァーンが遅かったが。
セヴァーンの周りには沢山の風の刃、女の周りには沢山の炎の球が現れる。
セヴァーンは炎の球を見た瞬間に舌打ちした。風の魔術が炎の魔術に弱い為だ。
だが、そんなセヴァーンの考えを余所に炎の球は放たれた。

「相性は最悪ってか」

セヴァーンが呟くと風の刃が動き出す。炎の球に向かい風の刃が動く間に、セヴァーンは回避行動に移る。沢山の炎の球を見ながら避けられる場所を探す。

拡散して迫る沢山の炎の球には、避けるための隙間がない。

だが、セヴァーンは一つだけ穴を見つけた。炎の球が来ない一点、その一点に向かいセヴァーンは走った。

風の刃が炎に呑み込まれた瞬間、セヴァーンは炎の球を避けられる一点に到達した。

その場所に到達したセヴァーンの眼前に、赤い髪の剣士が立っていた。

剣士が大上段に構えた剣を振り下ろす。

セヴァーンが誘導された事に気づくのは一歩遅かった。直ぐに体を捻り回避に移るが、剣が右肩から左の脇腹にかけて走る。

瞬間、赤い液体が宙を舞った。

◇

「セヴァーンさん大丈夫ですかね？」

「相手次第だな」

宿に着いたクレスとシェリスは、部屋のソファに座りながらそんな話をしていた。

「セヴァーンさんって強いんですか？」

「実際はよくわからないが、名前だけなら超が付く一流の部類に入るな」

「『金色の風』っていうやつですか？」

シェリスが初めてセヴァーンと会った日を思い出しながらそう言うと、クレスは黙って首を縦に振った。

「あのセヴァーンさんが……」

シェリスが首を傾けそう呟くのを聞きながら、クレスはシェリスを護るために自分が闘った二人を思い浮かべた。

先ずは先日闘った、いかつい体つきをした男。明らかにクレスよりも格上だったオルグ、助かったのは奇跡だった。

そして、奇跡的に勝てた赤い髪の剣士。クレスはあれを奇跡だとは思っていない。クレスは気づいていた、赤い剣士が手を抜いていたのを。

◇

「驚いたわ……」

大して驚いた表情を浮かべてはいない赤い剣士は、赤く染まった剣を見つめた。

「……確実にやったと思ったのに」

赤い剣士が視線を移した先には、右肩から袈裟に斬られたセヴァーン。赤い液体がセヴァーンの体を伝う。

「もうちょい美人を見ていたいんでね」

セヴァーンは胸元の傷を押さえながら、不敵に笑う。胸元からは変わらず血が流れているが、傷は大して深い物ではなかった。

女が袈裟に振り下ろした剣はセヴァーンに致命傷を与えてはいない。

超反応とまで言える反射神経、加えて今まで養った経験、その二つがセヴァーンを助けたのだ。

セヴァーンの額を冷や汗が流れる。それは、女から発せられた殺気によるもの。赤い剣士は最初に会った時と、全く違った人間になっていた。

「手ぇ抜いてやがったな？」

「失礼ね、貴方を試してただけよ」

女がそう言った瞬間に赤い髪が揺れる。血の様に赤い髪の下に見えたのは、血よりも赤い瞳。

そこでセヴァーンはある事を思い出した。それはギルドの仲間が言っていた事。化け物の様に強い、真っ赤な女がいると。

「あんた名前は？」

「あら、急にどうしたのかしら？」

「美人に名前を聞かないのは失礼だろ？」

セヴァーンの言葉に、女は妖艶な笑みを浮かべた。それを見たセヴァーンの腕が勝手に震え出す。それは、セヴァーンにとって初めての経験だった。

「マチルダよ、マチルダ＝クリシーズ。ギルド仲間にはよく……『赤の女王』って呼ばれるわ」

『赤の女王』、その名はセヴァーンが最も聞きたくない名であった。

「本気で行くしかねぇか……」

『赤の女王』その名はハルメリア国内のギルドに所属する者なら知らぬ者はいない、他の国の者でも知っている者はいるだろう。

どんなに危険な依頼であろうと引き受け、その依頼達成率は百パーセント。そして常に一人で行動するとされている、妖艶な赤き剣士。

そんな化け物を相手にしているからこそ、セヴァーンはこの闘いに全てを賭ける決意をした。

まだ出会って間もない黒き剣士と青き賢者、その二人を護るのがセヴァーンの役目。だが、セヴァーンに全てを賭ける決意をさせたのはそれではない。

自分よりも強いとされている者と全力でぶつかりたい。その想い

が、セヴァーンに全てを賭ける決意をさせた。

「あんまり使いたく無かったんだがな……」

セヴァーンが小さく呟くと、身に纏う空気が変わる。すると、セヴァーンを中心に風が渦巻き始めた。

セヴァーンの返り血を少量浴びた赤き剣士は、ふっくらとした赤い唇を返り血の着いた腕に這わせながらそれを見つめている。

「リ・ディル・セン・プッシ・ゼード……」

セヴァーンを中心に巻き起こり始めた風が、今度はセヴァーンの身体にまとわり付き始める。

赤き剣士は唇を腕から離すと、微笑みを湛えセヴァーンのすることを見つめる。真っ赤な瞳を細め笑みを湛えるその顔には、圧倒的狂気が浮かんでいた。

「……テンプト・ヴェトム！！」

瞬間、セヴァーンを中心に小さな竜巻の様な者が発生し、周りにある物全てに風を叩き付けた。木々が揺れ、葉がざわめき、マチルダの赤い髪が揺れる。

荒れ狂う暴風が晴れた場所には、風の衣を纏ったセヴァーンが立っていた。

「……さて、行くぜ」

セヴァーンは口を閉じると動き出す。そのスピードは今までの比ではなかった。風よりも速いそれは、正に神速。
マチルダが目で捉えるよりも早く、セヴァーンはジグザクに動く。マチルダに見えているのは残像だけだった。

セヴァーンが唱えた魔術は自分自身のスピードを上げる物。その効果はマチルダが目で追えない程であった。

セヴァーンはそのスピードのままマチルダの真っ正面で腰を屈め、全力の正拳突きを放つ。音を立てながら空気を切り裂くそれは、一撃必殺の圧倒的破壊力を有していた。

真っ正面からのそれに関わらず、マチルダが回避をする事は出来なかった。否、出来る筈がなかった。
マチルダの真っ赤な瞳に金色が映ったのは、セヴァーンが正拳突きを放つ一瞬だけだったのだから。

雷が落ちたかと言うような凄まじい轟音、そしてマチルダが木に打ち付けられる。打ち付けられた木は、先ほどまでマチルダがいた場所から大人三人分は離れていた。

「……マジかよ」

攻撃を当てたにも関わらず、セヴァーンは悔しげな表情を浮かべる。
セヴァーンは焦っていた、今の一撃は確実に勝負を決めるために放った一撃。言うならばセヴァーンの切り札。それを『防御』された。その事実がセヴァーンを焦らせていた。

「……素晴らしい一撃ね」

マチルダが立ち上がる。何事もなかったかの様に平然と。

セヴァーンは見えていた。自分の拳が当たる瞬間、マチルダが拳の前に剣の腹を入れ、当たった瞬間後ろに跳んだのが。

あの凄まじい轟音は、セヴァーンの拳がマチルダの剣をへし折った音だった。

セヴァーンが地に膝を突く、それは諦めからのものではない。単にセヴァーンの身体が限界だったからだ。

セヴァーンが使った魔術は凄まじい効果を産み出す。ならば何故、セヴァーンがあれを常に使わず切り札としているか。

簡単に言えば副作用が原因であった。風を使い無理矢理にスピードを上げれば、それは身体に無理をさせる事になる。つまり、限界を越す動きをした筋肉の破壊を引き起こす。

セヴァーンの鍛え上げられた柔軟な筋肉は断裂などは起こしていないが、痙攣して動かせない状態だった。更に、所々痛みを放っている。

「フフッ……駄目ね。スピードが上がっても、その攻撃が当たらなきゃ」

マチルダはゆっくりとセヴァーンに近づく。その右腕には折れた剣が握られていた。

「……見えてたのか？」

「いいえ。感じただけ」

マチルダの返答にセヴァーンは笑みを浮かべると、その場にうつ伏せに倒れ込む。体を支えるのも困難になったのだ。
青々とした草達が、セヴァーンを優しく受け止めた。

「逆に聞くわ、何故真っ正面から攻撃したの？」

「どっから撃っても同じ気がしたんでね」

吐き捨てる様なセヴァーンの言葉に、マチルダは満足気な笑みを浮かべた。

「……さて」

マチルダは倒れたセヴァーンの隣まで来ると、折れた剣を大上段に構えた。狙いはセヴァーンの頭。

「……死になさい」

折れた剣が振り下ろされる。セヴァーンはその瞬間、死を受け入れた。

「死ぬのはまだ早いだろ？」

鉄と鉄がぶつかる甲高い音が響くと同時に、セヴァーンは声を聞いた。

セヴァーンの意識はそこで途絶えた。

最悪、再会、相対

闇よりも黒い瞳と、血よりも赤い瞳が交差する。その視線と同じ様に、交差する二本の剣。

その一本は途中から引きちぎられた様に折れ、日の光に当たったそれらは白銀に輝いている。

刀芯に映る黒き剣士の顔には緊張、赤き剣士の顔には狂気が映し出されていた。

「悪いが、殺らせない」

クレスが力任せに剣を弾く。剣を弾かれた赤き剣士は、そのまま距離を取ると妖艶な笑みを浮かべた。

「久しぶりね。黒き剣士」

「助けてもらって以来だな」

クレスは確信していた。オルグ達との闘いで自分達を助けたのが、目の前にいる赤き剣士だと。

「フフッ……気づいてたの？」

「あんた以外に考えつかなくてな。だが分からない、何故助けた？」

あの場でクレス達が死んでいれば、赤き剣士には何一つ不都合になる点は無かった。ギルドの依頼はある意味達成されるのだから。

「楽しくないじゃない……」

クレスは驚きはしない、平然とした表情で赤き剣士の話に聞きいる。

「……獲物を取られるのは」

そう言った瞬間、赤き剣士から凄まじい殺気が放たれた。それを肌で感じ取るクレス、だがその表情に変わりはない。

少し前のクレスなら恐怖に震えていたかもしれない。だが、オルグやヴァルゼルフとの闘いがクレスを変えた。今のクレスには赤き剣士の殺気を受け流す位は容易い事。

「成長したみたいね。黒き剣士」

「……クレスだ。クレス＝バーキンスだ」

黒き剣士という呼び名に少しイラッときたクレスは、ボソリと言い放つ。その言葉に、赤き剣士は満面の笑みを浮かべた。

「私はマチルダ、マチルダ＝クリシーズ……」

折れた剣を構えたマチルダの表情が、明らかに憂いを帯びた。その表情を見たクレスは小さく身震いする。何がそうさせたのかは、クレス自身にもわからない。

「覚えておきなさい、貴方を殺す名よ」

マチルダは折れた剣を構えたまま地を蹴った。クレスもその動きに合わせて剣を構える。

クレスはその場を動くことが出来ない。後ろに倒れたセヴァーンを庇う状態でマチルダを迎え撃つ。

マチルダが間合いに入った瞬間、クレスは目を見開いた。マチルダの初撃は、クレスが最も予想していなかったものだったのだ。

それは突き。折れた剣からは無いと思っていた攻撃。クレスは驚きながらも、構えた剣でその突きを弾いた。静かな林に、鋼のぶつかり合う音が響く。

マチルダは剣を弾かれても下がる事はしない。それどころか更に一歩踏み出し、クレスに近づいた。

その間合いは格闘家のセヴァーンが得意とする間合い、そして剣士のクレスが苦手とする間合い。

超接近戦。

それがマチルダの狙いだった。折れた剣は、言うならば短剣に近い。その短さを活かすのが超接近戦という間合い。

クレスがそれに気づいた時には、マチルダはクレスの懐に踏み込んでいた。

「……さよなら」

「殺らせるかよ」

マチルダが呟くのと、クレスが決断をするのはほぼ同時だった。

マチルダが折れた剣をクレスの胸に突き付ける。その瞬間、クレスは剣を一瞬手放すと、手首を返し剣を逆手に持ち変えた。

クレスが空いた左手でマチルダの服を掴んだ瞬間、マチルダは眼

球が落ちるのではないかと言うほど目を見開いた。その顔に浮かぶのは明らかな驚愕。

「逃がさないぜ」

クレスの決断は、マチルダを驚かせるだけの威力は有していた。

クレスは逆手に持った剣をマチルダの背中めがけて、全力で突き立てる。一瞬早くそれを感じたマチルダが、クレスの左手を斬りつけた。

痛みにクレスの左手が開く、マチルダはそれと同時に身体を翻すと、背中に迫る剣を避けバックステップでクレスとの距離を空けた。

クレスの決断は賭けだった。マチルダが自分の命を優先するかクレスの命を先に摘み採ることを優先するかで、結果は変わっていたのだから。

「死ぬよりはましだな。それに、痛みわけだったみたいだし」

クレスはそう言って斬られた左手を舐めた。同時に右手に持った剣を持ち直し小さく振るう。剣先に付いた赤い液体が、地面に舞い散った。

「私が避けなかったらどうしてたの？」

マチルダは、身体を翻した瞬間に剣先が掠めた左肩を押さえつつクレスを見つめる。

マチルダの白い左腕を、自分の髪や瞳と同じ真っ赤な色をした液体が伝う。

「良いとこ相討ちかな」

「やっぱり、貴方は面白いわ」

マチルダは笑みを浮かべながら、右手の指先に付いた液体を舐めた。

「……本気で行くわよ」

マチルダがそう言うと、周りの木々がざわめく。まるで木々がマチルダを恐れている、クレスの瞳にはそう映った。

「集中しろ……」

クレスは呟くと、魔術を使おうとしているマチルダを見つめながら集中力を練り上げる。クレスは感じた、今からマチルダが使う魔術が自分への攻撃の魔術でないことを。

「……フラム・ソルディア」

その時だった、マチルダの手に握られた折れた剣に炎が宿る。激しい音を立てながら燃え盛る炎が、一瞬で剣の姿を型どった。

炎の剣を携えたマチルダが、クレスに向かって走り出す。

クレスは迷っていた。それは魔術を使うことが出来ないクレスだからこその悩み。

その間にもマチルダがクレスに迫る。そして、クレスの右脇腹めがけて炎の剣を横一文字に振るう。

クレスにはわからなかった。その剣が受け止める事が出来るのか、出来ないのか。悩むクレスは剣を防ごうと動き出す。

「避けて！！」

澄んだ声が響いた瞬間、クレスは身を捩っていた。炎の剣がクレスの腹を掠める。肉が焼ける様な小さな音が、クレスの耳に確かに聞こえた。

瞬間、クレスは腹部に今まで感じた事のない痛みを覚え、呻き声を漏らす。

クレスの服は焼き斬られ、その下の肌には横一文字に焼き斬られた跡が走っていた。その傷口からは、血が流れていない。

クレスは呻き声を漏らしながらも、追撃を意識してバックステップで距離を取る。

マチルダはそれを追わなかった。否、追うことができなかった。その原因はマチルダの足元に刺さる水の矢。

「大丈夫ですか！？」

そう言ってクレスに駆け寄ったのは、身体中草だらけの賢者。シエリス＝ミアルタであった。

「悪いな、助かった」

クレスはそう言って腹部を押さえる。ジンジンと痛む傷口からは、やはり血が流れていなかった。

「アレは剣じゃ受け止められないのか？」

マチルダを目の端に置きながら、隣に立つ草だらけのシェリスに尋ねる。
余程急いで来たのだろう、シェリスの綺麗な髪はボサボサになり、真っ青なローブも所々汚れていた。
「炎を剣で受け止められますか？」
「無理だな」
シェリスの言うことは最もである。ただの鉄の塊では、炎と打ち合うなど不可能だ。
「普通の剣では無理です。魔力を帯びている剣なら可能ですが……」
「なるほどな。それじゃ、頼む」
クレスはそう言いながら、シェリスの前に剣をかざす。
まだ出会って一ヶ月も経たない二人だが、それだけで充分だった。
「あの人見といてくださいね」
「当然」
クレスがマチルダに視線を向ければ、マチルダは腰に手を当て笑みを浮かべていた。まるで楽しむ様なその表情は、クレスを待ちわびている様にも見える。
クレスがマチルダを見つめていると、隣にいたシェリスの空気が変わり始めた。それはシンクロに入った報せ、そしてシェリスが詠唱を始める。

シェリスはクレスに分からない単語をズラズラと並べると、最後の締めである魔術の名を呟く。

「……イウ・ソルディア」

言葉と共に、クレスが持った剣を水が覆い始めた。

「水の剣か……」

水により完璧にコーティングされた剣を見ながら、クレスが満足気な表情を浮かべる。

「シェリスはセヴァーンを頼む」

未だ草の上で伸びているセヴァーンを目だけで捉えながら、クレスは水の剣を構えた。

「奴は俺が叩く」

「援護は？」

「ヤバそうな時は頼んだ」

それで話は終わりだという様な空気を出すと、クレスは無骨なブーツで地を蹴った。

地を蹴ったクレスを待っていたかの様に、マチルダが動き出す。

その手には炎の剣、そしてクレスの手には水の剣。

クレスが選択した一撃は、マチルダの左脇腹めがけた横一線。

マチルダが自分の間合いに入った瞬間、クレスは自分の選択した行動に移る。

左足を踏み込み腰の回転を利用。全ての関節を有効に利用する事で、身体全体の力を水の剣へと乗せる。

その一撃は、当たりさえすればマチルダの上半身と下半身に別れを告げさせるだけの威力は充分に有していた。

だが、クレスの正直過ぎる一撃がマチルダに届く事はない。マチルダが炎の剣を、クレスの一撃に合わせる様に振るう。

水と炎がぶつかり合った瞬間、水が蒸発する音と、炎が消される音が同時に起きる。

弾かれなかった剣を互いに交差させたまま、クレスとマチルダが鍔迫り合いを始める。その二人の距離はゼロに近い。

「黒き剣士……」

「クレスだ」

鍔迫り合いをしながらも、口を開く二人。

その間では、水の剣が炎の剣をどんどん小さくしている。水の魔術は炎の魔術に強い、尚且つ水の剣を作ったのは賢者シェリス、威力の差は歴然としていた。

「クレス、貴方は本当に面白いわ。以前も言ったけど、殺してしまうのが本当に惜しい」

「そいつはどうも。だったら退いてくれないか？」

クレスは口元だけに笑みを作り、分かりきった返事を待つ。

「それは無理」

マチルダが口角を吊り上げた瞬間、クレスは水の剣を力任せに振るう。それに合わせ、マチルダが後ろに跳んだ。

一瞬にして、二人の間に大人三人分程の距離が出来る。　水の剣を振り切ったクレスはある事に気づく。

（アイツ……）

クレスは離れたマチルダを見つめる。マチルダは肩の上下が激しく、口がしまっていない。更にさっきの鍔迫り合い、マチルダの炎の剣は軽すぎた。

「……限界みたいだな」

クレスはマチルダの疲れの理由を知らないが、何となく予想は出来ていた。おそらく理由はセヴァーンにあると。

セヴァーンとの第一戦、そして今の二戦目。魔術を駆使しながらの闘いは、マチルダの体力を奪うのに充分な物だった。

そしてマチルダの体力を一番奪う原因は、痛み。マチルダが顔に出すことはないが、背中に走る痛みが彼女を襲っていた。

セヴァーンがマチルダに放った必殺の一撃。マチルダはあれを完璧には受け流せていなかった。

その証拠が木にぶつかった事にある。後ろに跳んで威力を最小限に抑えたマチルダだが、あそこまで跳ぶ予定はなかった。

体力も限界、そしてシェリスが手を出さないと言えど、実質一対二の状況。それでも彼女は退かない、それをさせないのは依頼達成への執念と、クレスとの闘いからの楽しさ。
マチルダのふっくらとした赤い唇が緩む。

そんなマチルダを見つめながら、クレスは決めた。

「次で、決める」

呟くよりも早く、クレスは地を蹴っていた。
それに合わせる様にマチルダが動き出す。魔術の詠唱を行いながら。

マチルダが魔術を放とうとしている事は、クレスにはわかっていた。空気が変わるのを肌で感じていたのだ。
魔術発動前に叩く。それがクレスの考えだった。

間合いに入った瞬間、クレスは大上段から水の剣を振り下ろす。動きに合わせ真っ黒な髪が揺れる。

その剣を、マチルダが右手に持った炎の剣で受け止めた。余程力を入れているのか、剣を持つマチルダの腕が震えている。

押し切る。

クレスにその考えは無かった。それどころか、クレスは剣の柄を手放した。

剣の柄を手放す。その行為はあまりにも無謀。剣士の武器であり、命。それを戦闘中に手放す。

クレスはそれを躊躇わなかった。

「……フラム・ソルディア」

クレスが剣を手放した瞬間、マチルダの左手に炎が宿る。その炎は、一瞬で剣を構成。

マチルダが『二本目』の炎の剣を横に振るう。

クレスが剣を手放した理由はそれだった。

クレスはその攻撃を読んでいた。否、予感していた。それをしたのは目でも肌でも、頭でもない。それはさせたのは、つい先日まで黒き剣士の中に眠っていた、本能。

目で相手の動きを見、肌で武器に宿る殺気を感じる。その闘い方が出来る様になったクレスが、長い眠りから揺り起こした感覚。

ヴァルゼルフとの闘いでも活かされたそれは、言うならば第六感。名を付けるならば『超直感』、それがクレスを動かした。

剣を手放したクレスは身体を沈める。上半身が地面に着くのではないかと言う程沈められたクレスの上を、マチルダの炎の剣が空気を切り裂く音と共に横切る。炎に暖められた空気が、クレスの頬を撫でた。

髪の毛が焼ける音と共に、何とも言えない匂いが漂う。だが、クレスとマチルダがそれを気に掛ける事はない。

クレスは左手を地に着けると、腰の回転を使いながら右足を地面と平行に振るう。

その足が、剣を避けられ目を見開いたマチルダの足を刈り取った。

足を刈られた事により、マチルダが仰向けに倒れ始める。クレス

の真っ黒な瞳には、その光景がスローモーションの様に映っていた。
足を振りきったクレスは、空いた右手をしっかりと開き頭上に掲げる。その瞳は、倒れいく赤から離さない。
クレスが掲げた右手に、重力に逆らう事を知らない剣の柄が落ちる。日を反射するそれは、クレスの黒と対称的な白い輝きを放っていた。

剣を掴んだ瞬間、クレスは倒れたマチルダに馬乗りになる。そしてマチルダの細い首に、いつの間にか水の魔術が解けた剣を突き付けた。

「俺の勝ちか？」

「あら、私の勝ちじゃない？」

剣を首に突き付けられたマチルダは、雰囲気関係無しの軽めの口調でそう言う。マチルダの両手に握られた炎の剣は、クレスの首を両脇から挟み込んでいた。炎がクレスの肌を焦がす。

「引き分けにしとかないか？」

「それもありね」

「じゃあ、今日はこれで退いてくれるか？」

マチルダが仰向けのまま頷くと、握られていた炎の剣が消える。
それに合わせ、クレスは突き付けた剣をマチルダの首から離した。

「貴方はお人好しね」

クレスがマチルダの上からどいた瞬間、赤い剣士は微笑んだ。その微笑みを湛えたまま立ち上がる。

「私が剣を消した瞬間に殺れば良かったのに……」

「そんな事出来るか」

クレスはぶっきらぼうに答えると、マチルダを見つめながら剣を鞘へと戻す。

そのクレスにマチルダが近づく。顔には妖艶な笑みを貼り付けて。

「本当に面白い人……」

クレスは自分に近づく赤き剣士を止めなかった。全く殺気を感じなかったからだ。

マチルダの白い手が、クレスの顔をなぞる。クレスはただただ赤き剣士を見つめた。

瞬間、赤き剣士の赤い唇がクレスの唇に押し当てられる。

「……また会いましょう、クレス＝バーキンス。次は、殺すわ」

唇を離しそれだけを言い残すと、真っ赤な死神は背の高い草の中に飛び込んだ。

「クレスさんの……」

呆気に取られたクレスが声に振り向けば、そこには拳を震わせた

シェリス。

「……バカー！！」

死神を退けた真っ黒な剣士は、真っ青な賢者の一撃で夢へと誘(いざな)われた。

最悪、再会、相対（後書き）

どうも作者の欠陥人です。
今回の話いかがでしたでしょうか？
欠陥人的にはお気に入りの話であります。（文章は未熟ですが）

なぜかって？

マチルダは欠陥人のお気に入りだからです！！
なんかすいません（笑）

さてさて物語もまだまだ序盤なわけですが、こんなくだらない話を読んで下さっている皆様、今後も何卒よろしくお願いいたします。

次話も今日中に更新予定ですので、よろしかったらお楽しみに。

ではでは、ちょっと位感想とか評価欲しいなー。
なんて思う欠陥人でした。

鈍感と役立たず？

外は既に日が落ち、夜の幄が落ちている。その闇の中で輝きを放つのは、沢山の星と白く丸い月だけだった。

時刻は、一般的に言うならば夕食時。潮風漂うサマスにある宿の食堂、三人はそこにいた。

一人目は左手に包帯を巻き、服を着ているから見えないが腹にも包帯を巻いている黒髪クレス。

二人目は右手に包帯をぐるぐる巻きにされ、服の下も包帯だらけの金髪セヴァーン。

そして最後は、全く怪我をしていない青髪シェリス。

食堂の一画にいる三人の顔には、それぞれ違った表情が浮かんでいた。

気の抜けた様な表情のクレス、笑顔を浮かべるセヴァーン、そしてむくれているシェリス。

周りにいる他の客達は、そんな三人を見て怪訝な表情を浮かべていた。

「うっめー！！　この魚料理マジで美味い！！」

マチルダの剣を叩き折って怪我した右手の代わりに、左手にフォークを持ったセヴァーン。セヴァーンが笑顔を浮かべてそう言えど、黒髪と青髪は何も反応しなかった。

セヴァーンが怪訝な表情を浮かべて二人を見れば、シェリスはむくれた顔で食事を進め、クレスは呆けた様子で食べ物を見つめていた。

「なぁなぁ、シェリたん。俺が寝てる間に何かあったのか？」

『シェリたん』。そう呼ばれたシェリスは一瞬眉を寄せるが、敢えてそれについては触れなかった。短い付き合いだが、セヴァーンに何を言っても無駄だとわかっていたから。

シェリスは左の頬が腫れ上がったクレスを一瞥すると口を開く。

「どこぞの誰かさんが、美人に『キス』された位じゃありませんか」

シェリスの棘のある言い方に、呆けた表情を浮かべていたクレスが目をしばたく。そしてセヴァーンは、目を見開き驚愕の表情を浮かべていた。

「キ、キ、キスですとー！？」

セヴァーンは絶叫とも取れる叫び声をあげると、クレスに驚愕の表情を向ける。その目にはある種の殺気が宿っていた。

クレスはその目に多少身構えつつ、口を開く事はしない。言ったら間違いなく、セヴァーンからの『口撃』が飛んでくると予想していたのだ。

「シェ、シェリたん！！　相手は、相手は誰なわけ！？」

そんなクレスを見てか、セヴァーンはまたシェリスに話を戻す。クレスはその光景をハラハラしながら見守っていた。

するとシェリスが急に立ち上がり、両手をテーブルに叩き付けた。手を打ち付けられたテーブルが、激しい音を起てながら軋む。

「クレスさんと、あの女剣士ですよ！！　セヴァーンさんはその時寝転がってただけですから、知らなくても無理はありませんね！！」

クレスは目を見開きながら、珍しい物を見るようにシェリスを見つめた。明らかに怒っているシェリスを見るのは、これが初めてだったからだ。

「大体、セヴァーンさんがあの剣士を倒してればキスに何てならなかったんですよ……」

明らかな八つ当たり。シェリスらしくないそれに、クレスは苦笑いを浮かべる。

八つ当たりされている当人は、何とも無様な表情を浮かべていた。

「……セヴァーンさんの役立たず！！」

シェリスはそう吐き捨てると、まだ残っている夕食を残し足早に食堂を立ち去った。

呆気に取られた二人には、その姿を呆然と見つめる事しかできなかった。

周りから沢山の視線が、残された二人に突き刺さる。

「なぁ、クレス」

「何だ？」

未だシェリスが出ていった食堂の入口に目をやりながら、二人は会話を始める。

「俺って役立たずなわけ？」

「……言葉のあやだろ」

クレスはそう言ってから自分の食事に目を移す。そこにはまだ手付かずの食事。

食事を取るのも忘れさせてしまう程に、マチルダからのキスはクレスにとって衝撃的だったのだ。

クレスは手付かずの食事を見て頭を掻くと、何となくだがシェリスが怒っている理由を察する。

（闘いの後なのに、食事取らないのはマズイよな……）

そしてクレスは大きな溜め息を吐いた。隣にいたセヴァーンも、同じ様に溜め息を吐く。

明らかに違った意味の溜め息を吐く二人は、同じ様な顔で食事を再開した。

◇

「何であんなこと言ったんだろ……」

安全面と金銭面から借りた二人部屋に戻って来たシェリスは、独り言の様に呟いた。二人部屋なのは、当然の如くセヴァーンをソファに寝させるためだ。

部屋に戻って来るまでに冷めたシェリスの頭を巡るのは、激しい

後悔。

「謝った方がいいかな？」

またしても独り言の様なそれは、独り言ではない。シェリスを見守る大精霊、水の女神イーユデッサに語りかけるものだった。

「やっぱり貴女もそう思うわよね……」

心で会話出来るはずなのに、シェリスの口からは自然と声が漏れていた。

「セヴァーンさんに酷い事言っちゃったし。それに……」

シェリスは自分の言った事を後悔しながらも顔を赤くする。真っ赤になった顔は、高熱を放っていた。

「わ、笑わないでよイーユデッサ！！」

顔を赤くしながら虚空に向けて叫ぶシェリス。それは、端から見れば滑稽以外の何物でもない。

「……二人が帰って来たら謝らなきゃね」

シェリスはそう言うと、座っていたベッドに身を預けた。華奢な体がベッドに沈む。

シェリスは綺麗な青い瞳を細めると、そのまま瞼を閉じた。

数分後部屋に響くのは、規則的な寝息。クレスとセヴァーンの帰りを待つはずのシェリスは、深い眠りへと誘われた。

◇

食堂の一画には、食事を終えた黒と金が居座っていた。満腹になった二人の顔に浮かぶのは満足したそれではなく、何とも気の抜けた表情。

「なぁ、クレス」

「何だ？」

「酒が飲みてぇ」

項垂れる様な体勢からそう言ったセヴァーン。それを見たクレスが溜め息を吐く。

「お前のせいで金をあんまり使えないんだ、我慢しろ」

「そこを何とかさー」

手を合わせながらそう言うセヴァーン。いつものクレスならば、そんなセヴァーンを無言で黙らせているだろう。

だが、今日のクレスは違った。

「……俺も久しぶりに飲みたいし、たまにはいいか」

クレス自身、自分の口から出た言葉に驚いていた。何がそうさせたのか、クレスには分からない。
ただ一つ分かるとするなら、今日の自分が変な事。クレスに分かるのはそれだけだった。

「ぬぉ！？　どうしたんだクレス！？」

「何がだ？」

酒を飲みに行けると言うのに、セヴァーンは喜ぶどころか目を丸めてクレスを見つめる。
明らかに驚いているセヴァーンは、瞬きの数が異様に多い。

「いや、断るんじゃないのか？」

「断られたかったか？」

疑問に疑問で返すクレスは、口元に小さく笑みを作る。酒を飲みに行くことを了承してしまった自分が、可笑しくて仕方ないのだ。

「んなわけあるかよ、驚いただけだってぇの」

セヴァーンがそう言って肩を竦めると、クレスは食堂の壁へと視線を移した。

「ここで飲むのか？」

食堂の壁には、沢山の食事メニューが貼られていた。勿論、その中には沢山の酒もある。
クレスの言葉にセヴァーンは一度壁を見渡すと、やれやれと言い

たげな様子で溜め息を吐いた。

「せっかくの酒だぜ。こんなちんけな宿よりもちゃんとした所で飲もうぜ」

「それもそうだな」

クレスは傍らに立て掛けて置いた剣を掴み立ち上がる。そしていつもの様に剣を背負う。

それに続いてセヴァーンが立ち上がる。立ち上がる瞬間、体に走る痛みからかセヴァーンが顔を歪めた。

「お前その体で酒なんか飲めるのか？」

「無論！！」

顔を歪めながらも、親指を立てて了承のサインを出すセヴァーン。そんなセヴァーンを見てクレスは溜め息を吐いた。

「それによく言うだろ、『酒と美人は劇薬だ！！』って」

「……アホ」

クレスは平然と歩きだす、劇薬の正しい意味を理解していないセヴァーンを置いて。

結局、黒き剣士と金色の格闘家は次の日の朝まで帰らない。

そんな二人が青い賢者にまた怒られるのは、必然であった。

ペンダント

澄み渡る青空と真っ青な海、見渡す限り青に近いそこに三人はいた。『そこ』とは、簡単に言うならば海の上。さらに的確に言うならば、船の上。

セレスタ国へと渡る船の船首、最も海風を感じるそこに黒と青、加えて金色が立っていた。三人はそれぞれ目を瞑り、海風に体を預けながら波の音に耳を傾けている。

「最高だな」

呟いたのは金髪の格闘家セヴァーン。肌にまとわり付く様な海風を楽しむその表情には、気持ちよさそうな笑顔が張り付いていた。

隣に立つ黒き剣士と青い賢者はセヴァーンの言葉に静かに頷くと、海鳥達の声に耳を傾ける。

「それにしても……」

シェリスの顔が優しい微笑みから、引き吊った様な苦笑いに変わる。

「貴方達は二日酔いという言葉を知っていますか？」

今朝方部屋に帰って来た二人を見つめながら、シェリスは呆れた様な声でそう言った。

するとクレスとセヴァーンは顔を見合わせ、二日酔い？　と呟き合い始める。

クレスは幼い頃からギルドで育った。ギルドでの飲み物と言えば、

アルコールが入っていない物の方が少ない。そんな境遇で育ったクレスにとって酒はジュースの様な物。つまり、クレスという人間は酒豪と呼ばれる人種なのだ。

そしてセヴァーン。彼の場合は単純な話で、酒を愛していると言っていいだろう。『酒を飲んでも飲まれるな、飲まれる位なら死んじまえ』。それがセヴァーンの持論であり、だからこそセヴァーンは酒に酔うような事はしない。

「……もういいです」

シェリスは溜め息を吐きながら、顔に張り付いた青い髪に手を伸ばす。海風に弄ばれた青い髪は少しベタつき指に絡み付く。

「ところでよぉ」

先ほどは気持ち良さそうにしていたセヴァーンも、次第に肌にまとわり付く海風を不快に思い始めたのか、顔を歪めながら口を開いた。

「何で昨日、俺の居場所がわかったんだ？」

セヴァーンが昨日マチルダに殺されかけた瞬間飛び込んだクレス。セヴァーンはあの後すぐに気を失ってしまったが、あの凄まじいタイミングが気になっていた。

「シェリスのおかげだ」

クレスはそれだけ言うと、白波が起つ海へと目を向ける。日の光を受けて輝く水面は美しいが、そのあまりの眩しさにクレスは真っ

黒な瞳を細めた。

「正確には大精霊、イーユデッサのおかげです」

シェリスが虚空を見つめながらそう言ったのを見て、セヴァーンは一度頷いた。そしてセヴァーンはシェリスが見つめる先を見ながら笑顔を浮かべる。

「お前にも見えるのか？」

「いや、俺にはシンクロの才能があんまりねぇからな、見えやしねぇ」

セヴァーンは頭を掻きながらそう言うと、一度大きな欠伸をする。

「まぁ魔術使えねぇクレスよりはいいけどな」

セヴァーンはクレスが魔術を使えない事を知っている。旅を一緒にする事が決まってから、クレス自身が教えたのだ。

これは、一緒に闘う中で仲間の事を知っておくのは重要だというクレスの考えがあっての事だ。

「俺ちょっと中で寝てるわ」

明らかに寝不足なセヴァーンは吐き捨てる様に言うと、二人の返事を待たずに甲板を歩き始める。

明らかに野暮ったい動きをしながら歩いて行くセヴァーンを視界の端に置きながら、シェリスは隣に立つクレスを見つめた。

「クレスさんは大丈夫ですか？」

「あぁ、大丈夫だ」

そう言ったクレスだが、実はかなり眠気を堪えていた。気を抜けば一瞬で瞼が落ちる、今のクレスはまさにそれだ。

だからこそ、クレスは少しでも気を紛らわすために、シェリスに聞いてみたかった事を口にする。

「なぁ、シェリス」

「何ですか？」

眠気に襲われているクレスにとって、優しげなシェリスの声は子守唄に聞こえなくもない。

「……大精霊はお前の側から離れないんだよな？」

言ってから、クレスは左手で目を擦り右手で欠伸を押さえる。

「はい、そうですよ」

シェリスは眩しいのか、海の様な瞳を細めながらクレスを見つめる。その隣には大精霊イーユデッサが佇んでいるのだが、勿論クレスには見えていない。

「じゃあ、何で大精霊はセヴァーンの居場所がわかったんだ？　前にも、俺が昨日の赤いのと闘ってるの知ってたし……」

クレスの言葉に、シェリスは気持ち程度口角を上げた後、頬を緩

めた。

「イーユデッサが他の精霊に聞いたのを、私に教えてくれてるんですよ」

「他の精霊？」

クレスは自然と聞き返していた。

「はい。空気中には人間と契約をしていない、沢山の精霊達が飛び回ってるんですよ」

「そうなのか？」

クレスは自分には見えない事を知っているのに、キョロキョロと辺りを見回す。

クレスの真っ黒な瞳に映るのは、空の青と海の青だけだった。

「常識の一つですよ」

シェリスはそう言うと、キョロキョロしているクレスを楽し気に見つめた。そしてシェリスは確信した、クレスに少し天然な部分がある事を。

「一般的な常識は、俺には通用しない」

クレスは急に声のトーンを落とすと、首に下げたペンダントへと手をやった。

ペンダントのトップには盾を貫く剣。銀で出来たそれは、海面か

らの光を反射して煌めいていた。
少し顔を傾けペンダントを見つめるクレス。その顔に張り付いたのは、不適な笑み。
「俺は魔術が使えないんだからな」
そう言って顔を上げたクレスは、楽し気な笑顔を浮かべてシェリスを見つめる。
その笑顔を見たシェリスは、真っ青な瞳を細めクレスに返す様に笑顔を浮かべた。嬉しかったのだ、だが、何故嬉しかったかのかはシェリスにもわからない。
「そういえば……」
何かを思い出した様な表情を浮かべたシェリス、クレスはそれを見逃さなかった。
「どうかしたのか？」
「そのペンダントの意味、まだ聞いてませんでした」
その言葉に、クレスは右手で持ち上げていたペンダントを見つめる。そして思い出す、アレンが自分にこのペンダントを作ってくれた時の事を。
自身の記憶を探りながら、クレスは小さく微笑んだ。
「コレは俺が幼い時に、アレンが作ってくれたんだ」

「そこは前にも聞きました」

クレスは頬を掻きながら、自分を急かす様に見つめるシェリスを見つめ返す。

少し強めの風が、綺麗な青を揺らしていた。

「幼かった頃の俺はな、自分が魔術を使えない事が嫌で嫌で仕方なかった……」

クレスがポツリとそう言うと、シェリスの青い瞳に陰りが射す。そんなシェリスを見て、クレスは少し焦ると訂正するために口を開く。

「今は全然気にしてないんだから、シェリスが気にするな」

ちょっと慌てながら、クレスは体の前で手を振る。

「それでもその時のクレスさんの気持ちを考えると……」

少し小さめなその言葉。クレスはそれを何とか聞き取ると、少しうつ向いたシェリスの頭を掴んだ。

一瞬、ビクッと肩を震わせるシェリス。だがクレスはそんな事に構わず、シェリスの頭を掴んだまま離さない。

「そう言われるのが一番嫌いだったな」

クレスは自分が掴んだ青い頭を見つめながらそう言う。すると、シェリスの頭が更に沈む。

「……すいません」

またもや小さな声でそう言ったシェリスの表情は、クレスからは窺えない。

「けど、今は全く気にしてない。結局は過去だしな」

クレスが頭を掴んでいたシェリスの顔が急に上がる。真っ青な瞳は少し憂いを帯びていた。

「本当に、全く気にしていないんですか？」

「そう言われると、まぁ少しはあるかな」

クレスがそう言うと、シェリスはまた顔をうつ向かせようとした。だが今度はそれは出来ない、クレスの腕がそれをさせない。

「プッ……」

クレスは自分に頭を掴まれているシェリスを見て、思わず笑い始める。

「こんな話してる時に笑わないで下さい！！」

急に頬を膨らましながら騒ぐシェリス。それを見たクレスは、更に笑ってしまった。

笑い続けるクレス。それを見ていたシェリスは、自分が気にしていた事が馬鹿らしくなってきた。

何しろ自分が気にしていた張本人が、目の前で声を出して笑って

いるのだから。

「それで、魔術が使えない事を悩んでいた幼いクレスさんがどうしたんですか？」

だから、シェリスは言ってやった。皮肉めいたその言葉を。

「そんな俺にアレンがこれを作ったんだよ」

シェリスの皮肉など全く気にしないクレスは、青い頭から手を放すとまたペンダントを手に取った。

「盾は『常識』、それで剣が『俺』」

クレスがそう言うと、シェリスは首をかしげながらペンダントを見つめる。

そんなシェリスを見つめながら、クレスはアレンの言葉を思い出していた。

「盾を貫くには、普通の剣じゃ到底無理だ」

クレスが人差し指を立てながらそう言うと、シェリスはその言葉に首を縦に振る。

「ただ、名剣って呼ばれる剣の中には一撃で盾を貫く様な剣もある。アレンは俺に、『名剣になれ！！』って言ったんだ」

「名剣にですか？」

また首をかしげるシェリス。その青い瞳はクレスのペンダントを

映す。
クレスは真っ黒な瞳を細めながら、自分の前に立つシェリスの行動を見つめた。そしてクレスは確信した、この賢者様は頭の回転はそこまで良くないと。

「アレンは幼い俺に『常識と言う盾を貫く剣になれ』そう言ったんだよ」

一段と強い風が、船首に佇む二人の髪を弄ぶ。黒い髪と青い髪は、風に逆らう事を知らない。

「幼い俺はその時誓った。いつか魔術が当たり前のこの世界で、一番強い戦士になるって」

そしてクレスは笑った。釣られる様にシェリスも笑う。

二人の間を駆け巡る風は、そんな二人の髪を揺らす。
それはまるで、これから先待ち受ける困難を知らない二人を嘲笑うかの様だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7779f/

Defective Swordsrman

2010年10月13日18時32分発行